

令和4年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における
障害者等による
文化芸術活動を
促進させるための
コア人材の
コミュニティ形成を
軸とした基盤づくり
事業：リサーチ

報告書

HAPS



令和4年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における
障害者等による
文化芸術活動を
促進させるための
コア人材の
コミュニティ形成を
軸とした基盤づくり
事業：リサーチ

報告書

はじめに

一般社団法人 HAPS では令和 4 年度より「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を軸とした基盤づくり事業」を開始しました。HAPS としては新しい、非常にやりがいのある取り組みであり、代表として大変嬉しく思っています。

振り返ってみると HAPS は若手芸術家支援の団体として 2011 年に発足しました。ここでいう「若手」とはエスタブリッシュされていないという意味であり、社会的な認知や商業的な成功を得られていないアーティストたちのことでした。彼らをサポートすべく居住・制作・発表の場づくり事業として HAPS はこれまで様々なプログラムを展開してきました。実際に経験する中でわかったことは、HAPS の事業は広い意味での表現者をサポートすること、あるいは表現自体を擁護することが本筋であって、決して狭い意味での現代美術的な成功例を提供することではないということです。システムからこぼれ落ちてしまうものをいかに丁寧に掬いとっていくのか。そのような試行錯誤の日々が現在の HAPS をかたちづくってきたと言えます。

この報告書で提示される、障害のある方の表現をめぐる美術館の諸問題は、これまでの HAPS の方向性の延長線上にあると言えるかもしれません。作品とは、芸術とは、表現とは何か、という問いが、そもそも人間とは何かという根源的な問いと響きあう。その響音の中に美術館を置いてみる。そこにおいてさまざまな共有と協働が開き、身を結ぶことを強く期待しています。

一般社団法人 HAPS 代表理事 遠藤水城

003 | はじめに
文：遠藤水城

006 | 令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業」について
文：中川眞

008 | リサーチ概要
文：中西美穂

016 | リサーチ 01
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
文：中西美穂

1. 条例・計画・美術館運営ビジョン
2. アート・コミュニケーショングループ
3. さまざまな人が安心して参加できる工夫
4. 妥協のないつくりの「造形スタジオ」
5. 床一面の Color MIMOCA !
6. 子どもは観覧料無料
7. 出会いをつくり、つながっていく

026 | リサーチ 02
徳島県立近代美術館
文：中西美穂

1. “ユニバーサル”のきっかけ
2. 展示室に車椅子ユーザーの視線を取り入れる
3. クラウドファンディングによるアール・ブリュット作品購入プロジェクト
4. サポーターのゆるやかな主体性
5. 手づくりの「触図」
6. さまざまな連携
7. 障害者等の芸術活動と美術館

036 | リサーチ 03
三重県立美術館
文：福島尚子

1. 多感覚鑑賞が誕生するまで1（特別支援学校での取り組み）
2. 多感覚鑑賞が誕生するまで2（鑑賞ツールの作成）
3. 「美術にアクセス！
－多感覚鑑賞のすすめ」展
4. 触る鑑賞と感染リスク
5. 携わる人みんなで考えていく
6. 「三重県立美術館のめざすこと」
7. 取り組みの持続に向けて

044 | リサーチ 04
福岡アジア美術館
文：中西美穂

1. 交流・教育係
2. 障害がある方への取り組みから
3. ワークショップ「今津の風景をつくろう」
4. 在福外国人の生活に触れる
5. 20年ぶりでもつながれる
6. ボランティア力
7. 地域プロジェクトとアーカイブ

052 | リサーチ 05
福岡市美術館
文：中西美穂

1. 美術館のミッションステートメントと教育普及の活動方針
2. スクールプログラムとボランティア
3. アウトリーチプログラム
4. 公民館での高齢者向けアウトリーチプログラム
5. 認知症患者のための美術館・博物館による回想法プログラム
6. 和田千秋の作品《私を私自身から救ってください（「障碍の美術 X- 折り」より）》の対話型鑑賞
7. 情報周知と連携

062 | リサーチ 06
兵庫県立美術館
文：福島尚子

1. 「美術の中のかたち」のなりたち
2. 作品に“触れる”展覧会
3. 展覧会の中と外での創意と工夫
4. 美術館の体制

070 | リサーチ 07
茅ヶ崎市美術館
文：中西美穂

1. 「じぶん」をテーマにした展覧会（2014-2016）
2. “手触り”と“香り”のコミュニケーション型の作品
3. 県内の美術館・芸術祭が連携する「マルバ」への参加
4. 「わからないことを楽しむ」こと
5. 美術館まで(から)つづく道(2018-2019)
6. 美術館が成せる技

080 | リサーチ 08
新潟市美術館
文：福島尚子

1. 始まりとなった「アナタにツナガル」展
2. 受け入れ体制と態勢
3. 前山館長による美術館外の取り組み
4. 学校向けのプログラム
5. アクセシビリティをよくしていくとは
6. 感覚の違い・鑑賞形態の違い

088 | リサーチ 09
世田谷美術館
文：中西美穂

1. ある日の世田谷美術館と地下創作室
2. 「美術大学」とボランティア
3. 居場所としての美術館
4. 目の見えない人、
耳の聞こえない人との実践
5. つながりととまどいと
6. 【追記】世田谷美術館の障害者等の芸術活動に関わる展覧会の一側面

124 | “公立美術館における障害者等による文化芸術活動”
令和4年度調査から見えた10のテーマ
文：中西美穂

129 | 令和4年度 障害者等による文化芸術活動推進事業 公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業リサーチチーム・プロフィール

096 | リサーチ 10
東京都美術館
文：中西美穂

1. アート・コミュニケーション事業
2. 「とびらプロジェクト」のアクセス実践講座
3. 障害のある方のための特別鑑賞会
4. 認知症の方や高齢者を対象にしたプログラム
5. “障害者アート”展の実績をよむ
6. ひろがり

106 | リサーチ 11
金沢21世紀美術館
文：中西美穂

1. ミュージアム・クルーズを通じた多様な子どもたちとの出会い
2. ろう者が主体となるワークショップ
3. 「内藤礼 うつしあう創造」を手話でどう訳すか？
4. 体制とさまざまな取り組み
5. カフェレストランを会場とした若年性認知症カフェ
6. 共催企画とアーツカウンシル
7. 都市間の芸術交流と障害のある人の関り
8. 一緒に働く仲間、同じ街に暮らす人として

116 | リサーチ 12
長野県立美術館
文：福島尚子

1. 礎となった長野県信濃美術館時代
2. 屋根のある公園として
3. 建て替えのタイミングで出来たこと
4. 事業の精査
5. 障がいのある方のための特別鑑賞日
6. 規模が大きくなったからこそできたこと・難しくなったこと

文化庁の令和4年度障害者等による 文化芸術活動推進事業

「公立美術館における障害者等による

文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を 軸とした基盤づくり事業」について

文：中川真

本事業は、(国立を含む)公立美術館の学芸員ならびに教育・普及担当員等の職員を対象として、館が障害者等の関わる文化芸術活動(発表、鑑賞)並びにアクセシビリティに関する多面的な手法を大きく発展させ、積極的に館の事業に取り組めるようになるための相互連関する5つのプログラム(①カンファレンス、②リサーチ、③パイロット[モデル]事業、④人材インベストメント講座、⑤アーカイブ)を実施することを通して、公立美術館における障害者等に関わる企画・展示・所蔵・アウトリーチが活発となり、また障害等を含む多様な属性を持つ市民が美術館をより身近なものとして利用できる社会の出現をめざすことを目的としている。

近年、法改正等の整備により、障害者等の関わる文化芸術活動の機会は増えているが、多くの取り組みが民間主導である。公立美術館で企画展は散見されるものの、一部を除いて動きが鈍いというのが現状である。公立美術館は我が国の文化環境を牽引する公共性を担っており、その低調は我々の文化・芸術生活を直撃する。低調の原因を探り、克服への道筋をつけるのが本事業の役割である。公立美術館が先導的に取り組めば、その影響力には計り知れないものがある。本事業はそのような全国のモデルになるような公立美術館づくりに寄与することを目標としている。

世界の文化政策が「多様性と社会的包摂 diversity & social inclusion」から「公平と正義 equity & justice」へと具体性をもった目標に移行するなかで、美術館もその一翼を担うべきであるというのが本事業のモーメント(動因)にある。それは、美術館がスローガンの「公平と正義」のメッセージを伝えることではなく、芸術的才能のある人を公平に取り扱い、また障害があっても利用しやすいフェアな環境を作ることによって、社会全体の芸術活動の享受・理解を深め、生活の質を高めることを意味している。憲法13条が定める幸福追求権、第25条が定める文化権を保障することにもつながるのである。

美術館が変わるためには、条例や制度の充実もさることながら、運営に直接的に関わる人々(学芸員や職員、ボランティア)などの意識、行動の変容が必須である。障害者等の芸術はアール・ブリュット、アウトサイダー・アートの一部として20世紀前半より欧米において認知され、我が国との作品交流も1970年代から活発に始まっているが、学芸員、とりわけ展覧会担

当学芸員の間には依然として戸惑いや拒否感が残っている。障害者文化芸術活動推進法(2018)や東京五輪・パラ関連での政策的展開など、推進のベクトルが高まる一方で、それを支える価値観や評価基準、手法が整えられておらず、このままでは頭打ちの可能性はある。

それではどうしたらいいのか、という問いに答えようとするのが本事業の基本点である。単純に考えれば、学芸員や職員、ボランティアの方々を対象とした体系的な研修プログラムを作り、実施すればいいのではないかとするが、事態はそう単純ではなく、複合的な問題として捉える必要があることが令和4年度の事業取り組みの中で明らかとなってきた。要因は現場の人々だけではなく、美術館の組織的構造、統治体制にもあるだろう。また、美術館を外側から支える、行政、作家、新聞社などメディア、出版社、鑑賞者など多岐にわたるステークホルダーの在り方も同時に視野に入れる必要がある。責は学芸員個人に帰されるのではなく、相互作用的な文脈の中にあるといえる。本事業は美術館をめぐるそのような複雑な構造を射程に入れながら、上記の目的を達成するための優先的な対象、方法を吟味、選択した上でプログラム化したものである。

以上が本事業の基本理念であるが、実状を把握するためにはリサーチが必須である。今年度は12館を訪問し、多彩な取り組みについてのお話を担当者から何ううちに、上記のような「上から目線」的な思考はあっという間に解体され、多くの学びを与えていただいたことに心より感謝したい。HAPSはこれまで、どちらかといえば美術館やギャラリーの外側の空間での芸術活動の可能性を、共生社会の実現という目標のもとに追究してきたが、そこで得た経験、知識を美術活動の本丸ともいえる美術館へフィードバックし、その対話の中から新たな芸術的関係性(受容と創造)を生み出そうとするのが本事業の要諦である。今年度の作業を踏まえて、来年度もまた全国の美術館訪問の旅を続け、その目的に叶うような結果を出していければと考えている。

リサーチ概要

文：中西美穂

このリサーチは、文化庁より委託を受け一般社団法人 HAPS が主催した「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業」の一部門として、公立美術館を中心に障害者等の関わる文化芸術活動に関する質的な調査を行い、美術館で実施される障害者等の関わる文化芸術活動の企画・運営にあたる有益な情報をまとめ、一部を公開することを目的としている。

調査対象となる公立美術館の選定は、一般社団法人 HAPS による事前調査をもとに、調査者の合議で決定した。その際に、網羅的に行う、あるいは地域バランスを優先するということよりも、新型コロナウイルス感染症拡大がまだ続く中、訪問調査の実現性が高い候補館を優先した。各館の調査対象者は一部を除き、各館の代表連絡先に電話あるいはメールにて当調査の主旨を説明し適任者の紹介をお願いした。

訪問調査においては、蔵原藍子（一般社団法人 HAPS 事務局長）、中川眞（大阪公立大学特任教授、一般社団法人 HAPS 文化庁事業監修）、中西美穂（国立民族学博物館外来研究員、一般社団法人 HAPS コーディネーター／リサーチャー）、福島尚子（一般社団法人 HAPS リサーチャー）の4名で分担し、うち2回は四元秀和（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課文化力活用創生担当課長）も同行した。対面で約90分間インタビューを行った訪問館と訪問日、訪問者は【表1】の通りである。

公開する調査内容については、インタビューをもとに5000字程度のレポートにまとめた。なおレポートにおける専門用語と範囲については以下の通りとした。

- (1) 「障害者等の芸術活動」については、障害者アート、障害者美術、アール・ブリュット、アウトサイダーアート、エイブルアート等、日本語においてさまざまな名づけがある。調査全体で統一せずに、訪問インタビュー時の言葉を尊重しながら、各館と調整して用いる。
- (2) 「障害者」という言葉においても「障害がある人」「当事者」「目が見えない人」「視覚障害者」「車椅子ユーザー」「発達障害」など、その状況や立場において様々な言い方がある。調査全体で統一せずに、訪問インタビュー時の言葉を尊重しながら、各館と調整して用いる。
- (3) 従来は直接的に「障害者等の芸術活動」に関わるとされない「共生社会」や「社会包摂」において対象範囲となる高齢者や外国人等に関わる取り組みは、アクセシビリティや表現の位置づけ等において「障害者等の芸術活動」と課題を共有しうると考え、調査全体で統一した書き方はしないが、インタビュー時の対話を尊重しながら、各館と調整し可能な限り記述する。

レポート作成においては、訪問館とやりとりして仕上げ、調査者らで内容を分析した上で本報告書を作成した。本報告書は一般社団法人 HAPS のホームページに pdf にて公開し、訪問館には印刷した冊子を送付した。

【表1】令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」訪問調査館一覧

館名	訪問日	調査者等
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	2022年9月30日(金)	蔵原、中西
徳島県立近代美術館	2022年10月5日(水)	中川、中西
三重県立美術館	2022年10月6日(木)	中川、福島
福岡アジア美術館	2022年10月13日(木)	蔵原、中西
福岡市美術館	2022年10月13日(木)	蔵原、中西
兵庫県立美術館	2022年10月14日(金)	蔵原、福島
茅ヶ崎市美術館	2022年10月19日(水)	中川、中西、四元
新潟市美術館	2022年10月21日(金)	中川、福島、四元
世田谷美術館	2022年11月12日(土)	中川、中西
東京都美術館	2022年11月13日(日)	中川、中西
金沢21世紀美術館	2022年11月29日(火)	蔵原、中西
長野県立美術館	2023年1月6日(金)	蔵原、福島

【参考】

- 資料1
「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」にかかる調査へのご協力のお願い
- 資料2
2022年度文化庁調査事業リサーチ質問概要（2022年9月23日更新）
- 資料3
「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」レポート記述・書式について

HAPS

東山 アーティスト・プレースメント・サービス
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町 339
TEL 075-525-7525 FAX 075-525-7522 E-MAIL info@haps-kyoto.com URL http://haps-kyoto.com

2022 年 10 月吉日

様

「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材の
コミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」にかかる調査へのご協力をお願い

一般社団法人 HAPS（※）では、令和 4 年度「障害者等による文化芸術活動推進事業」を文化
庁より受託し、「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材
のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業」に取り組むことになりました。

本事業は、障害者等の関わる文化芸術活動（発表、鑑賞）に関する多面的な手法を大きく発展
させ、積極的に活動に取り組めるようになるために、公立美術館の学芸員、教育・普及担当員等
の職員、アーティスト、現代美術のキュレーターらとともにその基盤を作ることを目的としてい
ます。

事業の一環で行う「リサーチ」では、障害者等の関わる文化芸術活動について公立美術館を中
心にヒアリングを依頼し、美術館で行われてきた障害のある人々との取り組み、企画、運営につ
いての有益な情報をまとめ、広く共有することを目指しています。

このたび貴館にリサーチのご協力をお願いしたく、ご検討のほどよろしくお願いたします。

※HAPS は、京都市による「京都文化芸術都市創生計画」において計画された「若手芸術家等の居
住・制作・発表の場づくり事業」を主たる業務とする団体として、2011 年に設立いたしました
(2019 年に事務局を法人化)。芸術家支援を軸に、広く、京都市内や社会における豊かな創造性の循
環を作り出すことを目標に、活動を重ねてまいりました。2017 年からは、そうした取り組みを広
げ、文化芸術の力を活用して、多様な背景を持つ人々が、共に生きることのできる社会のあり方を探
り、その仕組みづくりを目指す事業（「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」）を実
施しております。

HAPS

東山 アーティスト・プレースメント・サービス
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町 339
TEL 075-525-7525 FAX 075-525-7522 E-MAIL info@haps-kyoto.com URL http://haps-kyoto.com

【リサーチ概要】

調査の目的

公立美術館を中心に、障害者等の関わる文化芸術活動に関する質的な調査を行う。美術館で実施
される障害者等の関わる文化芸術活動の企画・運営にあたる有益な情報をまとめ、一部を公開す
る。

調査の方法

- ・調査員および事業担当者が貴館へ訪問し、約 90 分間ヒアリングを行います。
- ・内容は録音し、文字起こし等を行った上でまとめます。記録のための写真撮影を行います。録
画はしません。

調査の報告

- ・ヒアリング内容を調査員が 5000 字程度にまとめ、事業ウェブサイトにて一般公開します。
- ・公開前に、ヒアリング協力者に内容確認をお願いし、修正等を行ったものを公開します。

データの取り扱い

- ・インタビュー録音として取得したデータや個人情報は、調査目的以外には使用しません。この
保管データは、調査が終了してから 5 年後までに破棄します。

リサーチについて何かご不明な点がありましたら遠慮なくお尋ねください。

本調査へのご理解とご協力のほど、よろしくお願いたします。

【本調査監修】

中川 眞（大阪公立大学）

【主催・問い合わせ先】

一般社団法人 HAPS

〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町 339

TEL 075-525-7525 Fax 075-525-7522

2022 年度文化庁調査事業リサーチ質問概要（2022 年 9 月 23 日更新）

インタビューは、状況に応じてゆるやかに進行致します。

時間が許すならば質問に直接かわからないことも含め、さまざまにお話を伺いたく思います。

1. こちらからの調査主旨説明

2. お話しいただく方について（後日確認でもよい）

①お名前、②ご所属、③役職（常勤、非常勤）、④勤務年数、⑤障害者等による文化芸術活動に関する教育・研究の有無

3. 館について（後日確認でもよい）

①正式名称、②設置年、③設置にかかる条例、計画等、④運営主体、⑤昨年度決算、⑥職員数（うち学芸員数）

【ここより一問一答でなく、可能ならば対話的にすすめる】

※お話しいただいた全てを公表するわけではありません。公表前に必ず確認します。

4. 館における障害者等の関わる文化芸術活動について①

・具体事例やエピソードをお願いします。必ずしも全てに解答する必要はありません。

鑑賞機会に関すること、創造機会に関すること、作品発表の場に関すること

館企画の展覧会に関すること、所蔵作品に関すること、交流促進に関すること

窓口（相談含む）に関すること、人材の育成に関すること、情報の収集に関すること

5. 館における障害者等の関わる文化芸術活動について②

上記のうち特に館の特徴・強み・唯一の出来事だと思ふことは何ですか？複数でも、また、ここにはない項目でも可能です。

6. 館における障害者等の関わる文化芸術活動について③

現在、課題だと感じていることはありますか？

7. 館に限らず、「公立美術館における障害者等の関わる文化芸術活動」についてお話しをしていただけること（情報、疑問、課題、可能性、その他）があればお願いします。

8. その他、調査について質問があればお願いします。

以上

2023 年 1 月 13 日

「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」 レポート記述・書式等について

調査に関わる専門用語と範囲について

- (1) 「障害者等の芸術活動」については、障害者アート、障害者美術、アール・ブリュット、アウトサイダーアート、エイブルアート等、日本語においてさまざまな「名づけ」がある。調査全体で統一せずに、訪問ヒアリング時の言葉を尊重しながら、各館と調整して用いる。
- (2) 「障害者」という言葉においても「障害がある人」「当事者」「目が見えない人」「視覚障害者」「車椅子ユーザー」「発達障害」など、その状況や立場において様々な言い方がある。調査全体で統一せずに、訪問ヒアリング時の言葉を尊重しながら、各館と調整して用いる。
- (3) 従来は直接的に「障害者等の芸術活動」に関わるとされていないが「共生社会」や「社会包摂」において対象範囲となる高齢者や外国人等に関する取り組みは、アクセシビリティや表現の位置づけ等において「障害者等の芸術活動」と課題を共有しうる。調査全体で統一した書き方はしないが、ヒアリング時の対話を尊重しながら、各館と調整し可能な限り記述する。

書式

- (1) 投稿原稿はすべて横書きとし、使用言語は、日本語とする。
- (2) A4 版の用紙にワープロで見やすく印字し、ページ番号を付したものを送付する。
- (3) 文体は“である”調とし、原則として当用漢字、新仮名遣いを用いる。
- (4) 数字はアラビア数字を用い、数字および英字は半角とする。ただし、1 ケタの場合は全角とする。
- (5) 「,」「。」「()」などの記号類は原則として全角とし、「(1)」のような場合のみ半角とする。
- (6) 句読点は「,」や「.」ではなく、「,」「。」とする。
- (7) 原則として西暦を用い、年号を使用する場合には「1985(昭和 60)年」のように記す。

図版

- (1) 本文の余白部分に、およその挿入位置を指定する。原則として、1 枚につき 200 字相当とする。
- (2) そのまま版下として使えるような明瞭なものを、印刷及びWEB掲載用に用意する。

注・文献引用

- (1) 注を用いる場合、該当箇所の上付き文字で 1)、2) と通し番号を付し、本文の最後

2023年1月13日

にまとめて記載する。

- (2) 典拠した文献を示す注は、本文中の適切な箇所に[著者の姓 発行年]を記載する。
- (3) 文献からの引用を行った場合には、[著者の姓 発行年：引用ページ]とする。
- (4) 文献は以下の形式で文献リストを作成する。
 - 配列順序：著者のアルファベット順とする。
 - 単行本の場合：著者名（姓・名の順）、発行年、『書名』発行所名。
 - 翻訳本の場合：原書の著者名、発行年、書名、発行所名。（＝訳者名、発行年、『邦訳名』、発行所名）
 - 雑誌の場合：著者名（姓・名の順）、発行年、「論文表題』『掲載雑誌名』巻号、発行所名。
 - 欧文雑誌名、書名はイタリック書体とし、「……発行所名：発行都市名。」というふうに発行都市名まで記載する。
 - 文献の本题と副題は「：」で区切る。

事例およびデータの取り扱い

- (1) インタビューから得た記述を原文のまま使用する際は、本文中で言及するか当該箇所に注を付してその旨（インタビューの実施年月日や場所、情報提供者の名称等）を表記する。
- (2) レポートの発表に先立ち調査協力者・情報提供者にはかならず了解を得るものとし、プライバシーの保護についてもあらかじめ相談・協議のうえで氏名・機関名の匿名化を行うなど配慮する。

写真・絵画・作品等の取扱い

- (1) 写真・絵画等を転載する場合、版元より転載に関する承諾を得るものとし、引用文献を末尾に明示する。
- (2) 絵画・作品等を掲載する場合、作者あるいはクライアントより作品の掲載について承諾を得るものとし、その旨を本文中に記述する。後者の場合、プライバシーの保護についてもあらかじめ相談・協議のうえで氏名・機関名の匿名化を行うなど配慮する。
- (3) 写真家によって撮影された絵画写真・作品写真等を掲載する場合、写真家に承諾を得るものとし、写真家の氏名も併せて掲載する。
- (4) 臨床現場・実践現場で撮影された写真を掲載する場合、当該機関および写真の被写体より、写真の撮影や掲載について承諾を得るものとし、その旨を本文中に記述する。プライバシーの保護についてもあらかじめ相談・協議のうえで機関名・氏名の匿名化を行うなど配慮する。

(以上)

丸亀市 猪熊弦一郎 現代美術館

文：中西美穂

丸亀市猪熊弦一郎美術館はJR丸亀駅から徒歩1分である。館名にある画家・猪熊弦一郎は「美術館は心の病院」との言葉を残している。本調査では、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館アート・コミュニケーショングループ広報・教育普及連携交流担当長の奥本末世（以降、奥本さん）と、丸亀市産業文化部文化課主査（併）丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 総務グループ行政連携担当長の増田龍一（以降、増田さん）にお話をうかがった。

1. 条例・計画・美術館運営ビジョン

市民、アーティスト等と美術館との関りの基本は、各自治体の美術館に関わる市条例、計画、ビジョンに表される。増田さんは、2019年4月に美術館を管理運営する公益財団法人ミモカ美術振興財団に派遣され、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の運営改善を担当することとなり、指定管理料の見直しや業務整理を行った。「美術館がどういう経緯で建てられたか」「美術館の公益的な役割」等を市が策定する指定管理業務の基準で示し、減少しつつあった指定管理料を館の役割に見合った金額に戻した。その後、2022年4月には、丸亀市文化芸術基本条例の改正、丸亀市文化芸術計画及び第2次丸亀市猪熊弦一郎現代美術館運営ビジョンの策定を手掛けた。

丸亀市文化芸術基本条例は、香川県内初

となる2005年3月に施行され、当初「丸亀市文化振興条例」との名称であった。昨年度の2022年4月の改正において、国になり名称を「丸亀市文化芸術基本条例」に改めた。また、法の理念にのっとり、施策推進に当たって踏まえるべき基本理念を定め、「目的」を達成するために、市民等、文化芸術活動を行う者のあるべき姿を規定する「第2条（基本理念）」が新設された。その基本理念の7事項は以下の通りである。

- (1) 豊かな風土及び歴史によって培われた丸亀市の多様な文化芸術が市民の共通の財産として認識され、将来にわたり継承、発展及び創造されるよう考慮すること。
- (2) 全ての人とその年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく、文化芸術に親しみ、参加し、又はこれを創造することができるような環境の整備を図ること。
- (3) 文化芸術活動を行う者の主体性、自主性及び創造性を十分に尊重すること。
- (4) 市民等、文化芸術活動を行う者の意見が反映されるよう十分考慮すること。
- (5) 文化芸術に関する創造的な活動がより一層活性化するために、世代間及び地域間の交流並びに国内外との交流の促進を図ること。
- (6) 乳幼児、児童、生徒等に対する文化芸術に関する教育の重要性に鑑み、学校等、文化芸術活動を行う者、家庭及び地域活動を行う者の相互の連携が図られるよう配慮すること。
- (7) 文化芸術の固有の意義と価値を尊重し

つつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携により、その社会的経済的価値の醸成を図ること。

この条例に基づき施策を具体的に示すのが丸亀市文化芸術基本計画であり、2022年4月に策定された。上位計画となる第二次丸亀市総合計画の後期（2022年度から2025年度）のスタートに足並みを揃えた。計画の策定にあたっては（1）丸亀市文化芸術推進審議会による審議、（2）市民アンケートの活用、（3）関係各課からのヒアリング、（4）教育委員会からのヒアリング、（5）文化芸術政策ゼミ、（6）文化振興講演会と、行政内部のみならず市民と共に文化政策を理解しようとする手厚い体制がある。なお、市民アンケートについては3000人の無作為抽出による郵送方式で回答率43.8%と、昨今のインターネットフォームを活用したスノーボール形式よりも信用がおける数字を出している。また、現況を示す資料として市内のプロアマ問わない文化活動や事業者、団体を網羅する一覧もつけている。同計画の基本理念を「新しい価値と新しいつながりを生み出す」とし、基本方針は5つ設定された。

- (1) 基本方針1 市民主体の文化芸術の推進
- (2) 基本方針2 多様な文化芸術の創造
- (3) 基本方針3 文化芸術を生かしたまちづくり
- (4) 基本方針4 歴史・文化の継承
- (5) 基本方針5 多様な文化交流による魅力発信

住所 香川県丸亀市浜町 80-1
〒763-0022
電話 0877-24-7755
ファックス 0877-24-7766
URL <https://www.mimoca.org>

上記の中で、本調査に最も関りがあるものは「(3)文化芸術を生かしたまちづくり」である。この方針を受けた目標は「多様性を受け入れ支え合う気風がまちに満ち、丸亀の魅力が高まっている」とし、基本施策の一番目に「文化芸術の持つ社会包摂機能の活用」を重点施策として示している。主な取り組みは①教育や福祉等との文化芸術を通じた連携、②「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館」「丸亀市綾歌総合文化会館」における社会包摂機能を生かした取組、③社会的処方に向けた取組の検討である。なお、これらの計画の推進については(1)市政の横断的な文化芸術施策の展開、(2)多様な主体が文化芸術に関わる横断的な体制づくり、(3)「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館」を中核とした施策展開、の三つを示している。

第2次丸亀市猪熊弦一郎現代美術館運営ビジョンは、上記二つを受け、美術館の設立経緯の再確認もあり、理念を猪熊の言葉「美術館は心の病院」とし、目指すべき姿を「人々に愛され、親しまれる美術館」と定めた。なお丸亀市美術館条例(2005年3月施行)は変更していない。

2. アート・コミュニケーショングループ

当館設立に尽力した丸亀ゆかりの画家・猪熊弦一郎は美術館を「子どもたちの感性が育つ場所にすること(※30th冊子p17引用)」という思いが強かった。従って同館のアート・コミュニケーショングループの活動では子どもに焦点をあてている。子どもたちは一人ひとりに個性があり背景も多

様である。特に子どもに焦点をあてることで、そこから、その子どものご家族や関係者などをはじめ—その中の障害がある方、引きこもりの方、経済的に困難な状況にある方々などにも活動を届け、これまでさまざまな理由で美術館に来られなかった人にも猪熊の作品や美しい空間に触れてもらえるような、ひろがりのある中長期的な企画として計画中等である。

このアート・コミュニケーショングループは、2021年4月に新設された。同美術館では、「文化庁文化芸術の振興に関する基本方針(第4次)における社会的費用や社会包摂機能への着目」、「新学習指導要領(2020年度)と大学入試改革(2024年度)」、そして「社会における“アート教育”の重要性」などの時代に即した組織の見直しを行い、同グループは学芸部門から独立した部門として設置した。常勤の担当者は、奥本さんと、増田さんの2名である。臨時職員は4名おり、合計6名体制である(2022年9月時点)。

立ち上げ年度より、美術を中心に、音楽や演劇、ダンスなどのワークショップや、地域連携事業を実施した。2021年度においては、子どもを対象とした「こどもMIMOCA」は10プログラム、地域連携を行う「プラスMIMOCA」は3事業である。例えば、地元企業の四国化成工業株式会社と共同企画し、香川県左官業組合連合会から講師を招いた「左官職人になろう!」、プロオーケストラ・瀬戸フィルハーモニー交響楽団と共同企画した「カラダで表現!瀬戸フィルハーモニー交響楽団 音楽ワークショップ」、ホールもある館の特徴を斬新に生かせる劇作家を講師に招いた「カラダ

で表現!ノゾエ征爾 演劇ワークショップ」等がある。各プログラムはゆるやかに連携している。例えば、「こどもMIMOCA」の音楽ワークショップの成果を「プラスMIMOCA」の誰でも立ち寄れる美術館でのマルシェで披露するなどである。詳しくは、同館発行予定の冊子『丸亀市猪熊弦一郎現代美術館アート・コミュニケーショングループ2022記録集』に掲載される。

同グループのスタートは、新型コロナ感染症拡大の影響が、文化芸術活動を縮小させてしまう時期となった。従って、当初から、大人数の参加者の受け入れを目指すことはできなかった。しかし、そのぶん参加者数よりも、どのようなプログラムであったのか、そこで参加者にどのような変化があったのかを、報告し周知するよう心がけている。このようにプログラムの実施だけで完結せず、成果も含め市民に開く活動姿勢は、コロナに関わらず、事業を続けていくうえで大事だと考えている。

計画の一つに、美術館に来ることが難しい状況にある方にもリーチするような派遣型プログラムがある。例えば、小学校にアーティストを派遣するダンスプログラムなど。従来の美術館による派遣プログラムは「美術館に行くための予習」のような形式が多く見受けられた。この従来の形式とは異なるアーティストの派遣により、まずは「アートを実感してもらおう」「正解のない授業を受けてもらおう」ことを目指したい思いがある。

これらの企画は、奥本さんが提案することが多いが、アーティストや学校などとの打ち合わせには、増田さんも参加し“密な”話し合いをすすめる。

「こどもMIMOCA」のワークショップでは、どのプログラムも毎回、応募者数が募集人数を大きく超える。奥本さんは、「開かれた美術館として、希望者は全て受け入れたいのですが、今の状況では、数をしばってやらざるをえない」と、心苦しさが胸の内にあるとのことであった。

3. さまざまな人が安心して参加できる工夫

プログラムの応募や参加時に障害の有無は問わない。一方で応募欄に「手話通訳や筆談の希望の有無、他」という項目を設けた。これは、奥本さんがこれまで関わった他地域でのアートプログラム経験からのアイデアであり、同館においては初めての試みである。現時点で「手話や筆談」の希望はないが、一つのプログラムにつき1~複数名ほど、「多動です」や「自閉症で説明がもう一回必要です」など、保護者により子どもの特性が記されており、それを参考に、子どもが安心して参加できるように、アート・コミュニケーションのスタッフが事前にサポート体制をつくっている。なお、一般募集するプログラム開催日以外の平日等にも、一般参加をためらう人々や施設を招きプログラムを体験できる取組も試みている。

増田さんは「いろんな子どもたちがいる。もくもくと、何かを作り続ける子や力強い絵を描く子など。それを見て、周りの子がびっくりする。そして自分もやってみようと思う。今までにない自分に出会うことで、“自分てすごいんや”、“自分の表現はこれ

でいいんや”って気づき、自信にもなるようだ。」と活動を見ている。奥本さんも「保護者ですら知らなかった子どもの姿や表現とか。名前も知らない、年齢も違う参加者同士が共同して一つのものを作るとか、そういうことがプログラムでちょっとずつ起きている」と言葉を重ねる。正解のないアートの体現ともいえる。

4. 妥協のないつくりの「造形スタジオ」

同館には、設立当初から猪熊の「子ども」への思いが反映された約12m四方の真っ白な壁面の「造形スタジオ」がある。現在のアート・コミュニケーショングループの活動拠点にもなっている。

館内にあるが、館内の展示室を通らずに、大階段から直接アクセスすることができる。子どものための造形スタジオだが、作った作品を吊り下げたり、壁に展示したりできる本格的なホワイトキューブである。奥本さんは「引き締まった空間で、展示室やホールなど館内のあらゆる場所とリンクするような妥協のないつくりをしているのは、さすが猪熊と谷口先生（建築家）だなと思います」と、その洗練された空間に共鳴している。

5. 床一面の Color MIMOCA !

この「造形スタジオ」の広いホワイトキューブの良さを最大限に生かし、多くの子ども達が参加できるプログラムが

「Color MIMOCA !」である。しかし、一言での説明が難しい。増田さんは「Color MIMOCA !は、パッと見た感じ、子どももおとなも、自由に絵を描いてくださいと、言う風に見えますが、単純にそういうことではない。アートを通じて多様性を受け入れる場を目指しています。いろんな人たちが同じキャンパスに絵を描くと、相手の絵を見ながら、「この表現がいいね！」と共感したり、先に描かれた絵を避けながら描いたり、重ねて描いたり、いろんなコミュニケーションがこの画面の中に同時におきる。一番重要なことは、参加者が素直に自分を表現すること。年齢や性別、国籍等に関係なく、障害を持っている方もそうでない方も、大人も子どもも、いろんな人が同じ環境にいることをめざしたい」という。

「Color MIMOCA !」には、さまざまな活動団体をリサーチする中で出会った、隣街の善通寺市でアート活動を取り入れている障害者施設「善通寺希望の家(注1)（以降、希望の家）」の協力が欠かせなかった。増田さんは、前章で紹介した市の文化政策を推進する立場上、様々な分野の方たちと交流しており、そこには本プログラムに参加した「とまと園」といった障害者福祉施設等も含まれる。

「Color MIMOCA !」のキャンパスは、約12メートル四方と巨大である。98枚のベニヤ板を床に敷き詰め、特別な養生テープでつなげ、スタッフがひたすら白ペンキを塗って真っ白な状態にした大きな造形スタジオの床一面がキャンパスである。

子ども達は日頃、学校や家の机で工作や絵を描く。その机は大きくはなく、創作作



【図1】Color MIMOCA ! 実施風景。(上) 希望の家の参加者たち (下) 一般応募の参加者たち
提供：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

品は机の大きさにあわせて小さくならざるをえない。「Color MIMOCA！」は床一面の大きなキャンパスに描く。描き始めは、エネルギーを持つ描き手を迎え、「Color MIMOCA！」が、小さくまとまりすぎない工夫をしたと思ったという。そこで、最初に「希望の家」の利用者で、既成概念を超えた表現をする描き手を招いた。

「希望の家」から来た描き手は20～30代以上、高齢の方も含め5名。当日、会場に到着すると、ある描き手は、画材のカラーマジックペンを持ち、白いキャンパスに迷いなく、いきなり描いていく。同行してきた施設スタッフは「普段、こんな絵を描かない、新しい境地に入った」と驚いたという。一方で、大きく描くばかりではなく、普段から「仮面ライダー」をモチーフにしてきた描き手は、いつもより絵が小さくなり、体を丸めて描く姿勢がとてもやわらかく見えたという。たった1時間ほどで、ばーっと○を沢山描き、床の1/4ぐらいを、一人で塗りつぶした描き手は、身体全体を大きく使っていたという。

「Color MIMOCA！」では後日、描かれたキャンパスに、スタッフが白ペンを重ね塗り、下の絵が薄っすら見える状態にする。別の日には、応募した参加者が、絵を重ねていく。入れ代わり立ち代わり総勢200名が参加した。先にある絵を、ぬりつぶすこともあるし、よけることもあるし、コラボレーションすることもある。そうやって、たくさんの人たちの絵の層が重なっていった。【図1】

6. 子どもは観覧料無料

開館以来30年間、子どもの観覧料は無料である。段階的に拡大され、現在、高校生以下または18歳未満の方は、常設展も企画展も無料である。またアート・コミュニケーションのプログラムの参加費もほとんどが無料である。材料費が必要となる場合でも、300円程度と安価である。

丸亀市では当たり前なことであるが、全国の美術館全てにおいて、子どもの観覧料は無料ではない。また、来訪者が自由に行きき出来る無料エリアが十分にゆったりとあるわけではない。同館は、無料エリアが多い。ゲートプラザも、ミュージアムショップも、カフェも、アートセンター内の作品前の心地よいソファも、美術図書室も、誰でもふらっと入ることができる。

他地域の他館と比較し、経済的なバリアがすでに下げられていること、それが同館の強みでもある。

7. 出会いをつくり、つながっていく

前述の通り、対象を定めなくても、障害の有無に関わらずアート・コミュニケーションのプログラムに参加しているのが同館の状況である。どのように企画をすすめているのか。

例えば、「Color MIMOCA！」のように、担当者のリサーチを活かして、施設に直接声をかけることもある。また30年にわたる美術館の実績の中でのつながりもある。同館の長期工事休館時に受けた出張講座先の

就労施設から「何かワークショップをしてほしい」と問い合わせがあったため、「Color MIMOCA!」を案内したところ、一般実施日とは別枠で参加いただき、来館につながった例もある。

そして、増田さんが市役所と美術館を併任し、顔が見える行政連携を日々行い、市役所の他分野での課題を把握し、ニーズを掘り起こせる強みがある。例えば、子どもを受け入れる場合、子育て支援部署に相談し、市が委託している支援施設を紹介してもらい、あるいは支援を専門とする大学の研究者にヒアリングに行き、支援団体や当事者の悩みを学ぶ。その中で「こういう場があったらいいな」というニーズを把握して、事業改善をしていく。このような行政連携は、市民の見えない文化芸術のニーズに応じていくとともに、美術館が市の課題を把握できる状態ともなっている。

増田さんは自身の動き方を「美術館の仕事としてではなく、フラットなコミュニケーションをとることが大切。事業をやりたいから、用があってあなたのところに来たんです。ではなく、こんなことを考えてるんですよ、と挨拶がてら行って、そのタイミングで普段の取組を聞かせてもらったりとか、そういった関わり方が大事です」と説明する。

同じ理念を持つ方との繋がりとして、独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターのホスピタルアートディレクター森合音さんと、奥本さん、増田さんの、月一回程の小さな研究会がある。「美術館は心の病院」という同館の猪熊の言葉は、森さんのみならず、医療とアートに関

わる全国の専門家の励みになる。研究会は、ランチ会も兼ねたラフなもので、情報交換を目的としているが世間話も入る。時には事業企画や進行について「やってみなよ」という、やわらかい応援の言葉もある。

【感想】

駅前にある現代アートのような美術館に一目で心奪われた。実際の活動をうかがう中で、市役所と美術館を行き来する増田さん、丸亀市以外でのアートプロジェクト経験がある奥本さんといった、多方面へのつながりを持つ人材の魅力にも気づかされた。そして異なる領域であるホスピタルアートディレクターとの小さな会は、本調査の目的とする「公立文化施設における障害者等の芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり」における、コア人材のピアサポートの在り方を示唆すると思えた。

(注1) 香川県善通寺にある社会福祉法人。生活介護と就労継続支援 B 型の利用者があり、共同生活援助施設を併設。メンバーにとって素敵なワクワクする 1 日になるように、「さをり織り軽作業」「クリーニングの取り次ぎ」「アート」「レクリエーション」等行う。また古着等を販売する店舗、善通寺市子ども家庭支援センター清掃業務受託、低農薬、有機栽培の野菜委託販売などを行っている

【調査概要】

実施日：2022 年 9 月 30 日（金）

場所：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
造形スタジオ

【調査対象者】

奥本未世（おくもとみよ）

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 / 公益財団法人ミモカ美術振興財団 アート・コミュニケーショングループ 広報・教育普及連携担当長。公益財団法人 福武財団での助成事業や日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS での舞台芸術事業などに関わってきた。2020 年 4 月に丸亀市猪熊弦一郎美術館の広報・教育普及担当に採用される。2021 年度よりアート・コミュニケーショングループの担当長。「既成概念にとらわれず、10 人いたら 10 人違う表現を引き出したい。そのような体験を美術館で経験してほしい」と考えている。

増田龍一（ますだりゅういち）

丸亀市産業文化部文化課主査（併）丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 / 公益財団法人ミモカ美術振興財団 総務グループ行政連携担当長。2000 年 4 月に丸亀市に入庁。2018 年 4 月に文化課に異動、2019 年 4 月に丸亀市猪熊弦一郎美術館に派遣となりその翌年度に、市に戻ったが、美術館に席をのこし併任。丸亀市役所で学芸員資格を有する人材として、美術館業務への理解も深く、行政と美術館現場との通訳のような役割を担う。市の文化政策を担当。「アートは難しいものではなく、生活の中にあり生命に満ちたもの。人々を勇気づけ、多様な価値観を生み出し、つながりを作ることができるもの」と考えている。

【参考資料】

丸亀市文化芸術基本条例

丸亀市美術館条例

丸亀市産業文化部文化課,2022『丸亀市文化芸術基本計画 - 新しい価値と新しいつながりを生み出す -』

丸亀市産業文化部文化課,2022『第 2 次 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館運営ビジョン』

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館,2021『MIMOCA 開館 30 周年 どこにもない美術館を目指して』

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館,2022『丸亀市猪熊弦一郎美術館アート・コミュニケーショングループ 2021 記録集』



丸亀市文化
芸術基本条例



美術館条例



丸亀市文化芸術
基本計画



美術館運営
ビジョン



MIMOCA
開館 30 周年
どこにもない
美術館を目指して

徳島県立 近代美術館

文：中西美穂

徳島県立近代美術館は、見晴らしの良い山の中腹にあり、博物館や図書館と屋根を共有している。徳島県立近代美術館係長・エドゥケーターの亀井幸子（以降、亀井さん）と、徳島県立近代美術館課長の吉川神津夫（以降、吉川さん）に、お話しをうかがった。

1. “ユニバーサル”のきっかけ

徳島県立近代美術館のエドゥケーターである亀井さんは、2011年に美術館に移動するまで、県内の養護学校（現在の特別支援学校）、聾学校などで美術科教員をしてきた。よって学校教育には、「いろんな障がいを持った子ども、いろんな事情を抱えた子どもたちもいる」との経験値があった。そして、かつての教え子たちにも美術館に来てもらいたいと思った。亀井さんの、障がいの有無や、事情の有無に関わらず「すべての人に鑑賞を楽しんでもらいたいという思い」は、学校教育との連携を経て、2011年に「ユニバーサル・ミュージアムの提案」につながり、館全体に広がっていったという。

徳島県立近代美術館におけるユニバーサル・ミュージアムとはどのようなものか。「聴覚障がい者、視覚障がい者など障がいのある方や、就学前の幼児、外国人、高齢者など、様々な特性がある方に楽しんでもらうことができる美術館づくり」[森・竹内・亀井：2017:23]であり、教育普及に位置づけられ、

「一般向けの催しの他、学校教育との連携が大きな柱となっており、年齢に応じた鑑賞支援に努め、特別支援教育諸学校の美術館見学の案内も受け入れてきた。その過程で当館職員がすべての人に鑑賞を楽しんでもらおうとする問題意識を暖め、鑑賞プログラムを蓄積してきたといえる。近年のユニバーサル・ミュージアム事業は、その土台の上で」[同]行われている。また特徴として「徳島では地味な実践に根差し、この動きに力を貸してくれる関係者と互いに顔を思い浮かべることができるようなローカルな歩みにこだわる面」[同:60]をあげている。

「ユニバーサル・ミュージアム事業」と正式に看板をあげたのは2014年から、県の新規事業として認知され、取り組みへの予算もついた。以降、さまざまな取り組みが続いている。しかし、亀井さんは「これも通過点かもしれない」という。

このユニバーサル・ミュージアム事業では、2014年より、隣接する博物館と一緒に5つテーマ「視覚障害」「聴覚障害」「外国人」「高齢者」「幼児」を持って取り組んできた。テーマを言葉にすると異なる状況の人となるが、共通項も見つかるかもしれない。なお、ここでの外国人は徳島大学に留学している留学生を対象にしていたが、今後は、徳島に来て、ここで働いている、根っこをはって暮らしている人たちとつながりたいとの思いもある。

ユニバーサル・ミュージアム事業は、特定の学芸員が担当するわけではない。展覧会を担当する学芸員とエドゥケーターとが「ぶつんときているのではなく、相互に」協力し実践している。そのような展覧会の

作品決定や展示空間は、最終的には展覧会を担当する学芸員がつくる。

2. 展示室に車椅子ユーザーの視線を取り入れる

同調査で直接話を聞くことはできなかったが、ユニバーサル・ミュージアム事業に関りが深い学芸員に竹内利夫（以降、竹内さん）（注2-1）がいる。竹内さんは、車椅子ユーザーが、展示ケースを覗き込みやすいように、ケースの脚を改造した。そのケースは普段の展覧会でも使える。

ある時は、「展示室に30センチの舞台をドーン！」と設置し、車椅子ユーザーや歩くことが難しい人が、マイペースで鑑賞してもらうことを目標にした展示も行った。展示会場の配置図は【図2-1】の通りである。

30センチメートルの台があれば、車椅子ユーザーは、立って見ている人と同じ目線で作品を見ることが出来る。ただし、実際に、車椅子ユーザーが美術館に来ることは簡単ではないという現実を知ることにもなった。車椅子が二台乗れる福祉タクシーの予約は3か月前までにしなければならない。車椅子ユーザー同士の夫婦が来館したければ3か月前に展覧会の詳細情報を知る必要があるが、通常的美術館情報では間に合わない。車椅子ユーザーにとって、病院に行く、役場に手続きに行くなど、日々の生活に必要なことの優先順位が高い。限られた保障の中で、美術館に行くための、福祉タクシーサービスを使う工夫も必要となる。

しかし、亀井さんは、やらなかったより、

住所 徳島市八万町向寺山文化の森
総合公園内 〒770-8070
電話 088-668-1088
ファックス 088-668-7198
URL <https://art.bunmori.tokushima.jp/>

やったことにより、車椅子ユーザーの生の意見を聞くことが出来たと考える。そして、どの取り組みも一回で終わりではなく、毎回の経験を、今後に生かしたい思いがある。

武骨な太いパイプでつくった柵のような手すりを作品の前に置いたこともある。鑑賞の妨げになると、一部には不評だったが、姿勢保持が困難な高齢の方や、足が痛い方が、ゆっくりと、もたれて見ることが出来る状況が展示室に生まれた。全ての人に都合なことはない。つまり、誰かが辛抱していたことにも、気づかされる。「いろんな提案をすることで、いろんな発見につながる」とのことであった。

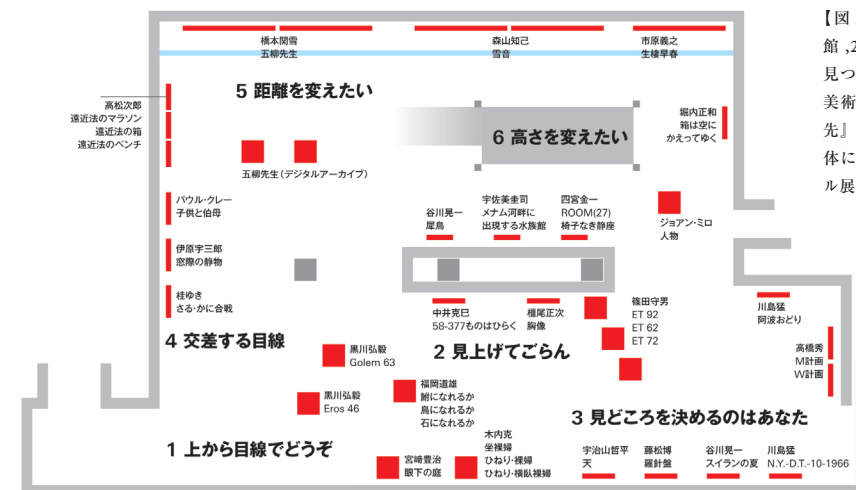
吉川さんは、ある車椅子ユーザーから「自分の前に人に立たれると、当然、車椅子なので、見えない」しかし「のいてくださいとは、僕は言えません。人がいなくなるのを待つ。そんな風にしてきてきた」と聞いて

たという。

「障がいのあるなしに関係なく、ちょっとずつお互いを知っていく。そういう遠慮せず見れる、ゆずりあえる関係、“前どうぞ”って言える市民が増えれば、もっと生活がしやすいくなる」と、吉川さんと亀井さんは考える。さらに「そのような“ユニバーサル”の実験場として、美術館の展示室を体験することができる。これが市民の生活空間の中につながっていけば、美術館も社会教育施設としての価値を持つ」ともいう。

このようなユニバーサル事業での気づきや工夫は、いかに、通常の展示に影響を与えているのか。吉川さんは「それこそが今後の課題だ」と考えている。

【作品配置図】



【図2-1】徳島県立美術館,2022年『見どころ見つけた ユニバーサル美術館展5年目の向かう先』の挿図「所蔵作品展体にやさしいユニバーサル展示：好きな目線で」

3. クラウドファンディングによるアール・ブリュット作品購入プロジェクト

2021年4月から9月まで、徳島県立近代美術館では「アール・ブリュット作品購入プロジェクト」のクラウドファンディングを行った。206人のサポートを得て目標額2,200,000円を達成し、購入資金を得た。購入作品は、ドイツでホロコーストを体験したローズマリー・コーツィー(1939-2007)が、過去のトラウマに基づいて衝撃的に描き始めた絵画である。【図2-2】吉川さんは担当学芸員としてクラウドファンディングページに顔写真入りで、プロジェクト挑戦と購入の意義を解説した。

アール・ブリュットとは、様々な人達が伝統や流行、教育などに左右されず自らの内側から湧きあがる衝動のままに表現した芸術作品のことです。この言葉は、フランスの画家ジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet 1901-1985)によって、第二次大戦後、間もない時期に考案されました。

しかし、時代が経つにつれて、何かの影響を受けることなしに表現する人は、ほとんど見られなくなりました。それでも、様々な人達の内なる衝動のままに表現した作品は、今でもアール・ブリュットと呼ぶものだと思います。

(中略)

まさに、色々な作品を目にして、アール・ブリュットについて、繰り返し考える時間がありました。この時間が今回のプロジェクトに繋がったように思います。そ

の結果、メインではない存在に光を当て、ということに思い至りました。

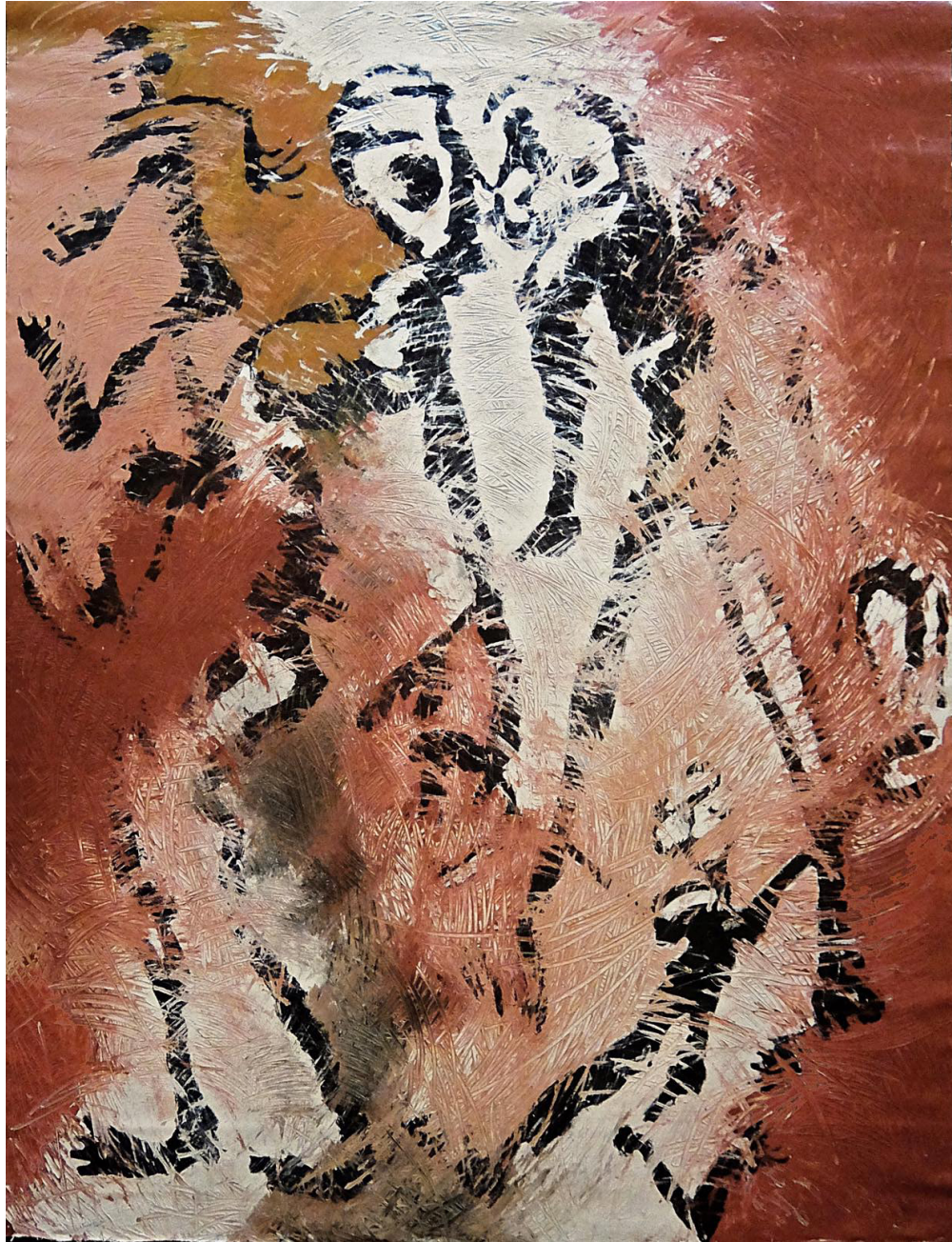
美術の歴史は、常に新しい表現を求めて進化していったという経緯があります。それ故に、幾多の素晴らしい作品が生まれてきたことも事実です。美術の歴史の中で、この流れ以外に、他の価値を見いだされたのが、アール・ブリュットの作品でした。

このプロジェクトでアール・ブリュット作品を取り上げることが、まさに光を当てるといふことだと考えます。

(徳島県立近代美術館アール・ブリュット作品購入プロジェクト クラウドファンディングページより)(注2-2)

同美術館はクラウドファンディングを活用した作品購入は初めてであった。アール・ブリュット作品であったため、東京2020オリンピック・パラリンピックにおける障がい者の芸術活動を応援する機運にも助けられたという。また、ちょうどコロナ第二波の時でもあり、さまざまな芸術活動への制限や、芸術関係者の困窮が報道されていた中、美術館を訪問できなくとも、美術館の活動を応援したいと思う県内外のアートファンも少なくなかったのではないかと推測している。

徳島県立近代美術館は、継続的にアール・ブリュットの展覧会をしてきたわけではないが、同館でのアール・ブリュット関係の展覧会のほとんどを吉川さんが担当してきた。きっかけは2001年に同館で開催した「アート・イン・パラダイス～アメリカの独



【図 2-2】ローズマリー・コーツィー（題名なし）1983年、アクリル on キャンバス、244.5 × 184.5 (cm) ©Louis Pelosi
徳島県立近代美術館

学の作家たち〜」展である。アメリカのアウトサイダーアートコレクションの展覧会であったため、担当者として、アウトサイダーアートやその周辺の状態を調べた。

2018年にはパリで開催された「アール・ブリュット・ジャポネ展」（2010年）の出品作品を紹介する「生の刻印：アーツブリュット再考展」（主催：徳島県障がい福祉課、徳島県立近代美術館／特別協力：日本財団）を担当した。2019年には「アール・ブリュット再考2—みずのきの色層」（主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県立近代美術館／特別協力：みずのき美術館）と題した、京都府亀岡市にある障害者支援施設みずのきの絵画教室を発端とするみずのき美術館の所蔵作品を紹介する展覧会も担当した。

吉川さんは、「アール・ブリュット再考」展の担当の際に、そのアール・ブリュットコレクションのほとんどが障害者による作品であることに気づかされたという。それにより日本では「アール・ブリュット」イコール「障害者の美術」として固定化されたのではないかと疑問を抱いた。もともとヨーロッパで起こったアール・ブリュットは、もっと違った意味を持っていたのではないかと考えた。「障害者の美術」イコール「アール・ブリュット」とされることへの違和感があるという。

今回の作品購入を仲介したギャラリストとは互いに「障害があったらアール・ブリュットで、なかったらそうじゃないという線引きへの疑問」を持っていたという。今回クラウドファンディングで購入した作品は、あえて言うならば、その意味ではボーダーラインともいえた。「そのような線引き

のないところにアール・ブリュットを置くべきだと、個人的には思います。今、障害を持ってない人でも、アール・ブリュットであると、打ち出してもいいのではないかと吉川さんは考える。

4. サポーターのゆるやかな主体性

2022年12月中旬からユニバーサル展ではテーマを強調していないが、「高齢者」としている。どんな作品を展示すべきか、サポーターとも相談している。サポーターは、同館の登録制のボランティアスタッフである。登録にあたっての研修はなく、イベントごとにサポーターを募る、かなりゆるやかな仕組みであり、参加しやすさを最優先している。ユニバーサル事業においては15名程度、その中には障害がある方も含まれる。

今回のように作品選びにまで参加してもらうのは初めての試みであるが、これまでもサポーターは主体的に、美術館の活動に関わってきた。またエドゥケーターの側から、美術館における障害のある方へのよりよい活動を相談することもある。

障害があるサポーターがファシリテーターを務めるワークショップもある。例えば「筆談でアート鑑賞」である。「聞こえる、聞こえないに関わらず、誰でも自分の書き込みに他者が答えてくれることがいかに嬉しいかを実感できました」「聴覚障害者が聞こえる人たちと共にアート鑑賞を楽しみ、コミュニケーションを深めて行くには効果的なツールであると確信しました」との感

想を、同館アートイベントサポーターであり耳の聞こえない鑑賞人との肩書を持つ小笠原進也さんは、冊子『とくしま近美のユニバーサル事業あの手この手-2018年度・9年目の取り組みを中心に-』に記している。

5. 手づくりの「触図」

視覚障害がある人の鑑賞を助ける「触図」という教材づくりにも、サポーターの視覚障害者が関わっている。「触図」とは、絵の中の輪郭や構図を触って理解できるような持ち運べるレリーフである。視覚に障害がある鑑賞者の絵画観賞を助けることを目的としている。「絵画は線だけでなく色彩や明暗の調子、筆触や絵の具の濃淡など様々な要素が複雑に絡んで」といって、竹内さんは前掲書に記し、可能性と限界があるとする。

ある視覚障害があるサポーターは、活動を通じて、自分の頭の中に絵が描けるようになったという。その方は、吉川さんの展示解説にも来る。作品を目で見ることができないが、一生懸命に聞いていて、時には同じ展示会の展示解説を何度も聞きに来る。展示解説を、その方は楽しみにしているという。吉川さんは展示解説の際に視覚障害者を意識しているのか。「普通に作品解説をしている時と変わってないつもりだが、最近はこの絵について、どれくらい伝えられるか、意識することもある」という。

6. さまざまな連携

県内の障害者施設との連携、研究者との連携、隣接する県立博物館との連携がある。

障害者施設との連携は、3年前にオープンした徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター（注2-3）とともに展示会を一緒に企画するなどである。また継続的に、障害者施設で指導している方たちの研修会を実技も鑑賞活動も含めて美術館でやっている。

研究連携は現在2件ある。一つは、植草学園大学発達教育学部教授・高木夏奈子氏との「聴覚・視覚等障がい者と共に楽しむユニバーサルな音楽・美術鑑賞プログラムの開発」（2020年度-2022年度科研費・基盤研究(C)）である。美術館から保育所に出前授業などのワークショップを一緒にいき、高木氏とともに保育所や教員対象の勉強会の開催もしている。もう一つは明治大学理工学部建築学科教授・上野佳奈子氏が、同大学の学生とすすめる「センサーフレンドリーマップ」作成に関連する展示室の音環境調査への協力である。同館の展示室はたいへん静かであり、ちょっとした物音でも大きく感じてストレスになり兼ねないという。それを改善するためのブラウンノイズ（注2-4）やBGMの活用などの実験があるという。

隣接する県立博物館との連携においては、学校対応を一緒に行う、また作品にある植物の名前を博物館学芸員に確かめる、さらに保存担当の学芸員の連携もはじまっている。

7. 障害者等の芸術活動と美術館

障害者等の芸術活動について「はたからみたら、すごく力をいれている美術館に見られるんじゃないかと思うけど。きがついたら、そうになっていた」というのが本音だと、吉川さんはいう。さらに個人の考えと前置きしたうえで「障害者の芸術活動と美術館の話は、街中のギャラリーで先入観なく展示を見て、作家に障害があったとしても作品について話をしてみる、などと地続きの話。特別には考えていない。障害とか関係なしに、面白いアーティストがいたから、展示会が出来た、とう感覚でいいのかなと思う」と述べる。

亀井さんは、障害者の芸術活動という「創作発表」ばかりが目されることに、少ない疑問があるという。創作発表というアウトプットばかりでなく、障害者がアートを感じる機会の保証、いろんなアートを体験できる環境にも目を向けるべきだと言う。ある障害者による美術展にボランティアで関わる中で、障害があるアーティストたちは、同じ建物で別の展示があっても、自分たちの展示会しか見ないことが多いと気づかされた。それは障害がある人の意識と言うよりも、支援者の意識ではないかと感じている。現代美術展は難しいのではないかと、障害がある人にはわからないのではないかと、先入観があるのではないかと指摘する。

「アートには、もっと多様な、もっとへんてこなもの、もっと不思議なものって、いっぱいあるので、それを見る機会を持つべきだ。鑑賞を通して、もっといろんなものを

吸収する機会を作る必要があると思う。そういった側面こそ調査研究し、現場に戻して欲しい」ともいう。また、「障害者も多様であり、知的に障害がないとか、美術教育を受けた障害がある人、肢体不自由の人、内部疾患の方、発達障害の方も同列に、「障害者アート」として、見てしまうことに、落とし穴はないのか、ということも考慮して「障害者等の芸術活動」を調査してほしい」ともいう。試行錯誤してやっている事例は各地に少なくないだろうとのことであった。

【感想】

インタビュー後に「触図」を見せてもらった。一つの作品に対して、作り手が異なる複数の「触図」があった。鑑賞者の多様な捉え方を「人から人へ」伝える丁寧さを感じた。また文中で紹介したが、「触図」での鑑賞が目的ではなく通過点であり、その後、視覚障害者自身が独自の鑑賞方法を得て、通常的美術館の展示解説を楽しむという、障害がある方への配慮に留まらない、広がり可能性に気づかされた。

(注 2-1)

2023年1月8日に立ち話にて「美術館の展示空間を考える際に、ワークショップやパフォーマンスが障害の有無に関わらず行えるよう構成している」と伺った。同日の「特別展：思い出のアルバム - 人生を語るユニバーサル展示」関連プログラム「ゆるりかかわりアクティビティ：思い出あつめて」においては、車椅子ユーザー2名も含む約20名が約3時間、展示空間で演劇ワークショップを行っていたが、参加者の動きが制限されることなく、また参加者以外の一般の観覧者の導線を大きく妨げるような場面もなかった。

(注 2-2)

<https://otsucle.jp/cf/project/3160.html>

最終閲覧 2023年2月19日

(注 2-3)

徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターは、市内の徳島県障がい者交流プラザ1階にある。徳島県が設置し社団法人徳島県社会福祉事業団が運営している。研修会や展覧会などを実施し、障がい者による芸術・文化活動の裾野の拡大と、障がい者による芸術の素晴らしさを広く徳島県民にPRしている。なおホームページには「阿波弁 ver」もあり、「センターについて」は「うちんくのこと」、「イベント・展覧会」は「しよること」と、徳島県民にわかりやすい工夫がある。

<http://kouryu-plaza.jp/gb-center/>

最終閲覧 2023年2月19日

(注 2-4)

ブラウンノイズとは、ある種の信号雑音のこと。脳が落ち着き、集中力が高まる効果もあるといわれている。

【調査概要】

実施日：2022年10月5日（水）

場所：徳島県立近代美術館 講座室

補足調査：2023年1月8日（日）に「特別展：思い出のアルバム - 人生を語るユニバーサル展示」及び関連プログラム「ゆるりかかわりアクティビティ：思い出あつめて」（担当：竹内利夫（たけうちとしお）学芸員）に参加

【調査対象者】

亀井幸子（かめいさちこ）

徳島の県立学校（高校、特別支援学校、聾学校〔現在の聴覚支援学校〕）の美術科教員、徳島県教育委員会や鳴門教育大学の長期研修などを経て、2011年の県の定期異動で美術館勤務となる。学芸員資格を有していたが美術館勤務は予想外であった。「アートって、少々色々なことを言っても引き受けてくれる。」と考えている。

吉川神津夫（よしかわみつお）

1991年5月に徳島県立近代美術館に就職。主な担当展覧会は「特別展 生の刻印アーツブリュット再考（2018年）」など。2023年3月末に定年退職予定。

【参考資料】

竹内利夫,2011,「所蔵作品展 体にやさしいユニバーサル展示：好きな目線で」『徳島県立近代美術館ニュース』120号,2022年1月.
森芳功・竹内利夫・亀井幸子,2017,「活動報告：徳島県立近代美術館のユニバーサル・ミュージアム事業—2011年度から5年間の取り組みについて」『徳島県立近代美術館研究紀要』第17号.

吉川神津夫,2018,「特別展 生の刻印 アール・ブリュット再考」『徳島県立近代美術館ニュース104号』2018年1月.

徳島県立近代美術館,2015『開館25周年記念 人間表現を楽しむ25のとりら展』.

徳島県立近代美術館,2016『暮らしの感覚-アートと人とデザインが交流する空間』.

徳島県立近代美術館,2019『とくしま近美のユニバーサル事業あの手この手』.

徳島県立近代美術館,2020『話せば広がった鑑賞物語とくしま近美のユニバーサル事業2019』.

徳島県立近代美術館,2022『見どころ見つけたユニバーサル美術展5年目の向かう先』.

三重県立 美術館

文：福島尚子

三重県の県庁所在地、津市の主要駅近鉄・JR「津」駅からゆるやかな坂を上って徒歩約10分で三重県立美術館に到着する。玄関部である広大なエントランスホールではイベントが行われることもあるという。なお、美術館には学芸普及課職員が9名在籍している。今回は教育普及ご担当の鈴木麻里子さん、学芸員の藤田響さんにお話を伺った。

1. 多感覚鑑賞が誕生するまで1（特別支援学校での取り組み）

2015年の美術館の改修工事のための一時期休館に先駆け、展覧会事業以外での企画を実施した。「アートでつなぐ・三重の文化創造事業」の「芸術活動による障がい者の自立支援事業」として県内の特別支援学校2校を対象に鑑賞プログラムやワークショップ（成果作品はTシャツ）を開催した。三重県立美術館のあゆみの中で、障がい者向けプログラムを実施した始まりはこの取り組みとなる。とはいえ、対外的な集客を目的する事業としての位置づけではなかったため、広報資料などは制作していない。このような点からも、三重県立美術館の障がい者に向けた取り組みは小さく生まれて大きく育ってきたといえる。

2年目となった2016年は、1年目とは別の2校の特別支援学校と連携し、「アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業」を実施。美術館での鑑賞プログラムや

ワークショップ、「学校美術館」を開催。この学校で行う鑑賞を「学校美術館」と名付け、生徒の保護者や地域の人たちにもチラシで鑑賞を呼び掛け、広がりをもたらそうとする動きがみられる。ワークショップではアーティストのファシリテーションによって「スタンドグラス」と「紙貼りランプ」が行われた。

この2016年の「学校美術館」を実施する際、展示作品の選定にあたって、一人の教員から「生徒が触ってよい作品を展示してもらえないか」という要望があった。この特別支援学校の生徒に視覚障がいがある生徒がいたわけではないが、展示されたものから立体的な形や大きさなどを認識しづらい生徒もおり、触れることは鑑賞の大きな助けとなる。結果、この学校での「学校美術館」では、展示作品9点のうちブロンズの彫刻など3点が触って楽しめる作品として展示された。振り返れば、これが「美術にアクセス！ - 多感覚鑑賞のすすめ」につながる種のような存在になった、とも言える。

2. 多感覚鑑賞が誕生するまで2（鑑賞ツールの作成）

2015、6年に作成された特別支援学校の生徒らによるTシャツやスタンドグラス、紙貼りランプなどの作品展示は美術情報室前のオープンスペースで展示され、誰でも気軽にみられるようにしていたが、関係者以外の鑑賞に結び付いたとは言い難かった。この2か年のアプローチは、成果物という取り組みのわかりやすさが強みである一面、

関係者のみの関係性で完結しがちだという側面も持ち合わせている。そこで、2017年は、取り組みが終了しても残るものを作り出していこう、という構想のもと、鑑賞支援ツールの開発プロジェクトを実施することになった。

具体的には、三重県立美術館の所蔵作品を鑑賞するときに役に立つツールと一緒に作るプロジェクトを実施した。肢体不自由などの障がいのある6名の生徒たちと教諭、プロダクトデザイナーとで検討会を実施し、意見交換を経てプロダクトデザイナーによってプロトタイプが生まれ、それをさらに再検討していく、という細やかな過程を経て作成されていった。ディスカッションや対話に主体的にかかわってくれるメンバーが集まった、ということもあり、分かりやすい鑑賞、平易化するというよりも、「知りたい」「しっかり見たい」という探求心を喚起するような体験へつなげる意見が多く出たという。

鑑賞ツールの仕様の検討会では「くるくる回して何かが読めるといい」「いろんな人の感想があると楽しい」「難易度が高いほうが良い」「作品にまつわる豆知識を載せたい」などの意見が交わされ、キューブパズル・あいうえおブロックの二つのプロダクトを完成させた【図3】。キューブパズルは立方体のブロックパズルとして所蔵作品の絵画ピースになっている面と、作品鑑賞の切り口となる問いや鑑賞のヒントが書かれている面で構成されている。あいうえおブロックは、コースター状の円盤に、ひらがな一音と鑑賞の手助けとなる感想や作品背景の説明などが書かれている。これらの作成に

住所 三重県津市大谷町11番地
〒514-0007
電話 059-227-2100
ファックス 059-223-0570
URL <https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/index.shtm>



【図3】キューブパズル・あいうえおブロック いずれも福島尚子 2022年10月13日撮影

当たって、インクルーシブデザインが意識されている。もちろん、すべての人にとって親切な設計になることは難しいが、色々な人の意見を取り入れることで、ほかの人にとっても楽しいツールを目指した成果ともいえる。完成したから終わり、とするのではなく、キューブ面に書かれた問いや感想、作品写真も入れ替えが可能で、あいうえおブロックも追加していくことができる。また、このプロダクトは壊れても直したり、部分的に買い足したりすることができる、という観点で既製品のブロックを活用している。また、後から気づくことも多く、いったんの完成を見てから、点字シールを貼るなど小さなアップデートが学芸員の手によって行われている。プログラムを運営していくうえで、課題や意見はさまざまに浮かんでくる。それをどのようにして活かしていくか、完成形を決めることより、状況に合わせて変わっていく余白を織り込みながら作られていることは、さまざまな視点からの意見を汲みながら育ってきた三重県立美術館らしさの表れともいえるだろう。

3. 「美術にアクセス！－多感覚鑑賞のすすめ」展

海外での研修経験と、美術館のこれまでの経緯を踏まえて企画されたのが「美術にアクセス！－多感覚鑑賞のすすめ」展（2021年）である。

この展覧会では4つの展示室で教材を含む約50点を展示した。美術作品の点数を絞り込んだのは、作品に触れる鑑賞形態であることから、鑑賞に時間がかかることを見越してのことである。4つの展示室をそれぞれ「鑑賞の前に」／「鑑賞のために」、「美術と感覚」、「彫刻にさわる」、「オノマトペと共感覚」と題し、5つの章に分けた。美術作品だけでなく、触図や前述の鑑賞ツールも設置した。

2020年に新型コロナウイルスの感染拡大下の開催となったこともあり、大々的な企画よりは、三重県立美術館がこれまで作成してきたプロダクトやノウハウを用いたことで、美術館の蓄積を見せる機会となった。触るだけでなく、さまざまな感覚を使って鑑賞する形の企画が実現した。

2021年6月からの会期が始まると、美術関係者の来場が多く見られた。この来場者傾向の要因として、美術関係者は、アクセシビリティに課題を抱えている拠点多いこと、障がい者アートへ企画の関心の高まりが影響しているものと思われる。視察も非常に多く、特に、最終週は毎日どこからかの視察が入っている状態だったという。アクセシビリティそのものへの関心の高まりに加え、コロナ禍下での「触る」展覧会ということで実施手法への注目が集まったと考えられる。

4. 触る鑑賞と感染リスク

この展覧会に至るまでの6年にわたる事業を経て、美術館の職員全体が実感したのは、触らないと鑑賞できない人がいること、そして触ったほうがより鑑賞が深まる人が確実にいる、ということである。そのため、「美術にアクセス！－多感覚鑑賞のすすめ」では触覚による鑑賞は欠かせないという判断だった。しかし、新型コロナウイルスが猛威を奮っており、触ることへのリスクをどのように避けるかが大きな課題であった。触れる人数を減らすため、目の見えない人だけに展示作品に触ってもらえるようにしてはどうか、という意見も出たが、第三者が判断できるケースばかりではない上に、視覚障がい者は触ってもよいが、視覚に障がいのない同伴者が触れない、などというケースではどのように対応するのか？そもそも、触れられる人と触れられない人が生じるのは（後述する）「三重県立美術館のめざすこと」に逆行するのではないかと、という意見も出た。結果として、誰もが触ってよい展覧会を目指そう、（素手で触ることにはためらいがある人に向けて）どんどん手袋を配ろう、ということに落ち着いた。この際の手袋はゴム製と布製の二種類を準備した。感覚過敏の人がいれば、アレルギーを持つ人も。「必ず選択肢を複数用意するようにしている」というところもこれまでの経験で培った工夫である。

また、この展覧会に際して文化庁の補助金事業として実施した事業以外に、一般社団法人アーツアライブの取り組みで、認知症向けの取組として講演会と鑑賞会の実施

を検討したが、残念ながら新型コロナ感染拡大の影響で、オンラインの講演となり、実演は中止された。講演では、アーツアライブの代表から、アクセシビリティの運営や館内の導線などについての話を聞く、といったもので、やはり福祉関係者、認知症をもつ人の家族、美術関係者からの関心・参加が多かったという。一方、感染リスクなど、通常とは異なる状態となった場合、美術館にアクセスしづらい層と中止の影響しやすい層が重なるケースがみられる。

5. 携わる人みんな考えていく

組織を巻き込んで展覧会を実施するには、かなり鈴木さんが奮闘したのではないかと尋ねたところ、「難しいんじゃないか、という声はほとんどなかった。特に学芸課のスタッフからは、こうしたらどうか、どうしたらいいか、という前向きな意見で賛同してくれた」と述べる。それは、ここまで教育普及の担当者だけで事業を進めるのではなく、周りの人を巻き込みながら事業を行ってきたことが大きい。

とはいえ、すべてが万全に整って運用できたわけではない。展示作品が展示台から落ちないように、床と展示台のボルト固定、作品と展示台の固定など、手間は従来の展示にはない作業が必要で、保存修復の学芸員や業者の協力も欠かせなかった。また、2022年度に開催した「さわって楽しむ 柳原義達の作品」では、来館者が来ている服の袖にあるファスナーなどで作品が傷つかないように、ボランティアスタッフにアー

ムカバーを作ってもらった。いざ事にあたるとき、教育普及の担当者だけでなく美術館にかかわる人たちを巻き込んでいくことは、一体感を醸成するだけでなく、一人一人の主体性を育むことになる。

鈴村さんは教育普及担当だが、大学では西洋美術を学んだこともあり、西洋美術の展覧会を担当することもある。このようなセクションを超えた仕事が日常的に行われている比較的小規模の人員体制であることが、教育普及の巻き込みにはとてもうまく作用している。

6. 「三重県立美術館のめざすこと」

障がい者に対する取り組み、というひと昔前はチャリティ、慈善事業というイメージがあったが、法律が変わったり、社会情勢が変わったりする中で、美術館としても当然の権利として考えるようになってきた。

そして2018年3月、「三重県立美術館のめざすこと」という、いわゆる三重県立美術館のビジョンあたる5つの指針が策定された。

三重県立美術館は、人々が感性や想像力を育み、自己を形成するためのコミュニケーション・プラットフォームとなって、文化の継承・発展に努め、新しい価値の創造をめざします。

三重県立美術館は、この目標を達成するため、次の5つの指針に基づき活動します。

1. 誰もが利用しやすい環境を整えます。

2. コレクションの充実、保護ならびにその研究の深化に努め、来たる世代にその意義を伝えていきます。

3. 優れた美術やさまざまな表現を通して、利用者が、多様な価値観や文化に触れ、自己の世界を広げられるような機会を提供します。

4. 独創的な芸術活動を支援し、三重から新たな文化を発信していきます。

5. さまざまな組織・個人と協働し、美術館の可能性を広げます。

(三重県立美術館ホームページより)(注3)

この指針の中で最初に謳われているのがアクセシビリティである。目指すこととして明文化されたことは、共有認識として職員やボランティアの中での意識を共有する助けになった。

「三重県立美術館のめざすこと」にアクセシビリティが謳われたことで、組織全体で意識が共有しやすい、職員や監視のスタッフにとっても何を指せばよいかかわりやすくなったという。また、館外からも、「三重県立美術館はソーシャルインクルージョンやアクセシビリティの取組を熱心に行っている館」という認知がされやすくなる。ビジョンがないと、人によって目指す方向が微妙に違って意思統一がされにくい。

研修をみっちり行うことより、ルールや知識に人の気持ちが追いつかないことを鈴村さんは懸念している。日常の行為として「誰もがアクセスしやすい」という意識を持ってもらうことを重視している。

7. 取り組みの持続に向けて

鈴村さんが今後の課題に挙げたのは三重県立美術館の教育普及事業が助成金の交付を前提としたものになりがちである。助成がなくなれば、あるいは申請をしなければ、事業として維持できるかどうか定かではない。事業の自立については、助成審査の審査員から指摘を受けたこともある。

また、いつ誰が来ても安心して鑑賞できる状態を維持することが財源的に難しいのは、三重県立美術館だけの課題ではないだろう。これまでの経緯の中で、視覚障がいのある方との関係性はできてきているが、様々なアクセシビリティの課題について、広く環境整備や情報保障の整備においてはまだまだやれることがあると感じている。例えば、現在は、要請があれば手話通訳と要約筆記は申請があれば実施しているが、今後は、手話通訳と要約筆記があることを前提とした事業もしていきたい。それは、来館のハードルを下げることであり、美術館の姿勢を示すことにもなる。また、手話通訳や要約筆記があることが、美術館の当たり前前の光景にしていきたいと考えている。

【感想】

プログラムの変遷をたどりながらお話を伺うと、順調に現時点までたどり着いたかのように話を聞いてしまいがちであるが、三重県立美術館の実施してきた事業は絶えずバージョンアップを図りながら、そして職員はじめステークホルダーを巻き込みながら成長している。長年続けることと同時に常にオープンな状況を作り出す、このバランスによってみんなが自分事として捉える取り組みにつながっているように感じた。

(注3)

<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/55010038086.htm>

最終閲覧日 2023年2月19日

【調査概要】

実施日：2022年10月6日（木）

場所：三重県立美術館会議室

【調査対象者】

鈴木麻里子（すずむらまりこ）

三重県立美術館 学芸普及課学芸員。2011年から教育普及担当の学芸員として三重県立美術館に勤務。主な担当事業に「アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業」（2016年度）、「アートでつなぐ・新しい鑑賞体験創造事業」（2017年度）、「美術館のアクセシビリティ向上推進事業」（2020年度-）「美術にアクセス！——多感覚鑑賞のすすめ」展（2021年度）等。

藤田響（ふじたひびき）

三重県立美術館 学芸普及課学芸員。

【参考資料】

アートでつなぐ特別支援学校と地域の連携事業実行委員会,2017,『アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業記録集』。

アートでつなぐ新しい鑑賞体験創造事業実行委員会,2018,『「アートでつなぐ・新しい鑑賞体験創造事業」記録集』。

美術館のアクセシビリティ向上推進事業実行委員会,2021,『三重県立美術館ソーシャル・ガイド』（最終更新2021年3月11日）。

美術館のアクセシビリティ向上推進事業実行委員会,2021『令和2年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業 美術館のアクセシビリティ向上推進事業報告リーフレット』。美術館のアクセシビリティ向上推進事業実行委員会,2021,『令和3年度 文化庁 地域と博物館創造活動支援事業 美術館のアクセシビリティ報告書』。

三重県立美術館年報 2021年度版

福岡アジア 美術館

文：中西美穂

福岡アジア美術館は、街中の商業ビルの7-8階にある。アジアの近現代美術作品を系統的に収集し展示する世界で唯一の美術館である。2022年9月より事業を拡充し、アーティスト・カフェ・フクオカを拠点にアーティスト・イン・レジデンス事業を展開している。

1. 交流・教育係

アジア美術館の特徴は、アジアの近現代美術の専門的な収集展示と、もう一つは、アジアのアーティストや研究者の滞在を受け入れて交流するレジデンス事業の両輪である。

同館の学芸課には、展示係と交流・教育係の二部門がある。交流・教育係では、レジデンス事業、ボランティア運営、そしていわゆる教育普及として学校連携も担当する。同館の教育普及の特徴は、アジアのアーティストや研究者を受け入れているレジデンス事業を軸にしている点である。ワークショップを例にすると、アジアのアーティストがワークショップを行う教育プログラムなどがある。また学校団体等の見学を受け入れるスクールプログラムでは、鑑賞プログラムの他にアジアのアーティストによるトークを聞いたり、制作スタジオ見学をしたり、ワークショップをしたりする。教育普及事業とレジデンス事業は有機的につながっており、単純に事業ごとに分けられない。

スクールプログラムへの特別支援学校や特別支援学級からの申し込みは、美術館に

来館する場合もあるが、それらの学校に向くこともある。学校に通えない子どもたちが入院している院内学級にアジアのアーティストや研究者が出向いて交流を行うプログラムも実施した。

学芸課の体制は、展示係は正規職員の学芸員3名、それに加えて非常勤職員の資料担当1名、通訳担当1名がいる。通訳は交流・教育係の業務も担当する。交流・教育係は正規職員の学芸員2名と、非常勤職員のプログラムコーディネーター1名と、デザイン担当1名とサポート担当1名となる。

2. 障害がある方への取り組みから

障がいのある方を対象およびテーマにした取り組みをまとめた資料「障がいのある方への取り組み実績」(2020年9月、非公開)によると、7項目26プログラムが上げられている。ワークショップ15件、滞在研究1件、展示2件、講演会1件、ボランティア研修2件、院内学級2件に加えて2022年度に実施した団体見学3件が加わっている。

ワークショップの取り組みは、2004年と最も早く、障害者福祉施設のアーティストと共同で行った作品制作であったが、それ以降の14件は全て、特別支援学校や特別支援学級の児童や生徒を対象に行ったワークショップである。会場は障害者福祉施設、福岡アジア美術館、それ以外は各支援学校である。いずれもアジアのアーティストにより実施されている。

レジデンス事業で実施した、障がい者を対象にした滞在研究と講演会は、どちらも

韓国の巨済アートセンターに勤務する学芸員チョ・ジョランによる。チョは、2008年1月から3か月間、レジデンス事業にて滞在し、「障害のある子どもと障害のない子どもの美術教育について」をテーマに調査研究を行った。協力者は、市内の障害者福祉施設施設2件、特別支援学校4校の美術教師、佐賀県で芸術療法を先駆的に行っている病院のほか九州(当時)の実践的研究者の名前が挙げられており、短期間に多くの現場をフィールド調査したことがうかがえる。チョはその他にも、同テーマで音楽を活用した研究についての講演も行った。

障がいのある方々を対象にした館外展示は2008年と2010年に、小学校と病院で行われている。1件は、上述のチョが小学校で行った鑑賞ワークショップ、もう1件は



【図4-1】ブータンの暮らしと文化について(2013年2月7日、九州大学病院)実施風景。提供：福岡アジア美術館

住所 福岡市博多区下川端町3-1
リバレインセンタービル7-8階
〒812-0027
電話 092-263-1100
ファックス 092-263-1105
URL faam.city.fukuoka.lg.jp

韓国のアーティストが院内学級の生徒向けに実施したワークショップと同時期に同病院内に行った展示である。

院内学級の児童生徒を対象にした取り組み2件のうち1件は上述のワークショップ、もう1件は、2013年2月にブータンの研究者シンゲ・サムドゥルップが行ったトークである。外出が難しい子どもたちは、話を聞いた後でサムドゥルップが持参したブータンの衣装を試着するなど、海外の文化に触れる貴重な機会になったと言う。

また、2022年より不登校の小中学生が通う適応指導教室の団体見学を受け入れている。

さらに内部向けの取り組みとして、2007年に美術館ボランティアの養成研修の中で「障がいを持った方への補助：利用者の立場から」、2018年のボランティア研修で「障がいのある来館者への接遇について（配慮の必要な方へのホスピタリティガイド）」として、いずれも障がいのある方を講師に招いて研修会を開催している。

3. ワークショップ「今津の風景をつくろう」

障がいがある方へのワークショップの1例として、スリランカのアーティスト、サラット・クマラシリによる「今津の風景をつくろう！」は、2006年6月、今津特別支援学校中等部で行われた。クマラシリは、当時、レジデンス事業でアジア美術館に滞在しており、これまでスリランカの内戦などをテーマに、テラコッタの立体作品を制作してきたアーティストである。滞在制作においても福岡市民への戦争体験を聞き取り、作品



【図4-2】今津の風景を作ろう（2006年6月、今津特別支援学校中等部）ワークショップ風景。提供：福岡アジア美術館

制作をした。今津特別支援学校でのワークショップでも、粘土を素材として、支援学校の生徒24名と作品制作を行った。実施前に学校を下見に訪れた際に、クマラシリは手で筆を持つことが難しい生徒がいることを知り、同時に、学校の近くに広がっている海の風景をスケッチして帰った。ワークショップ当日、クマラシリは今津の家、海、草、雲、蝶、太陽、などのモチーフを石膏で彫り、棒につけたスタンプを持参した。生徒たちは、陶板に、今津の風景をスタンプングの手法で表現することができた。

ワークショップの導入ではクマラシリの出身地であるスリランカの生活や文化について話した後、生徒たちと「どういう風景にしたいか」について話し合った。制作では、生徒たちは前述のスタンプを使い、今津の風景を自由に陶板に表現していった。出来上がった陶板は、後日、窯で焼き上げて完成させ、クマラシリの滞在の成果を発表する展覧会の中で展示された。

このように、毎回のワークショップはアーティストの表現の特性や技法を前提に、コーディネーターと共に、参加者の年齢や人数、障がいの有無など、様々な要素を踏まえな

がら「オーダーメイド」でつくっていくという。

美術館の成果展をワークショップに参加した支援学校の生徒たちは見に来るのだろうか。蒲池さんによると、ワークショップ後に毎回、展覧会案内をしており、オープニングの時に見に来てアーティストのギャラリートークに参加してくれることもあるが全てを把握しているわけではない。会期中に保護者と来館し、作品の前で写真撮影していたと、館内スタッフから聞くことも多いとのことであった。

4. 在福外国人の生活に触れる

福岡の在日外国人はアジア各国からが大半をしめ、韓国、中国、ネパール、ベトナム、タイが上位である。そういった福岡在住の外国人の方たちの生活に、アーティストとの関りを通して、美術館来館者や、まちの人々が馴染む機会を、レジデンス事業で提供できたと思えることもあるという。

例えば、レジデンス事業で滞在したアーティストが、福岡在住の外国人の人たちと個人的に知り合い、一緒にパフォーマンスをするといった活動に発展する場面もある。

2005年の「第3回福岡アジア美術トリエンナーレ」では6名のアーティストがレジデンス事業に参加した。インドネシアのアーティストのティアルマ・ダメ・ルス・シライトが行ったパフォーマンスに、在福の外国人エンターティナーが関わった出来事が2006年出版された『パラレル・リアリティな日々 第3回福岡アジア美術トリエンナーレ2005 交流プログラムで起こった

こと』に紹介されている。あらためて、舞台裏の一部を伺った。

シライトは、福岡アジア美術館滞在中に行うプロジェクトのテーマを「変身しよう！」としていた。さまざまな場所や世代、職業の参加者らとワークショップで衣装を創作し、後日パフォーマンスを行う内容である。そのコンセプトは「人は、なにか別のものに変身したいと思っている。他の誰かになりたいという体験は、今の生活や自身の限界、そしてプレッシャーから抜け出させてくれる。（中略）そんなプレッシャーや恐れを捨てて一緒にやりましょう」[福岡アジア美術館：2006]であった。コーディネーターとの打ち合わせで、ワークショップ参加者は「若い人」「性転換願望者（原文ママ）」「文化人」それぞれを対象とし、トリエンナーレのオープニングイベントとして「ファッションショー：プラスチック・ラブ」というパフォーマンスも行うこととなった。シライトは身長180cmのファッションモデルの参加を希望したが、簡単に集まらないことを知り、別のアイデアとして日本発祥のコンテンポラリーダンス BUTOH（舞踏）とのコラボレーションを提案した。

ワークショップ参加者のうちの「性転換願望者」に出会うため、福岡を拠点とするニューハーフ劇団「あんみつ姫」のショーを、シライトとコーディネーター、スタッフとで見学し、座長や座員に交渉したが参加につながらなかった。

後日、同じく滞在制作者として来福したフィリピンのアーティスト、アルウィン・レアミーリョが福岡在住のフィリピン人に

会いたいと希望した。そこでコーディネーターは、フィリピン人のニューハーフが働く、美術館に近い中洲のショーパブを、アルウィンとともに訪問し、シライットも同行した。シライットはそこでワークショップ参加を交渉したが、時間が合わないため難しいとの返答となった。その代わりに、女性アイドルのモノマネをする男性タレントを紹介され、その方のワークショップ参加につながった。

館のコーディネーターが関わったのはここまでであったが、以降も、シライットとレアミーリョは中洲のショーパブをたびたび訪問し、1人のトランスジェンダーのフィリピン人エンターティナーと交友関係を築き、結果として、その方が福岡アジア美術館トリエンナーレのオープニングパフォーマンス「プラスチック・ラブ/BOUTO- 暗黒のダンス」に出演することとなったという。ティアルマが当初希望した180cmの身長がある方でもあった。全体としてとてもよいパフォーマンス作品となったという。同時に、美術館関係者として、ショーパブに勤務するエンターティナーの日々の忙しいスケジュールと、美術館開館時間との差異に気づかされたという。ショーがある夜だけが忙しいのではなく、お昼頃から練習があり、夜のショーを終えて遅くに帰宅して、次の朝起きる。福岡アジア美術館のアーティストとの打ち合わせが可能なのはお昼前のみである。インドネシアのアーティストのシライットのパフォーマンス作品がなければ、近隣に働く在福外国人の生活の一端に、美術館の関係者が触れることはなかっただろうとのことであった。

5. 20年ぶりでもつながれる

長年のレジデンス事業や関連プログラムによる人的ネットワークは広い。そのネットワークの拠点として美術館がある。プログラム終了後に、関係が疎遠になっても、美術館に資料があり、作品展示があれば、数十年後の再開につながることもある。

2003年に滞在したインドネシアのアーティスト、ハヌラ・ホセアのアニメーション作品の音楽挿入に、福岡在住のミュージシャン3組が演奏協力をした。約20年後の昨年2021年、ハヌラの作品を展示した際に、当時協力してくれたミュージシャン3組にも連絡した。そのうちの1組については、近年はそのユニットでの音楽活動は途切れていたが、今回の美術館の連絡を機会に、ミュージシャンたちは復活ライブを開催し、案内が美術館にも届いた。蒲池さんは「レジデンス事業は、たった3か月間の滞在だが、人とのつながりはそこで終わってなくて、ずっと続いていくものだ」と、あらためて実感させられたという。

6. ボランティア力

福岡アジア美術館の現在のボランティア登録者は約200名。開館前の募集時には800名余の応募があった。福岡市美術館の講堂で研修を半年程度行い、開館時には534名のボランティア登録があった。ボランティアには、交流ボランティアというレジデンス事業を中心にアーティストや研究者のサポートするグループと、館内案内や

作品解説、資料整理、広報などのグループがある。アーティストと知り合える、一緒に作品を作れると、交流ボランティアに魅力を感じて応募している方も少なくないという。

同館ではボランティアの選抜はしない。その理由は、同館で扱う美術がアジアの近現代美術であるからだとのことであった。現代美術は、一般目線からは難解に思えてハードルがあがるだろう。それに加えて一般に十分に知られてはいないアジア美術であればなおさらだ。したがって、間口を広く、敷居を低く。選抜試験をやらない方法となったという。開館時は10回養成研修があるうち8回受講すると登録できるとした。現在は、8回養成研修があるうち6回受講すると登録できる。最終段階で「面談」を行う、「面接」ではない。ボランティアにどのような活動をしたいかを聞く。またボランティア登録に期限を設けていない。結果的に登録者の年齢が高くなるが、それはデメリットではない。開館時にボランティアになられた方の熱量は尊敬に値するとのことであった。

開館当初、ボランティアは市民と美術館との中間的な存在、橋渡し役であった。しかし長年の活動を重ね、ボランティアは美術館に、より近い存在(身内)になる。館としてボランティア運営に関わる際は、ボランティア以外の市民も広く参加できるよう心掛けているという。

6. 地域プロジェクトとアーカイブ

福岡アジア美術館の企画展は地域にも展開している。例えば、「エモーショナル・ア

ジア 宮津大輔コレクション×福岡アジア美術館』(2022年)では、サテライト展示を、市内の吉塚市場リトル・アジアマーケット内アジアプラザで行った。福岡在住のカンボジア人やベトナム人らが小さなレストランを営んでいる地域である。

会場となった吉塚市場リトル・アジアマーケットと交流・教育係との関りのきっかけは、レジデンス事業に参加したカンボジアのアーティストのリム・ソクチャンリナが、福岡に住んでいるカンボジアの人と知り合い、共同プロジェクトをしてみたいと、希望したことからである。共同プロジェクトは「カンボジア料理の集い」と題して、当時、吉塚市場内でカンボジア料理店を営み、カンボジアコミュニティの中心人物でもあった方を招き、食事とトークをする参加型イベントとなった。

毎回のレジデンス事業は予定調和とならない。「アーティストとともに動いている」うちに、同館関係者の誰もが知らなかった福岡の人たちに出会い、ひろがり、また美術館につながる。

このような広がり「人」でつながる。福岡アジア美術館の担当者の存在が強みになる。一方で、その担当者がいなくなれば、そのネットワークは弱くなる。新しく違う担当者が来たら、違うネットワークも増えてもいく。結果的にネットワークの蓄積は難しい。ネットワークは、生まれては消え、消えては生まれていく。

展示と交流の両方を担当してきた中尾さんは「展示はモノ(作品)でのこる。交流はその実績が作品として残らないことも多い。その残らないものを、いかに評価する

かという課題がある」という。開館以来、館の主旨は変わらないが、予算が減じたこともあり、アーティストや研究者の招へい事業を維持していくことに苦慮することもあった。よりよい事業内容のための基準や、それを周知する必要性を感じるという。

滞在制作やワークショップなどの交流の活動は、参加者数など定量的な評価をすることも多いが「交流のいいところは、量ではなく、質。より深く交流するところ」だという。よりよい事業内容のための基準や、それを周知するといった文化事業評価に関わることは、一館だけで取り組むテーマとしては大きい。同じような課題を持つ、アートセンターやスペースも全国に少なくないならば、それぞれにアイデアや課題を共有し、共に探求する機会があればありがたいという。

福岡アジア美術館として、レジデンス事業に関わるものは、なるだけ、残したいが、スペースが手狭になるとそれもままならない。アーティストに送り返すこともある。結果的にモノとして残るのはごく一部となる。記録としての写真やビデオもアーカイブとして残しているが、今後は、その有効活用も考えていける機会があればとのことであった。

【感想】

「アジア美術」をテーマにし、障害がある方も、街も、外国の方も、アーティストを通してつなげている美術館だと感じた。また、レジデンス事業でのコーディネーターの役割や、ワークショップやイベントなどのプロセスも含む質的な評価、活動のアーカイブは、「障害者等の芸術活動」においても共有できる課題だと感じた。

【調査概要】

実施日：2022年10月12日（水）

場所：福岡アジア美術館 学芸課

【調査対象者】

蒲池昌江（かまちまさえ）

福岡アジア美術館交流・教育係。美術交流プログラムコーディネーター。同館でレジデンス事業、ボランティア運営、教育普及などを担当。

中尾智路（なかおともみち）

福岡アジア美術館学芸員。展示及び交流事業を担当。

【参考資料】

福岡アジア美術館,2006,『パラレル・リアリティな日々 福岡アジア美術トリエンナーレ2005 交流プログラムで起こったこと』

福岡市 美術館

文：中西美穂

福岡市美術館は都心部に隣接した大濠公園に1979（昭和54）年に開館。重要文化財を含む茶道具や、仏教美術のほか、九州出身の洋画家や、国内外の20世紀美術作品、現代美術作品など幅広く約1万6千点のコレクションを収集・保存している。開館40周年にあたる2019年にアプローチの新設など大規模改修、リニューアルオープンした。

1. 美術館のミッションステートメントと教育普及の活動方針

福岡市美術館は2021年に、これまでの同館の歩みを踏まえて、美術館としてのミッションステートメントを掲げた。使命は「福岡市美術館は、人が美術を通して交流し、未来を創造する場となります」とし、方針は3つ「1. 創造性に満ちた体験と新しい視点との出会いを実現します。」「2. 多様な人々が交流し、美術と共に快適に過ごせるようにします。」「3. 美術館の資源を人々と共有し、未来に伝えます。」とした。それに先んじて、開館40周年にあたる2019年のリニューアルオープン時に、同館の一部門である教育普及の「活動方針」を掲げた。「アートといきる」をテーマとし、具体的な活動を「来館者対象プログラム」「アウトリーチ」「アクセシビリティの向上」「人材育成」「調査・研究、プログラム開発」の5点とした。活動の説明は以下の通りである。

住所 福岡市中央区大濠公園 1-6
〒810-0051
電話 092-714-6051
ファックス 092-714-6071
URL <https://www.fukuoka-art-museum.jp/>

・来館者対象プログラム
所蔵作品を活用したプログラムを中心に、いつでも誰でも美術を楽しめるような教育活動を継続的に行います。

・アウトリーチ
美術館に来ることができない人や、来たことがない人へ積極的にアプローチし、美術館の外で地域との連携を図りながら、人々が美術と接する機会や場を提供します。

・アクセシビリティの向上
多様な背景を持った人が集う場である美術館で、物理的のみならず心理的にもすべての人が安心して学び、過ごせるような空間づくりを目指します。

・人材育成
美術館の活動に、アーティスト、ボランティア、学生、教員などが関わることで相互の学びを促進し、能動的に地域の文化を担う人材を育成します。

・調査・研究、プログラム開発
美術館の中だけにとどまらず、さまざまな専門性を持った人々とともに調査・研究を継続的に行います。また、彼らと連携し今後の教育活動の充実を図るとともに、その発展を目指します。
（福岡市美術館ホームページより）（注5）

なお、美術館の各部門において活動方針を公開しているのは、教育普及のみである。

2. スクールプログラムとボランティア

訪問日の福岡市美術館のコレクション展では、大勢の中学生たちが5名程度のグルー

プにわかれて、一人の大人とともにギャラリートークをしていた。少人数でのギャラリートークは理想的だ。小中学校の児童・生徒数は百名超えも珍しくない。マンモス校でなくとも一学年でその程度になることもある。ならば、少人数グループをつくれば、その数は20を超え、ギャラリートークのナビゲーター数も同程度必要となる。ナビゲーター人材が美術館に何人いるかは、その美術館の鑑賞機会の手厚さに比例しそうだ。

福岡市美術館の対話型鑑賞のナビゲートは、ボランティアが担っている。ヒアリング調査を行った2022年10月時点で同館ボランティア登録者数は160名強、そのうちの約半分がギャラリートーク、のこりの約半分が資料整理を担当している。

スクールプログラムや、ボランティア活動、アウトリーチなどの教育普及を担当するのは、鬼本さんから4名のミュージアムエデュケーターである。4名のうち2名が正規職員であり、残り2名が任用職員である。

ギャラリートークを担当するボランティアは、教育普及専門の学芸員からトレーニングを受ける。それ以外の資料整理を担当するボランティアグループは、新聞クリッピング、図書整理、DM整理の三つに分かれている。新聞クリッピングには古美術専門の学芸員、図書については美術館司書、DM整理については近現代美術専門の学芸員が、担当者としてつきアドバイスをしている。

ボランティアの募集は、5年に1回。毎回、全体研修として同館学芸員が講師となるレクチャーを8～10回実施、その後、各グループに分かれて担当学芸員が研修を行う。ギャラリートーク担当を希望するボランティア

は、グループにわかれ対話型鑑賞のトレーニングを8～10回受け、最後はリハーサルも行う。できなければ、できるまで教育普及専門学芸員が根気強く指導する。

ボランティア応募に際して、ペーパー試験はない。応募用紙に書く動機と、面接による二段階審査をしている。ボランティアには障害がある方の登録もあり、現在は資料整理グループで活動している。希望があれば障害がある方でもギャラリートークでの活動も可能であろう。

スクールプログラムでは、特別支援学校など障害がある児童や生徒の来館もある。学校ではないが、発達障害がある子ども達の放課後クラスの来館も相談を受け、来館できる体制づくりをしている。

3. アウトリーチプログラム

特別支援学校については「美術館に来てもらう」のではなく、「美術館から行く」というアウトリーチプログラム「どこでも美術館」でも対応している。「どこでも美術館」は、美術館学芸員が、館外に出向き「ボックス」と呼ばれるツールキットを活用して行う事業である。対象は、福岡市内の院内学級、特別支援学校、離島及び公共交通機関で来にくい地域の小中学校、公民館等の高齢者向けの活動などである。

また、同じツールキットを学校教員向けに貸し出している。所蔵品に関連した実物作品や画材・素材、所蔵品のレプリカなどである。小中学校への貸し出しを念頭に始めたが、高校や大学からの申し込みもある。

4. 公民館での高齢者向けアウトリーチプログラム

公民館でのアウトリーチプログラムは高齢者対象に特化している。詳しくは鬼本さんの論文「福岡市美術館における高齢者対象プログラムについて～内容・意義・課題～」[鬼本佳代子：2021]に詳しい。ここでは、その論文と重複する部分もあるが、鬼本さん自身に、プログラムについてお話をうかがった。

公民館のプログラムに参加するのは、「美術館に行くのはちょっと億劫」だけど「近くの公民館ならば行ける」という地域の高齢者を対象としている。きっかけは、美術館の大規模改修に伴う美術館休館中に、美術館に来てもらうのではなく、美術館から行く、アウトリーチプログラムを始めたことである。アウトリーチでは、美術館学芸員が、美術館所蔵のやきもののレプリカや、染や織の布などを持って、地域の公民館などを訪問する。改修中は小中学校と、公民館も年齢を限らず対象にしていたが、リニューアルオープン後は、高齢者を軸に活動することを活動当初から考えていた。それに加え、休館中に高齢者向けの依頼を受け訪問した時に、染織の織物を見た参加者が「家に蚕を買った。今は、福岡にいるけど、もともと実家は、京都で織をやっていた」と、周囲の誰もが聞いたことがないような、昔の話をしてくれたことがあった。鬼本さんらは「美術館のプログラムも、何かのきっかけになる、参加した方たちのある種の心の癒しになるようだ」と実感した。そこで、リニューアルオープン後は、

本格的に高齢者を対象に公民館に行くプログラムをつくりあげていった。

これらのアウトリーチプログラムは前述の通り「どこでも美術館」の名称がある。A3二つ折りカラー写真付きの申し込みパンフレットには「絵画・彫刻」「素材と技法」「やきもの」「染め・織りもの」の4プログラムが紹介されている。「布の魅力とひみつがわかる」とコメントがある「染め・織りもの」の実施写真を見ると、高齢女性たちがカラフルな布を纏い歩いている、後ろの方の人は、手の上げ具合から踊っているように見える。単に織物を鑑賞したり学んだりするプログラムではない、ファッションショーをする参加型プログラムとのことであった。

これらのプログラムには、教育普及専門学芸員だけでなく、展示や収集専門の学芸員の関与もある。「染め・織りもの」のプログラムの場合、福岡市美術館に所蔵されているテキスタイルのコレクションが発点である。その一つ「カンガ」と呼ばれる鮮やかな色合いのアフリカの布について、同館のテキスタイル専門の学芸員や、外部の研究者と話す中で「着る」というアイディ



【図 5-1】どこでも美術館アウトリーチプログラムの様子（2022年度パンフレットに掲載）。提供：福岡市美術館

アが出た。布が沢山あれば、みんなで着れる。それをアウトリーチプログラムに持ち運べるようにボックスに入れることとなった。なお、他の「ボックス」はデザイナーがデザインした箱に入っているが、同様に40枚近くの布を入れる箱をデザイナーに頼もうとした際に、上司から「スーツケースにしたら」とのアドバイスがあった。スーツケースは確かに持ち運びにも良いとなり、染め・織りものの「ボックス」が出来た。

このプログラムでは、異なる色やデザインの布40枚から、参加者1人に1枚に選んでもらうのだが、選ぶ段階で、自分の好みや、誰に似合うかなど、会話が弾み、盛り上がる。対象年齢は60代から90代までだが、回によって異なる。コロナ期間は20人くらいと少人数で行っている。

5. 認知症患者のための美術館・博物館による回想法プログラム

福岡市美術館では、2021年に認知症患者のための美術プログラムにも取り組んだ。これも鬼本さんが主筆した論文「美術館・博物館が行う認知症患者のための回想法プログラム～福岡市美術館・福岡市博物館・福岡アジア美術館との連携活動として」[鬼本佳代子・蒲池昌江・河口綾香：2022]に詳細や背景が記されている。ここでも、あらためて鬼本さんにお話をうかがった。

認知症患者を対象とした美術プログラムの発端は3点ある。一つ目は上述した公民館でのどこでも美術館のプログラムである。そして二点目は当時60代半ばの同僚の任用

職員が「60代すぎると、気力も落ちるし、すごい孤独になる。でもアートの力でどうにかならんじゃないか、高齢者プログラムやりたいな」との発言を受けてはじまった「いきヨウヨウ講座」である。三つ目は「平成30年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」の補助事業「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業」の海外調査に参加し、ニューヨークの多様な高齢者プログラムを知ったことである。

実施の直接の発端は、福岡市が運営する福岡市美術館、福岡市博物館、福岡アジア美術館の3館が、2020年に文化庁公募事業「令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益強化事業』博物館等における新しい関係性の構築による収益確保・強化事業」（乃村工芸委託事業）に、応募し受託することになったからである。企画立案を前述の3館で行い、認知症の専門知識を補うために、奥村俊久氏（筑紫野市教育委員会）、古村美津代氏（久留米大学医学部看護学科）を助言者・評価委員として迎えた。担当者全員が「認知症マナー研修」を受講した。プログラムは合計5回、介護事業所に通う3名の認知症患者、80代～90代歳を対象とした。

コロナ禍であり、すべての実施はオンラインとなった。オンラインでの実施は、音楽を聴いて思い出を語ってもらう回で、著作権法上の問題があるとわかったため、施設に事前にレコードプレーヤーを運び入れるなどの工夫をした。

絵画や屏風を見る対話型鑑賞では、回想法のように、参加者が思い出を話す展開に

なった。回を重ねると、最初にはなかった、参加者同士の互いの気づかい合いが見られるようになり、会話も増えたという。

参加者3人は軽度の認知症であったが、二人はアルツハイマー症で、一人は前頭側頭型認知症と異なった。例えば、「絵を描く」ことは、同じ認知症でも、前頭側頭型認知症の方は思い出して描くことが出来るが、アルツハイマー症の方は思い出して描くことが難しい。塗り絵を活用するなど、参加者全員が取り組める工夫をした。鬼本さんたちが担当した、「桜の木を描く」のテーマでは、事前に枝だけが描かれている紙を用意し、そこに描き加えてもらう工夫をした。結果的に、それぞれに魅力的な作品ができあがり、参加者から冗談も飛び出した。

このようなプログラムにおいて、認知症患者の気持ちの活性化が見られた。また回想法は5～8回程度と回を重ねる必要があることを評価者から聞いていたが、実際にやってみて5回以上行う必要性がわかったという。

6. 和田千秋の作品《私を私自身から救ってください（「障碍の美術 X- 祈り」より）》の対話型鑑賞

2022年10月の訪問時、福岡市美術館のコレクション展には福岡在住のアーティスト和田千秋による絵画作品《私を私自身から救ってください（「障碍の美術 X- 祈り」より）》が展示されていた。この作品は、縦193センチメートル、横130.3センチメートルの、油彩とアクリル絵の具で画布に、微笑むような表情の少年の、寝転がっている



【図5-2】和田千秋《私を私自身から救ってください（「障碍の美術 X- 祈り」より）》2007 福岡市美術館

ようなポーズを真上から写實的に描いている絵画作品である。館所蔵作品として「障害をいかに受容し、共に生きていくのか。本作はさまざまな読みに開かれた美術の形だからこそできるアプローチで、複雑な問いを複雑なまま提示しています」[忠:2022]と、同館ニュースレター「esplanade」に紹介されている。

鬼本さんは、2022年度の「バリアフリーギャラリーツアー②聴覚障がい者のための目で聴くツアー」で、この作品を対話型鑑賞に取り上げた。事前の手話通訳者との打ち合わせで「この作品を描いたアーティストの息子さんには障害がある。アーティストはその息子をモデルに描いているが、どう思うか」と聞いたところ、手話通訳者は「障害を持っている人たちは、自分の障害以外のこと知る機会が少ない。他の障害を知る機会にもなり、いいんじゃないか」との返答があった。

毎回の対話型鑑賞と同様に、最初に「何が見えますか？」と、手話通訳を通して、参加者に問いかけた。それに対して「男の子が微笑んでる」や「まわりついているのが、重そう」、なかには「内臓が飛び出てるのかと思った」との反応があった。しばらく解説なしに、参加者同士で「作品にどのような意味があるか」などをディスカッションしてもらった。その後鬼本さんが、「このアーティストは息子さんが障害を持っていて、この作品は息子さんがモデルです」と作品紹介をした。それに対して、参加者は「あのまわりついているのは、やっぱり動けないという思いがあるのかしら」や、「ほえんでるから、愛情があるのかなあ」と

いう反応が返ってきたという。

鬼本さん自身は、対話型鑑賞においても、作品解説においても、どのような作品でもフラットに選べばよいと考える。アーティストが障害に関りがあるかどうかを問いはじめると、福岡市美術館のリニューアルを記念した野外彫刻の作者インカ・ショニバレCBEが車椅子ユーザーであることにも注目することになるが、そこは最重要ではないだろうとの考えだ。同時に、アーティストと障害の関りについて言及を避けることにも違和感があるとのことであった。

7. 情報周知と連携

点字によるチラシを見せてもらった。「バリアフリーギャラリーツアー 視覚障がい者のおしゃべりとてぎわりのツアー」の参加募集情報が書かれているという。このチラシはふくふくプラザと呼ばれている市民福祉総合センターに配架したとのことであった。毎回、バリアフリーツアーなどにおいて対象となる当事者に情報を届ける工夫が必要だと考えている。例えば手話通訳者に情報周知の協力をお願いすることもある。

多文化共生の視点から、日本語が不慣れな方への案内も考えている。在福の留学生等を支援する福岡よかトピア国際交流財団と、美術館で在福外国人の親子向けに「やさしい日本語ツアー」を実験的にはじめた。その試みの中で、崎田さんは、中国出身の中学生とその保護者と作品鑑賞を行った。その学生は、日本語の読み書きは得意だが、話すことは十分ではない。また美術が好き

であるとのこと。一緒に作品鑑賞した際に、得意でなかったが、伝えたいという思いが勝ち、日本語を積極的に話したという。この取り組みはすぐに成果がでるものではないと考え、長期的に試みていきたいとのことであった。

これらのどの取り組みにおいても外部の関係団体などの協力が必要であるが、周辺環境が変わることも少なくなく、連携を継続することは簡単ではないとも感じているとのことであった。

【感想】

活動に加えて、教育普及に関する紀要論文が充実していることに好印象を持った。美術館での取り組みが学術的な論考として読まれる状況は重要だと思った。また、絵画作品《私を私自身から救ってください（「障碍の美術 X- 祈り」より）》の対話型鑑賞のエピソードも含め、アーティストと障害との関りのさまざまな側面について深い示唆を得たと感じた。

(注5)

<https://www.fukuoka-art-museum.jp/education/>

最終閲覧日 2023年2月19日

【調査概要】

実施日：2022年10月12日（木）

場所：福岡市美術館 学芸室

【調査対象者】

鬼本佳代子（おにもとかよこ）

福岡市美術館 主任学芸主事（教育普及）。大阪大学大学院で15世紀ネーデルランド絵画を専門に美術史を学ぶ。1997年に福岡市美術館に美術館教育を専門とする学芸員として就職。2008年から2012年8月まで大原美術館に勤務。2012年9月より福岡市美術館に戻り、現在に至る。

崎田明香（さきたさやか）

福岡市美術館 主任学芸員（教育普及）。早稲田大学大学院教育学研究科英語教育専攻で学び、イギリスのレスター大学大学院で博物館学（Museum Studies）を修めた。2012年に福岡市美術館に美術館教育を専門とする学芸員として就職。

【参考資料】

鬼本佳代子,2013,「福岡市美術館〈夏休み子ども美術館〉の歴史の変遷とその効果について」『福岡市美術館研究紀要』第1号,福岡市美術館.

—————,2016,「福岡市美術館のボランティア活動についての一試論」『福岡市美術館研究紀要』第4号,福岡市美術館.

—————,2021,「福岡市美術館における高齢者対象プログラムについて～内容・意義・課題～」『福岡市美術館研究紀要』第9号,福岡市美術館.

鬼本佳代子,蒲池昌江,河口綾香,2022,「美術館・博物館が行う認知症患者のための回想法プログラム -福岡市美術館・福岡市博物館・福岡アジア美術館との連携活動として-」『福岡市美術館研究紀要』,第10号,福岡市美術館.

鬼本佳代子,2022,「美術館で高齢者プログラムを実施することの意味」『国立国際美術館ニュース』246号,独立行政法人国立美術館国立国際美術館.

忠あゆみ,2022,「表紙の作品 所蔵作品紹介 私を私自身から救ってください「障碍の美術 X-祈り」より」『esplanade』NO.209,福岡市美術館.

福岡市美術館,2021,『令和2年度福岡市美術館活動の記録』.

兵庫県立 美術館

文：福島尚子

兵庫県立美術館は阪神・淡路大震災を機に、前身の兵庫県立近代美術館から移転・改称し、現在の中央区にオープンし、2022年で20年目を迎える。今回は近代美術館から続く「美術の中のかたち」展を中心に、飯尾由貴子さんにお話を伺った。

1. 「美術の中のかたち」のなりたち

兵庫県立美術館では、「Form in Art 美術の中のかたち」という、所蔵展の小企画を毎年開催している。この企画は、主に視覚障がい者に鑑賞機会を提供することを趣旨とするが同時に、目の見える人も手で触れて美術を鑑賞することができるプログラムである。

「美術の中のかたち」は1989年、兵庫県立美術館の前身である兵庫県立近代美術館で始まった。兵庫県立近代美術館は1970年に開館し、全国で2番目に開館した公立の近代美術館である。当時、職員たちの間では、「当館は近代美術館としてどうあるべきか」という議論が活発に交わされていた。そんな折、視覚障害者が彫刻に触って鑑賞できる「ギャラリー TOM」(注 6-1)の存在を知った当時の学芸員らが、我々の美術館でもやってみよう、と発起したことが大きなきっかけだという。このような中で、美術作品に触って鑑賞できる「美術の中のかたち」や関西アート・シーンのいまを伝える「アート・ナウ」が誕生している。なお、「アート・ナウ」は

現在、「チャンネル展」として継続している。

この展覧会は常設展示室1階を会場としているが、それはバリアフリーで入館できるためである。1階で開催するのは、初回の近代美術館のころから一貫している。とはいえ、来場するのは視覚に障がいがある方だけでなく、むしろ多くが障がいのない方である。

2. 作品に“触れる”展覧会

「美術の中のかたち」の基本的な約束事は「触る展示とは？」という趣旨に沿ったものである点に集約されているため、学芸員の裁量が大きく、触れる展示と一言で片づけられない、バラエティの豊富さが特色である。

作品に直接触ることで、多かれ少なかれ作品へダメージを及ぼす。そのため「美術の中のかたち」では、当初は、館蔵のブロンズ像を出品するケースが多かったが、近年は作家に（新作を含む）出品依頼をするケースも増え、様態も変化してきている。出品作家により、作品の形態や素材もインスタレーションや、漆・和紙の作品など、実にさまざまである。実際に作家に“触れる展示”について依頼をすると、趣旨を理解し賛同を得られて、積極的な提案につながるケースが多いのだという。学芸員や美術館側は作品が受けるダメージや安全管理の懸念などから触れられることを心配してしまうが、作家自身はこのような鑑賞形態を機に、工夫して楽しんでくれるのだ、と飯尾さんは述べる。視覚のみに頼らない展覧会としての側面と同時に、国内で活動す

る現代の作家を紹介する場として期待されているところもあり、担当学芸員が本展をどのように解釈しているかが問われる企画でもある。

関西エリアの作家が多いのは、予算的な事情もある。コレクション展の中の予算の一部で実施する企画であるため、予算は限られる。また、毎年決まった額、ということではなく、ほかのコレクション展との兼ね合いの中で決定しているため、毎年事情が異なる、という内情もある。予算的には厳しいものもあるが、長く続けてきた社会的意義のある企画という使命を館として共有しているからであろう。現に、1995年の阪神淡路大震災、2020年の新型コロナウイルス感染拡大のケースを除き、すべての年で開催されている。【表2】

3. 展覧会の中と外での創意と工夫

視覚で鑑賞する形式と、触覚で鑑賞する形式の大きな違いとして、展示台を低めにし、触りやすい位置に作品を設置している。例えば、銅像の高さが90センチ程度の場合、通常は70cmくらいの台座を設置するが、触ってもらうとなると、15cmくらいの台座にする、などである。ここには展示作品全体に触ってもらうこと、子供でも触れる楽しさを感じられるように、という意図が込められている。視覚障がい者が安全に展示室内を歩けるように、点字ブロックを敷設することもある。

「美術の中のかたち」展では、作品解説として点字のキャプションも取り入れている。

住所 神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1
(HAT 神戸内) 〒651-0073
電話 078-262-0901
ファックス 078-262-0903
URL <https://www.artm.pref.hyogo.jp/>

【表2】兵庫県立美術館「美術の中のかたち」展一覧
 (橋本こずえ,2020,「2017年度「美術の中のかたち」を振り返る」『兵庫県立美術館研究紀要』第14号,兵庫県立美術館,等を参考に
 福島尚子が2023年に作成)

回	展覧会タイトル 開催期間	出品作品点数 出品作家名、()内は所属作品
第1回	フォーム・イン・アート - 触覚による表現 - 1989年6月22日～8月13日	31点 フィラデルフィア美術館視覚障がい者教育プログラムに学ぶ18名、(オーギュスト・ロダン、エミール＝アントワーン・ブールデル、アリストイド・マイヨール、ヘンリー・ムーア)
第2回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1990年6月21日～8月12日	28点 (オーギュスト・ロダン、アリストイド・マイヨール、エミール＝アントワーン・ブールデル、ジャン・フォートリエ、アレキサンダー・アーキベンコ、オシップ・ザッキン、ケネス・アーミテイジ、ジム・ダイン、高田博厚、本郷新、桜井祐一、伊藤隆康、柳原義達、山根耕)
第3回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1991年6月20日～8月11日	24点 山口牧生、宮崎みよし、坂口正之、(中原悌二郎、山本正道、高田博厚、柳原義達、植木茂、アリストイド・マイヨール、ヘンリー・ムーア)
第4回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1992年6月18日～8月9日	24点 市川悦也、田中昇、星野暁、(北村四海、山根耕、オーギュスト・ロダン、シャルル・デスピオ、レイモン・デュシャン＝ヴィヨン、ジャン・フォートリエ、ジョアン・ミロ)
第5回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1993年6月17日～8月8日	17点 福岡道雄、山崎亨、川島慶樹、(オーギュスト・ロダン、アリストイド・マイヨール、エミール＝アントワーン・ブールデル、ジョアン・ミロ、高橋清、本郷新、山本正道)
第6回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1995年6月15日～9月4日	16点 道北英治、車季南、松井紫朗、(植木茂、新妻実、高橋清、アレキサンダー・アーキベンコ、オーギュスト・ロダン、アリストイド・マイヨール、エミール＝アントワーン・ブールデル、オシップ・ザッキン、ヘンリー・ムーア、ジョアン・ミロ、ジャン・フォートリエ)
第7回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1996年6月15日～9月4日	25点 千葉県立千葉盲学校児童7名、藤原向意、おっと、(エミール＝アントワーン・ブールデル、オーギュスト・ロダン、レイモン・デュシャン＝ヴィヨン、アリストイド・マイヨール、佐藤忠良、朝倉響子、桜井祐一)
第8回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1997年7月20日～9月23日	22点 佐々木卓也、おっと、吉井秀文、(オーギュスト・ロダン、エミール＝アントワーン・ブールデル、菅井汲、高田博厚、柳原義達、山本正道)
第9回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1998年7月19日～9月15日	16点 牛尾啓三、中川佳宣、たかいちとしふみ、オーギュスト・ロダン、エミール＝アントワーン・ブールデル、アリストイド・マイヨール)

回	展覧会タイトル 開催期間	出品作品点数 出品作家名、()内は所属作品
第10回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 1999年6月27日～9月15日	17点 岩野勝人、河合晋平、茗荷恭介、(オーギュスト・ロダン、ヴィルヘルム・レームブルック、ジャン・フォートリエ、ケネス・アーミテイジ)
第11回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 2000年7月1日～9月17日	19点 マスダマキコ、松井智恵、山口さところ、(オーギュスト・ロダン、レイモン＝デュシャン・ヴィヨン、オシップ・ザッキン、アルベルト・ジャコメッティ)
第12回	美術の中のかたち - 手で見る造形 - 2001年7月7日～9月24日	10点 (オーギュスト・ロダン、柳原義達、高田博厚、エミール＝アントワーン・ブールデル、ジョアン・ミロ、ヘンリー・ムーア、ジャン・フォートリエ、アルベルト・ジャコメッティ、オシップ・ザッキン)
第13回	小企画 美術の中のかたち - 手で見る造形 光島貴之がみる近代彫刻 2002年12月4日～2003年3月16日	15点 光島貴之、(オーギュスト・ロダン、高田博厚、ジョアン・ミロ、柳原義達、オシップ・ザッキン、ジャン・フォートリエ、ヘンリー・ムーア、関根伸夫)
第14回	小企画 美術の中のかたち - 手で見る造形 松田一戯と密祐快 2003年7月17日～11月3日	21点 松田一戯、密祐快、(レイモン・デュシャン＝ヴィヨン、アレキサンダー・アーキベンコ、マリノ・マリニ)
第15回	小企画 美術の中のかたち - 手で見る造形 村岡三郎 鼓動する物質 2004年7月10日～11月14日	11点 出品作家：村岡三郎
第16回	小企画 美術の中のかたち - 手で見る造形 杉浦隆夫「みんな手探り」 2005年7月16日～11月3日	6点 杉浦隆夫、(オーギュスト・ロダン、ジャン・フォートリエ、ヘンリー・ムーア、高田博厚、関根伸夫)
第17回	小企画 美術の中のかたち- 手で見る造形 原田和男《Σ I Δ E P O H X O Σ - 鉄の響 -》 2006年7月22日～11月19日	66点 原田和男
第18回	小企画 美術の中のかたち- 手で見る造形 山村幸則「手ヂカラ 目ヂカラ 心のチカラ」 2007年7月7日～11月18日	4点 山村幸則、(オーギュスト・ロダン、ジョアン・ミロ、柳原義達)

回	展覧会タイトル 開催期間	出品作品点数 出品作家名、()内は所属作品
第19回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 さわれないかたちをさわる：梶滋・久保極の彫刻 2008年7月12日～11月9日	14点 梶滋、久保極
第20回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 Shadow-exhibition obscura- 藤本由紀夫 2009年7月25日～11月29日	14点 藤本由紀夫、(高松次郎、マルセル・デュシャン、エミール＝アントワーン・ブールデル、オーギュスト・ロダン、長谷川潔、オディロン・ルドン、井上安治)
第21回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 金氏徹平展 GHOST IN THE MUSEUM 2010年7月17日～11月7日	10点 金氏徹平、(エミール＝アントワーン・ブールデル、オーギュスト・ロダン、シャルル・デスピオ、佐藤忠良、菅井汲、ヘンリー・ムーア)
第22回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 榎本佳子展 やきもの変化 2011年7月16日～11月6日	18点 榎本佳子、三田、珉平、丹波
第23回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 祐成政徳展 I'd like to know what you really want. 2012年7月7日～11月4日	2点 祐成政徳
第24回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 近いかたち、遠いかたち 岡普司・重松あゆみ・中西學 2013年7月6日～11月10日	17点 岡普司、重松あゆみ、中西學
第25回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 横山裕一展「これがそれだがふれてみよ」 2014年7月19日～11月9日	25点 横山裕一、(ジョアン・ミロ、アルベルト・ジャコメッティ、菅井汲、ケネス・アーミテイジ、森口宏一、ジム・ダイン、井田照一)
第26回	手塚愛子展 Stardust letters- 星々の文 2015年7月18日～11月8日	5点 手塚愛子、(オーギュスト・ロダン、朝倉響子、柳原義達)
第27回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 つなぐ×つつむ×つかむ：無視覚流鑑賞の極意 2016年7月2日～11月6日	3点 (エミール＝アントワーン・ブールデル、ヘンリー・ムーア、ジャン・フォートリエ)

回	展覧会タイトル 開催期間	出品作品点数 出品作家名、()内は所属作品
第28回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 青木千絵展 漆黒の身体 2017年7月8日～10月15日	9点 青木千絵
第29回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 触りがいのある犬－中ハシクシゲ 2018年7月7日～11月4日	8点 中ハシクシゲ
第30回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 八田豊展－流れに触れる 2019年7月6日～11月10日	12点 八田豊
第31回	小企画 美術の中のかたち－東影智裕展 触知の森 2021年7月17日～9月26日	12点 東影智裕
第32回	小企画 美術の中のかたち－手で見る造形 彫刻の中のかたち 2022年7月30～9月25日	7点 (エミール＝アントワーン・ブールデル、オーギュスト・ロダン、レイモン・デュシャン＝ヴィヨン、アリストイド・マイヨール、ジャン・フォートリエ)

また、アンケート記入台には点字板を設置している。このような取り組みにおいては、館のノウハウだけでは賄いきれないため、点訳ボランティアグループ連絡会(神戸市中央区)に協力依頼をしている。美術館に障がい者対応専門職員はいないため、このような外部の協力は欠かせない。

人神戸アイライト協会から講師を招聘し、職員、監視員、ミュージアム・ボランティアに向けた案内・誘導の仕方などの研修を実施している。この展覧会ではボランティアは鑑賞の手助けとして来場者に解説も行う。来場者と触れ合うことの多い年一回のこの機会を楽しみにしているボランティアも少なくない。

以前は、アウトサイダー・アートを研究する学芸員がいたため「美術の中のかたち」展以外にもアウトサイダー・アートの展覧会などを実施したこともあった。

4. 美術館の体制

兵庫県立美術館では、毎年「美術の中のかたち」の会期に合わせて、認定NPO法

障がい者と芸術活動に関する著作がある

服部正氏は、2002年～2012年に同館に学芸員として在籍し、アール・ブリュットの取り組みを手掛けてきた。2002年、2005年に「美術の中のかたち」展を担当したほか、2012年に企画したアール・ブリュットの作家としてチェコ出身の画家を紹介する「解剖と変容：ブルニー&ゼマーンコヴァー」においては、4か月で100名以上のアール・ブリュット関係者から聞き取りを行っている。このような実績は、兵庫県立美術館のアウトサイダー・アートを語るうえで欠かせないだろう。(注6-2)

一方で、美術館で実施されるプログラムは、学芸員の研究テーマや関心の方向性によっておのずと変化する。美術館の障がい者に向けたプログラムのイメージは「美術の中のかたち」だけでなく、学芸員の取り組みや発信によって作られていくが、人に依る知識や経験の蓄積を美術館の財産としていかに発展させていけるかは、どの美術館にとっても、また障がい者のプログラムに限らない課題である。

【感想】

飯尾さんのお話の中で、なかなかリアルタイムに障がいのある人の声を拾うことができていない、との言葉があった。大規模な施設であればあるほど、来場者との距離が遠くなりやすく、喜びや発見、困りごとについて気づくまでに時間がかかってしまう。そんなジレンマを感じていることも伝わってきた。一方「美術の中のかたち」の展覧会としてのバリエーションの豊かさに長く続いているからこそその冒険心も感じられるのも事実である

(注6-1)

視覚障害者が彫刻に触って鑑賞できる場所として村山亜土(故)・治江によって1984年に東京都渋谷区に創設された私立美術館であり、「触れて鑑賞する」美術館の草分け的存在。

(注6-2)

服部氏の展覧会キュレーション及び研究活動は日本における「公立美術館の障害者等の芸術活動」において重要である。しかし訪問時に深めることができなかった。今後の課題としたい。

(注6-3)

参考資料についてわかる範囲でのみ書き出した。兵庫県立美術館の「美術の中のかたち」展は、長年の取り組みの中で同館学芸員は折に触れ論述を残している。

【調査概要】

実施日：2022年10月14日(金)10:30～12:00
場所：兵庫県立美術館応接室

【調査対象者】

飯尾 由貴子(いとおゆきこ)

兵庫県立美術館学芸員 館長補佐兼課長。兵庫県立美術館の前身である兵庫県立近代美術館に1998年に学芸員として入職し、美術館の改称・移転を経て勤務。「美術の中のかたち-手で見える造形」は、「村岡三郎・鼓動する物質」を2004年に担当している。2015年10月より、館長補佐兼課長。

【参考資料】(注6-3)

江上ゆか,2018,「周到にできること-2018年度「美術の中のかたち」展報告」『ART RAMBLE』vol.61,兵庫県立美術館。

——— 2018,「「触角が生み出す作品とは」開催報告」前掲書

——— 2020,「彫刻における触覚的なものとは-2018年度「美術の中のかたち」展の場合」『兵庫県立美術館研究紀要』第14号,兵庫県立美術館。

岡本弘毅,2021,「学芸員の視点 触れて知れたのか-「美術の中のかたち 東野智裕展-触知の森」」『ART RAMBLE』vol.74,兵庫県立美術館。

小野尚子,2020,「「八田豊展 流れに触れる」関連事業」『ART RAMBLE』vol.65,兵庫県立美術館。

河崎光一,2010,「学芸員の視点「美術の中のかたち」20年を迎えて」『ART RAMBLE』vol.25,兵庫県立美術館。

河田亜也子,2016,「「無視覚流」の道を究める-視覚によらない鑑賞について」『ART RAMBLE』vol.52,兵庫県立美術館。

相良周作,2006,「学芸員の視点「美術の中のかたち」

を担当して-その中に潜むかたちやひびきやその他-」『ART RAMBLE』vol.12,兵庫県立美術館。

塩田純一,2017,「特別寄稿 アドルフ・ヴェルフリ原野のアールブリュット」『ART RAMBLE』vol.54,兵庫県立美術館。

永宮勤士,2020,「30回目を迎えた「美術の中のかたち」~八田豊作品が投げかけるもの」『ART RAMBLE』vol.65,兵庫県立美術館。

西田桐子,2014,「学芸員の視点 触っている私を見ないで-「美術の中のかたち」展をめぐる断章」『ART RAMBLE』vol.51,兵庫県立美術館。

橋本こずえ,2017,「学芸員の視点1 28回目「美術の中のかたち」展会場にて」『ART RAMBLE』vol.61,兵庫県立美術館。

——— 2020,「2017年度「美術の中のかたち」展を振り返る」『兵庫県立美術館研究紀要』第14号,兵庫県立美術館。

服部正,2008,「アウトサイダー・アートと障害者自立支援法」『兵庫県立美術館研究紀要』第2号,兵庫県立美術館。

——— 2008,「美術館の周縁「障害者アート」公募展の意義」『ART RAMBLE』vol.20,兵庫県立美術館。

——— 2011,「美術館の周縁 アウトサイダー・アートのある人生」『ART RAMBLE』vol.30,兵庫県立美術館。

光島貴之,2005,「特別寄稿 ほくは「美術の中のかたち」とこんな風につきあった」『ART RAMBLE』vol.8,兵庫県立美術館。

安永幸史,2022,「ショートエッセイ 美術の中のかたち展 関連ワークショップ「手でみる身体~音の門 耳をかたちづくる・拳の空間~」について」『ART RAMBLE』vol.76,兵庫県立美術館。

『ART TRMBLE』vol.32

茅ヶ崎市 美術館

文：中西美穂

海風を感じる小さな公園の小高い丘に茅ヶ崎市美術館はある。公園の樹々を丁寧に整備する高齢の男女を数名みかけた。樹々の中の短い小道の終着点に美術館があった。入ってすぐのエントランスのソファに、学校帰りの子どもたちがくつろいだ様子で座っていた。茅ヶ崎市美術館学芸員、藤川悠（以降、藤川さん）にお話をうかがった。

1. 「じぶん」をテーマにした展覧会（2014-2016）

教育普及と現代美術を専門とする学芸員の藤川さんは、夏の展覧会企画を担当することが多い。2014年から2016年までの3年間は、テーマを「自分」とし、1年目「自分」、2年目「自分と他者」、3年目「自分と周り」と、1人称から、2、3人称、そして周囲へと、自分から関係の領域が増えていく関係性に着目した企画展を開催した。3回目の2016年が、次年度2017年での気づきにつながり、2018年から始まる、聴覚障害者や小さな子ども、視覚障害者と盲導犬、車椅子ユーザーとアーティストたちと一緒につくり上げる展覧会「美術館まで（から）つづく道」につながった。

2014年夏の「自分」をテーマにした「じぶんのいっぽ—ここから展」では、アーティストの金箱淳一と首藤圭介による体験型のメディアアート作品を紹介する現代美術展を行った。また、関連プログラムとして館

アトリエ等で造形ワークショップを行い、さらに近隣の大学生の協力を得て、アーティストとともに展示作品につながる小中学及び養護学校へのアウトリーチのプログラムも行った。その経験は、2年目の「学校でできないようなことを、美術館で」との発想につながった。学校での図工や美術は、それぞれの机で収まる用紙サイズ、授業時間内で収まることが基本になっていた。ならば「学校とは異なる美術館だからこそできること」を実現したいと考えた。

2年目となる2015年「正しいらくがき展」は、アーティストのやんつーと菅野創によるドローイングマシンが制作した巨大絵画《Drawing#2-7 by SEMI- SENSELESS DRAWING MODULES》（「札幌国際芸術祭2014」出品作品）を同館に展示し、それを小学生と高校生らが巨大壁面に前に手描きで模写し、さらにそれをドローイングマシンによる模写作品《SEMI- SENSELESS DRAWING MODULES#1（SDM1）-Replicate》として完成させるというインリーチのプログラムをおこなった。

そして3年目の2016年は、「自分の耳、目、鼻、手、あらゆる感覚を頼りに、見ようとしても見えなかったものに、目を向けるために企画」[藤川悠,2016]として、「じぶんのまわり展」に取り組んだ。

2. “手触り”と“香り”のコミュニケーション型の作品

2016年の「じぶんのまわり展」では、アーティストユニットMATHRAXによる光、音、

香りなどを扱ったインスタレーション作品がメインとなり、《ひかりのミナモ》、《ステラノーヴァ》、《点字をうたうクマ / 展示をうたうバッファロー》、MATHRAX + 茅ヶ崎市立西浜中学校美術部 + 茅ヶ崎市立松林中学校美術部による《石の声を聴くにはどうしたらいいんだろう？》、MATHRAX + 中西裕子 + 松本薫による《language（ランゲージ）》が展示された。また関連プログラムとして工作や鑑賞のワークショップ、ゲストトークも開催された。展示作品も関連プログラムも感覚的な体験をテーマにしている。

展示作品の一つ《language（ランゲージ）》は、アーティストユニットMATHRAXと当時、資生堂グローバルイノベーションセンター研究員の中西裕子と松本薫による共同作品である。展示されているのは手のひらサイズから、手より少し大きめぐらまでの大きさの3つの木でつくられた動物のオブジェである。それらをなでると、音や光とともに、展示されている同じく木でつくられた花の3つオブジェからドライフルーツ、ハニーレモン、グリーンハーブの香りがそれぞれ発生する。放出された香りは、空気中でバラの香りに調香される、“手触り”と“香り”を通してのコミュニケーション型の作品である。

藤川さんは、この作品は、目の見えない人も、触れて香って、楽しめるんじゃないかと思い、アーティストと相談し、関連プログラムとして「視覚障害者とつくる『美術鑑賞ワークショップ』」を同ワークショップ代表の林建太に依頼し開催した。これは目が見える人、見えない人、が一緒に作品を見て、語り合い、ひとりでは気づけない

住所 神奈川県茅ヶ崎市東海岸北
1-4-45 〒253-0053
電話 0467-88-1177
ファックス 0467-88-1201
URL www.chigasaki-museum.jp

作品の見方を、数多く発見することを目的としたプログラムである。そこに「11年ぶりに美術館に来た」という弱視の方の参加があった。「美術館は、これまでより、もっと広く多くの人に鑑賞体験をしてもらうことが出来るんじゃないかと」藤川さんは、気づかされたという。

なお、これらの取り組みでは、インクメーカーのパイロットや、香りの専門研究員がいる資生堂など、企業の協力を様々に得ている。予算が常に潤沢とはいえない美術館において、企業とのコラボレーションはメリットである。企業への打診やその後の調整などの“交通整理”も藤川さんの役目である。

3. 県内の美術館・芸術祭が連携する「マルパ」への参加

茅ヶ崎市が属する神奈川県に、国際交流、国際協力、多文化共生の実現などをミッションとする外郭団体「かながわ国際交流財団」があり、そこにプラットフォーム型アートプロジェクト「マルパ」がある。財団ホームページにリンクがあるマルパのホームページには団体について以下のような説明がある。

神奈川県内の4つの美術館の館長・学芸員と芸術祭連携団体の実行委員等が集まり、2016年度に立ち上げられたアートプロジェクトです。MULPAとはMuseum UnLearning Program for Allの頭文字を取った略称で、日本語では「みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—」としています。

マルパは定住外国人や障がいを持つ方々を含む「すべての地域住民」の、美術館へのアクセスを目的として、地域の美術館が芸術祭や大学と連携して包摂的な教育普及事業を検討・展開していきます。（MULPA ホームページより）（注7-1）

4つの公立美術館と芸術祭連携団体とは、神奈川県立近代美術館、横須賀美術館、平塚市美術館と芸術祭連携団体（相模湾・三浦半島アートルック）である。

茅ヶ崎市美術館はマルパのメンバー館であり、藤川さんはマルパの実行委員である。マルパでは、メンバー館の中で教育普及を担当あるいは興味がある学芸員が、ゆるやかにつながる、インクルーシブをテーマにした研修会などを開催している。

4. 「わからないことを楽しむ」こと

2017年開催のマルパ主催フォーラム「みんなでまなびほぐす美術館」における、ワールド・カフェ（注7-2）形式の話し合いの場の「最近、ハッとしたこと？」というテーマの中で、弱視の方が「茅ヶ崎市美術館までの道が、迷路のようで楽しかったんです」と発言したという。

最寄り駅から茅ヶ崎市美術館への道はわかりにくい。受付スタッフが「わかりにくい」と、来館者から怒られている姿を見かけたこともあるという。藤川さんが専門とする現代美術は「わからない」と枕詞につくことが多いし、「わからないこと」も何かを考えるきっかけとなる魅力の一つだろう。だ

からこそ「わからない」ということに対する昨今の社会の中での憤りが、何なのか気になっていたという。藤川さんは、「わからない=（コミュニケーションの）遮断の言葉になっているのではないか？」という疑問が湧いていた時だったので、弱視の方が「わからないことを楽しんだ」という発言に様々な意味でハッとさせられたという。「わからない」ってことを楽しもうとするパワーが、魅力的であり、何かの突破口に思えた。

そのようなことがあり、特性が違う人ならば、より一層、違う価値観を見出すことが出来るんじゃないかとの思いが、次なる企画のスタートとなった。

5. 美術館まで（から）つづく道（2018-2019）

次なる「美術館まで（から）つづく道」は、2018年度にリサーチとして講演会とフィールドワークを行い、翌2019年度に展覧会を開催する、2年にわたる企画である。

2018年度、茅ヶ崎市美術館では「美術館までつづく道」と題し、リサーチとして「インクルーシブデザインの手法を活用したフィールドワーク」を実施した。実施費用はマルパから各館に配分されたワークショップ予算を活用した。

館アトリエで開催した講演会「インクルーシブデザイン×デザイン思考を美術館に活用する方法」では、これまでのデザインとは大きく異なる2点を美術館関係者と講演会参加者で確認した。1点目は「デザインする時のはじまり」、何を作るかを決めてか

らではなく、企画の最初の段階からユーザーが参加する。2点目は「対象者」、人口の割合が高い層ではなく、割合が少ないかもしれない人をターゲットに考える、といったことである。

次に4種類のフィールドワーク「聴覚の感覚特性者（注7-3）と歩く道」「小さな感覚特性者と歩く道」「視覚感覚特性者と盲導犬と歩く道」「車椅子ユーザーの感覚特性者と歩く道」を各一回行った。各日とも、以下の4ステップを行った。

- ステップ1：フィールドワーク
- ステップ2：感情マップの作成
- ステップ3：共有したい気付き（価値）の共有
- ステップ4：共有したい価値を表現に（茅ヶ崎市美術館イベントレポートより）（注7-4）

ステップ1は、感覚特性者やアーティスト、美術館関係者が、美術館から駅や、浜辺など周辺を一般道に沿って歩きめぐり、ステップ2～3は館内アトリエに戻り、参加者全員で付箋に考えを書き出してグループで共有していくなどのワークショップであった。

フィールドワークに対して当初、「道を歩いて価値観を変換するのならば、スロープをつける、段差をなくす」かのように受けとめられ、道路交通課や公園緑地課との連携が前提になるのではないかと、という指摘もされた。しかし、藤川さんは、この企画では、これまでである先入観からではなく、リサーチが重要であるとし、まずリサーチ

を行うことを優先した。道を歩きやすくするために歩くのではなく、道をアーティストと障害のある人が歩いて、その気づきから作品を創作する展覧会づくりを計画した。

フィールドワークは一般道を歩くため、見学者への対応が簡単ではないと予測された。そのため、関係者の視察や一般参加者の公募は行わなかった。かわりに、活動記録の詳細を館のブログで紹介した。

翌2019年度に展覧会「美術館まで（から）つづく道」を開催した。同展にはアーティスト3名と2組が、前年度のフィールドワークをもとに現代美術作品5点、金箱淳一+原田智弘《音鈴（おんりん）》、原良介《土手の上で》、稲場香織《道の香りパレット》、MATHRAX〔久世祥三+坂本茉莉子〕《うつしおみ》（香料開発：稲場香織）、アーサー・ファン《茅ヶ崎散歩記憶と記憶細胞》

を制作し、発表した。

このリサーチから始まる展覧会企画では、最初にチームづくりを行なったという。藤川さんが選んだアーティストに加えて、一緒に歩いてもらう感覚特性者である聴覚障害者らである。またインクルーシブデザインのファシリテーターとテクニカルアドバイザー、グラフィックデザイナー、記録撮影者、そして「香り」や「脳科学」を専門とする研究者も入れた。チームイメージを以下の図に示す。【表3】

「視覚感覚特性者と盲導犬と歩く道」の記録動画を見せてもらった。チームの10人弱が、二車線の一般道の片側を一列でゾロゾロと歩く様子が見られる。予想外であったのは、盲導犬ユーザーの歩くスピードの速さだったという。「颯爽と、びゅんびゅんと、歩いて行って」だんだん後ろの団体が引き



【表3】茅ヶ崎市美術館「美術館まで（から）つづく道」展のチームづくり（藤川悠2017年作成）



【図7】（上）マルバ・フィールドワーク 茅ヶ崎市美術館「美術館までつづく道」-視覚感覚特性者と盲導犬と歩く道-（2017年）、（下）MATHRAX〔久世祥三+坂本茉莉子〕《うつしおみ》（香料開発：稲場香織）（2018年）。いずれも写真：香川賢志

離されそうになったそうだ。この進んで行く、リズムカルな様子から、アーティストユニット MATHRAX が体感型インスタレーション作品《うつしおみ》を生みだし、展覧会の意義を印象づける展示作品の一つになったという。

同企画は第12回神奈川県バリアフリーまちづくり賞（ソフト部門）、令和2年度障害者の生涯学習支援活動に係る文部科学大臣表彰（奨励賞）を受賞。令和3年度地域創造大賞（総務大臣賞）の受賞に大きく貢献している。

6. 美術館が成せる技

展覧会「美術館まで（から）つづく道」を準備する段階で、館勤務の受付と監視スタッフを対象にダイバーシティ研修をおこなった。館において、障害がある人と最初に出会うのは、受付や監視スタッフである。研修会は同館で行い、視覚障害者や聴覚障害者、車椅子ユーザーなどを講師として招いた。館で研修会を行ったことにより施設の特長も明らかになり、小さな改善もすることができた。例えば、少しの段差や床の特性が障壁となる車椅子ユーザーへの対応である。館の入り口の扉は外からの風を防ぐ1枚と、館に入る1枚の2段階あり、それぞれにマットが1枚ずつ置かれていた。車椅子ユーザーにとっては入館までに2枚のマットによる障壁がある。このマットが2枚とも必要かどうか、清掃スタッフも交えて検証実験をした。その結果マット1枚だけでも清掃の負担は大きくはならないこ

とがわかった。そこで車椅子の車輪を進めるのに力が必要となっていた入り口のマットは1枚とすることにした。また結果的に少額だがマットレンタル代金1枚分の支出の削減にもつながった。

藤川さんは、学芸員の立場から、美術館のハード面を変えることは簡単ではないが、価値観を変えることはできると考えている。「美術が成せる技って、なんだろうって。人の価値観や見える景色を変えたり、さらには人の持っている「助けてあげなきゃ」という思いが、「むしろ、関わってみたいな」という思いに変えたりできるのではないか。そういう、ちょっとした思いや考えが伝われば、もう少し、いろんなところで、生きやすくなるんじゃないか」という。

「美術館が提供するものは、美術だけなんですか？」との質問を調査側より、ぶつけてみた。藤川さんは「難しいなあ。美術の特技ってなんでしょうね。受け取った人にとっても、それぞれに大きく違うと思うんですが」と前置きしつつ、今回の「美術館まで（から）つづく道」展を進めていくのに対して、「美術館は福祉施設ではないのでは」との意見があったことを教えてくれた。「たしかに美術館は福祉施設と異なります。福祉施設のように専門スタッフがいて人を支える体制は美術館にはない。どんな人が来ても心地よいサービスや環境を美術館が提供することも非常にハードルが高いだろう」という。ただ、あくまで最初から「美術の表現として見せていく」ということを軸に据えて、やってきたという。それは、一つの価値観に留まらず、一つの価値観で終わらないという、美術の特性があると思っ

ていたからだ。企画したこの展覧会には、いくつかのレイヤーを盛り込んでいたとのことであった。振り返れば「地域の美術館として地域の魅力を引き出したい」、「障害がある人の“助ける”“助けられる”という関係性を揺るがせたい」「美術の表現として、見るだけじゃなく多くの人に美術を開いていく可能性を持ちたい」というメインとなる三つのレイヤーを重ねていたという。藤川さんは続けて「これにより、何が届けられるといいだろうと、思っていたんだろうか。たぶん、なにか未知のもの向き合うとか、他者と向き合うとか、みたいなもの、そういう素地みたいなものを届ける。それこそ現代美術のように、わかんないって、いわれながらも届けるように。つまり“未知のものや、知らないものと出会う場の提供”なんですか。それは、他者と出会う環境でもあるだろうし、それが人だけでなく、モノでもあるかもしれない。そういう懐の深さみたいなものが、美術の特技かなあ」と、考えながら応答した。

新型コロナウイルス感染症拡大時期、人々が来館しにくい状況の中では、ネットアート体験プログラムを、若見ありさ、高尾俊介、久世祥三の3人のクリエイターに頼んで、ホームページ上で立ち上げた。自宅でも美術館に親しめるオンラインでのアニメ絵本やプログラミングでつくる絵画や音楽づくりを、アドバイザーの小林桂子による教育者向けのコラムと合わせて公開した。これによりオンラインで多様な取り組みができることがわかった。一方で、このようなオンラインプログラムを楽しむ参加者らが、どのような環境の中でパソコンに向き合っ

ているかが、現時点ではわからない、と言う。美術館でのワークショップでは参加者の姿や様子を見ながら交流を実践している。そのように、オンラインプログラムを自宅で楽しむ人たちが、どういう表情や姿や思いで過ごしているのか、企画をしていくためには知る必要があるのではないかと感じたとも言う。

藤川さんは、オンラインプログラム企画も経験して、あらためて「美術館がある意義はなんだろうか、その土地に美術館がある意味はどういうことなのだろうか」と、次の企画を考えている。

【感想】

公立美術館と企業連携の具体例として香りの参加型作品《language》を知れ、興味深かった。個人的に、病院や介護とアートに関わる現場で、「におい」を考える機会があったからである。また、展覧会のリサーチ段階からチームをつくり、取り組みを進めていることで、より柔軟に「未知なるもの」を生み出していることに気づかされた。障害者等の芸術活動に関わる取り組みが、学芸員の気づきやネットワークを育みながら、今日的な美術館の存在意義につながるの示唆も得ることができた。

(注 7-1)

<http://www.kifjp.org/mulpa/about>

最終閲覧日 2023 年 2 月 19 日

(注 7-2)

1995年に Juanita Brownと David Isaacsによって開発・提唱された話し合いの手法。リラックスしてオープンに生成的な話し合いを行えることを目的とし、本物のカフェのようにリラックスした雰囲気の中で、テーマに集中した対話を行う。「自分の意見を否定されず、尊重されるという安全な場で、相手の意見を聞き、つながりを意識しながら自分の意見を伝えることにより生まれる場の一体感を味わえる」「メンバーの組み合わせを変えながら、4～5人単位の小グループで話し合いを続けることにより、あたかも参加者全員が話し合っているような効果が得られる」特徴がある。

参考 <https://world-cafe.net/>

最終閲覧日 2023 年 2 月 19 日

(注 7-3)

茅ヶ崎市美術館の「美術館まで（から）つづく道」では、主に障害者の障害というより、当事者の感覚に焦点をあてることを目的とし、障害のある人を感覚特性者と呼んでプロジェクトを進行した。

(注 7-4)

https://www.chigasaki-museum.jp/event_report/

最終閲覧日 2023 年 2 月 19 日

【調査概要】

実施日：2022 年 10 月 19 日（水）

場所：茅ヶ崎市美術館 アトリエ

【調査対象者】

藤川 悠（ふじかわはるか）

茅ヶ崎市美術館学芸員。広島市現代美術館、森美術館、東京都現代美術館の勤務を経て、現職。現代美術と教育普及を専門とし、環境や空間を活かし人の五感に働きかける展覧会やプログラムの数多く企画。インクルーシブデザインの手法を取り入れ企画した「美術館まで（から）つづく道」展（2019）は、多様な人々に向けてアートの新たな試みとして各方面から注目を集める。その他、文化庁メディア芸術祭選考委員、女子美術大学で非常勤講師を務める。

【参考資料】

茅ヶ崎市美術館,2014,『展覧会ドキュメント：じぶんのいっぽ展』.

茅ヶ崎市美術館,2015,『展覧会ドキュメント：正しいらくがき展』.

茅ヶ崎市美術館,2016,『展覧会ドキュメント：じぶんのまわり展』.

茅ヶ崎市美術館,2019,『展覧会ドキュメント：美術館まで（から）つづく道』.

MULPA (<http://www.kifjp.org/mulpa/about>)

新潟市 美術館

文：福島尚子

新潟市内には市立美術館が2館ある。一つは中央区にある新潟市美術館、もう一つが1997年に新津市美術館として創立された現・新津美術館である。2005年の市町村合併によって、一市が二つの美術館を有することになった。今回は新潟市美術館を中心にお話を伺った。学芸員は非常勤1、学芸係長1、係員が4名の6人体制。展覧会の担当は各員の専門性、経験を考慮して決定する。

1. 始まりとなった「アナタにツナガル」展

近年の展覧会で障がい者が意識されたのは2016年に実施した「アナタにツナガル」展である。当時の館長は前任の塩田純一氏。塩田前館長が着任した翌年、2012年9月に発表した美術館の運営方針「新潟市美術館がめざすもの」として、「発見する美術館」「学べる美術館」「生きている美術館」「つながる美術館」「信頼の美術館」という五項目が定められた。中でも「生きている美術館」「つながる美術館」を美術館の個性として展覧会に反映させたのが2013年度の「ニイガタ・クリエーション」そして2015年度の「アナタにツナガル」展である。これらは二部作ともいえる美術展で、「生きている美術館」の方針を踏まえた「ニイガタ・クリエーション」では、新潟ゆかりの作家をオムニバスで取り上げた。生きている美術館ということで、美術作家だけでなく、コンサートの開催や新潟市民芸術文化会館りゅーとびあ

専属舞踊団 Noism による展示参加など多角的なものとなった。この展覧会を踏まえて、次に開催するのは「つながる美術館を」ということで、2016年に開催されたのが「アナタにツナガル」である。このような経緯のため、障がい者向け、とか社会包摂などを強く意識したわけではなく、普段つながりにくい人たち、というコンセプトに基づいたのであった。

ところで、アナタとは彼方、とも書く。「アナタにツナガル」展は、一見美術館とは縁遠く見える存在と繋がることをテーマに、国内外で活動するアーティストと同様に新潟で活動するアール・ブリュットアーティストを取り上げた。同時に同展出品作家である美術家の折元立身さんに持ち掛けたのが、できるだけ遠い人を想像しよう、という提案で、目の見えない人とコミュニケーションしてもらい取り組みとして実現された。彼の母親・男代さんのアルツハイマー型認知症が進んで、自分のことも忘れてどんどん遠いアナタになっていく、ということも自身の作品の大きな要素となっていた。また、折元さんはかねてからパン人間としてパンを纏うことで、目に見えて異物になることで言葉などのギャップを乗り越えるパフォーマンスを行っていた。それを受け、新潟市美術館の「アナタにツナガル」展で、荒井さんがコミュニケーションの方法の新しい切り口として「目の見えない人と何かしませんか」という提案をした。この提案は、最終的に視覚障がい者の方によるパン人間のパフォーマンスという形で実現した。学芸員として荒井さんは視覚障がい者の施設に行って打ち合わせをしたが、彼らにとっ

て美術館というのは馴染みのない場所で、「そんな施設（美術館）の人が一体何をしに来たのだろう」と思われたのだという。また、荒井さん自身もどのように視覚障がい者と接して良いかがわからなかった。とにかくすべてが手探りで始まった。

2. 受け入れ体制と態勢

「アナタにツナガル」の会期中には、来館者としての視覚障がい者の来館も複数あった。施設のハード面も視覚障がい者への受け入れに十分とはいえず、スタッフも視覚障がい者向けの対応を学習したり準備を行ったりするような余裕はない。想定できないケースも多く見込まれることから、障がい者の方の鑑賞にはその時にいる学芸員が直接対応することにした。うまく対応できない可能性もあるが、鑑賞に際してはできることは全力を尽くそう、という中で苦肉の策であった。前山館長曰く、作品の解説で学芸員の技量も試される、とのこと。作品の前に立ち、何から語りだすのか、どのように表現するのか、解説者が伝えたことや感じていることが如実に反映されるのだという。荒井さんが視覚障がい者の来館者を案内した際、実際に解説したのは30分くらいであったが、部屋を再現したインスタレーションの作品を取り上げ、内装の素材に触れてもらったり、録音された音を聞いてもらったりと、視覚以外の感覚で楽しめるものを中心に案内したという。すべての作品を鑑賞してもらうことはできなかったし、視覚障がい者の案内としては初

住所 新潟市中央区西大畑町 5191-9
〒951-8556
電話 025-223-1622
ファックス 025-228-3051
URL <http://www.ncam.jp/>

歩レベルだったかもしれないが、自分だけでは得られない貴重な経験だったという。

なお、「アナタにツナガル」がきっかけとなり、新潟市は2017年の日仏文化対話における紹介展示の一環として折元さんの作品を出品することになった。これは美術館が主導したわけではないが、この展覧会に着眼したアーツカウンシル新潟が提案し、ナント市での展覧会が実現したのである。後でも述べるが、新潟市の障がい者プログラムの特色として、美術館だけにとどまらない人のかかわりが挙げられる。

3. 前山館長による美術館外の取り組み

前山館長の2018年の着任以来、新潟市で積極的に取り組んでいるのが、美術館以外の連携である。もちろん、前任の埼玉県立近代美術館での実績や文化庁などの連携の経緯もあるが、新潟市では公・民の様々な機関と連携しながら障がい者を対象にしたプログラムが実行されている。例えば、新潟市文化政策課で実施している事業「ともにアートプロジェクト：表現活動調査」では、市内の障がいのある人たちの作品について情報収集し、選んだ作家たちの展覧会「あふれる思い ふれる気持ち」としてショッピングモールや美術館の市民ギャラリーで展示する、という取り組みを実施している。前山館長はこのプロジェクトの中で障がい者の作品の選考を担う。もちろん市として長期的に実施していくことが前提ではあるが、このような役割も、いずれは新潟市美術館の学芸員が担うことを念頭に

置いているという。

その他の連携として、2019年の障害者文化祭の企画展「つくる いきる はじける ふっとつ障害者アート！」が挙げられる。前山館長が提案したのは、閉店が決まった百貨店の中に障がい者による作品を展示することであった。長らく市民の暮らしとともにあった百貨店の思い出に、「最後にあそこで何か見たな」という記憶を加えてもらえれば、と思ったとのこと。そのほかにも、商業施設の一角に、手で触れる彫刻を展示し、宮田亮平・文化庁長官（当時）の彫刻も出品された。これらの取り組みについて、新潟のおもてなし、アクセシビリティを市民に浸透するようなことができれば、後々まで市民に残っていくのではないかと感じて実施したと述べる。大々的に障がい者アートで街を塗り替えていくようなことではなく、生活の中に溶け込むように、当たり前障がい者の表現が存在することで、ブームに終わらせない取り組みにする必要性があるという。

4. 学校向けのプログラム

美術館に話を戻すと、特別支援学校などは、団体鑑賞で来館することもある。中でも、アトリップというアウトリーチでの事前学習と美術館での鑑賞を組み合わせた取り組みを2015年から市内小中高校を対象に実施している。実施は応募制なので、中には特別支援学校で実施するケースもある。事前学習や鑑賞の流れは普通校と大きな違いはないが、特別支援学校の児童・生徒から

の反応は、表情からはくみとりにくい場合や、目に見えるリアクションがないこともある。学芸員も美術館としても、特別支援学校への対応についての方法が確立されているわけではないので、毎回試行錯誤しながら実施しているのが実情である。教育普及の担当学芸員はいるが、障がい者対応が専門というわけではない。

学芸員としては、学校からの鑑賞をきっかけに、障がいがあるかどうかにかかわらず、気軽に楽しめる場として美術館を開いていきたいと思っているが、子どもが騒ぎ出すことや、ほかの来館者からの目を気にして来館をためらうという声も聞かれるのだという。

5. アクセシビリティをよくしていくとは

2022年11月に発行された新潟市美術館の広報誌「WAVE」の中で前山館長はアクセシビリティについて「正解のない場所が美術館で、だからこそ教育機関としての存在意義があるはずです。でもアクセシビリティは違います。すべてのお客様に残念な気持ちを抱かせない、と考えれば、「合理的配慮」が見えてくるのではないのでしょうか。」と記している。障がい者に関する仕事を多く手掛ける中で、近頃気になってきているのは、中身（展示作品）については意欲的な人はたくさんいるが、展示する場所のアクセシビリティについて検討する人や意識がまだ高まってきていないのではないだろうか。付近の交通量が多い、道が狭い、段差が解消できない、などのハードが追いつくのは難しいが、人の気づきで解消できるアクセ

シビリティの改善については新潟市美術館でも考えていきたいという。例えば、新潟市美術館は交通の便があまりよくないので、アクセスしづらい人の立場から見ると、「来られる人が勝手に来ればよい」という風にとらえられる可能性がある。「美術館に行ってみたくはちょっと不安だな」、と思う人の心情にどれだけ寄り添えるか。これは美術館だけでなく、福祉団体や行政など、全体としてどうしていくか、という視点で考えていくことが必要だと感じている。

人によるアクセシビリティについての重要性を実感する理由の一つに、新潟市美術館の建物の個性が起因している。新潟市美術館は新潟市出身の建築家・前川國男最晩年の作品であり【図8-1】、建物の保全面も考えなければならない。老朽化の解消ということで、美術館のバリアフリー化はある程度改善されてはいるものの、例えばスロープ【図8-2】が急で、手動車いすだと昇降がかなり負担である、などの課題はある。バリアフリーにするために建物を改造する／不具合を見逃す、という二者択一ではなく、「車いすを押しましようか？」という言葉が出てくる環境や体制づくりを目指しているという。



【図8-1】新潟市美術館外観。撮影：今井智己



【図 8-2】新潟市美術館館内スロープ。撮影：今井智己

6. 感覚の違い・鑑賞形態の違い

荒井さんから、新潟市美術館ではなく、もう一館の新津美術館で体験したことを話していただいた。2000年「ラボラトリイ2 共鳴する空間 金沢健一 音のかけら」展を開催した時のことであった。金沢氏による《音のかけら》シリーズは、溶断された金属片をたたいて音を出す、という体験型の作品である。残響の長い展示室内で、ある日、大音量で叩きつける子どもがいた。あまりに大きな音なので、いたずらかと思って、やめるように声をかけようと近づいたその時に、音を鳴らしている子どもが難聴だということに気づいたのだという。音の聞こえづらい人にとっては、大きな音を鳴らすことで、ようやく音を感じたり、身体で振動を感じることができたのだろう。聞こえる大きさが違うなど、一人一人に楽しめる環境は全く違う、ということについて考えさせられた出来事だった。あらゆることを想定することは非現実的で、やはり目の前の一人に対して、どのように作品と出会ってもらえるか、ということに傾注するしかない。その人にとって最適化できなければ意味がない。とはいえ、坂道での車いすの取り回しや、避難誘導についてどのようにするか、非常時に落ち着いて案内ができるのか、など基本的なところでスタッフ全員の知識があるのかは再確認する必要があると思う。

人によって鑑賞の仕方が違い、何をハードルに感じるかも異なる。それぞれにマニュアルや想定解を準備し、対応していくほどの余裕は残念ながらほとんどの美術館

が持ち合わせていないだろう。このような中で、「困りごとに気づいて、手を貸せる」という人の態勢に弾力性を持たせることで、新潟市美術館の機動力を上げている。

【感想】

市民と美術館の距離の近さを実感した。障がいのある人を前に、どのように対応したか、という体験談から経験としての実感が伝わってきた。この距離の近さが、物理的なバリアを人の力で柔らかくしていく、という態勢に表れているように感じる。また、さまざまな組織・団体との連携も美術館だけにとどまらない、新潟市美術館らしさの一つであるように感じる。

(注8)

調査時に詳しく伺うことができなかったが、日本の障害者による芸術活動史において重要な医師・式場隆三郎に焦点を当てた新潟市美術館での展覧会「式場隆三郎 脳内反射鏡」にかかる図録等も参考資料にあげておく。

【調査概要】

実施日：2022年10月21日（金）

場所：新潟市美術館 館長室

【調査対象者】

前山裕司（まえやまゆうじ）

埼玉県立近代美術館を経て、2018年4月から新潟市美術館館長に就任。教育普及や障がい者アートの振興の企画を美術館内外で手掛けている。文化庁委託事業として「すごいぞ、これは！」（2015-16）、国立新美術館で開催した文化庁主催の「ここから1」（2016）から「ここから4」（2019）を企画・監修。障文祭新潟大会では「つくる いきる はじける」（2019）を企画している。令和2年度文化庁長官表彰受賞。

荒井直美（あらいなおみ）

1997年より新津市美術館（現・新潟市新津美術館）に勤務、2013年4月より現職。「ニイガタ・クリエーション 美術館は生きている」展（2014年）、「アナタにツナガル」展（2016年）などを担当。現代美術を中心とした展覧会のほか、普及プログラムの運営にも関わる。

【参考資料】（注8）

新潟市美術館,2015,『アナタにツナガル展』.
新潟市美術館,2021,『式場隆三郎 脳内反射鏡』.

前山裕司,2022,「近づきやすいですか、美術館」『WAVE』vol.33,新潟市美術館.

藤井素彦,2022,「『式場隆三郎 [脳内反射鏡展図録]』全国カタログ展文部大臣賞受賞」『WAVE』vol.33,新潟市美術館.

小林一吉,2021,「[覚書] 芸術における「医学モデル」と「社会モデル」への視点 - ゴッホ、民芸、障がい者アート」『新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要』第7号,新潟市美術館.
社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県障害者芸術活動支援センター集,2021,『令和2年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書 art center 2020 report みんなでつくる埼玉方式』.

世田谷 美術館

文：中西美穂

紅葉する樹々の葉の明るさの中、人々が思い思いに過ごす砧公園に世田谷美術館があった。世田谷美術館の普及担当学芸員の東谷千恵子（以降、東谷さん）に、お話をうかがった。

1. ある日の世田谷美術館と地下創作室

2022年11月12日土曜日の世田谷美術館、この日、2階の展示室では展覧会「新井良二のオールぶると！こんなに楽しい世田谷美術館の収蔵品」（2022年8月6日～11月20日）が開催され、絵本作家の手描きの作品紹介付き29点を含む全89点の絵画や彫刻、インスタレーションが展示されていた。併設の区民ギャラリーでは「令和4年度世田谷障害者施設アート展」（2022年11月8日～13日）が開催され79点の作品を無料鑑賞することができた。1階の展示室では日本のプロダクトデザインのパイオニアの一人の足跡を紹介する企画展「使えるもの、美しいもの 宮城壮太郎展」（2022年9月17日～11月13日）が開催。入場チケットを販売する職員は、購入者にカラーコピーのチラシ「宮城壮太郎展 100円ワークショップ だれかをよろこばせるプロジェクト」を渡し「100円ワークショップで缶バッチをつくってくださいね！」と声をかけていた。そのチラシには「場所：世田谷美術館地下創作室」とあった。地下創作室とは、東谷さんが担当する、教育普及の活動の拠

点である。地下エリアを使って、さまざまな活動が行われているとのことだった。

2. 「美術大学」とボランティア

地下エリアには地下創作室や創作の広場がある。ボランティア活動発足のきっかけは講座「美術大学」である。開館翌年の1987年以来、コロナ禍で一時休止した以外は、今日まで毎年開講している市民講座である。内容は「講義」「実技」「鑑賞」の3つの方向から広く総合的に取り組み、講師は大学教授やアーティスト、評論家など美術の分野に限らず幅広いジャンルから招き、館学芸員も活動や研究を紹介する。対象は区民60名、開催期間は毎年5月から12月までの火曜日木曜日の週2回、時間は午前10時半から夕方4時半まで。区民対象だからと手加減することなく、講師は真剣に美術に取り組むものとして受講者を熱心に指導する。受講者たちは、世田谷美術館を「うちの美術館」と呼び、修了後は同窓生ようになる。

同館講座「美術大学」を修了した〈卒業生〉たちは、何十ものサークルを自主的に作り、常に、何かしらの活動を地下でしているという。東谷さんたち普及担当では、それらの活動支援も仕事の一つである。

ボランティアは同館講座「美術大学」の〈卒業生〉でも、〈卒業生〉でなくともなれる。ボランティアの年齢幅は広く60～70代中心だが、20～30代も混じっている。

ボランティア・鑑賞リーダーの活動の中心は「鑑賞教室」である。登録者は約450名、年間活動日数は300日、毎年延べ3000名

の方が活動し、年間5000名にのぼる子どもたちの団体来館時や、夏休み期間中の美術館に常駐している。[世田谷美術館：2017]

世田谷区の小学校全61校の4年生約5000～6000人の子どもたちの全員は、授業の一環として美術館に来る。約5～8人の児童に対して一人の鑑賞リーダーが付き添う。一日に100～200人の子ども達が来るときには、20～30人の鑑賞リーダーが必要になる。美術館から、呼びかけると多い時には一日60人の鑑賞リーダーが来てくれることもある。

鑑賞リーダーへの教育指導を、美術館としてはしていない。むしろ美術館ボランティアに教育指導をするべきではないと東谷さんは考えている。なぜならば、ボランティア活動は、美術館主導ではなく市民主導だからである。美術館にとって都合がいい人をあつめているわけではない。美術館はボランティアたちにとって都合のいい場所になっていくべきだろう、とのことであった。

ボランティアと美術館の関係を示す1例に、ボランティアたちが主導するフリーマーケットがある。10月のある日曜日に美術館エントランスで開催され、美術館と関係ない日用品や古着なども販売された。そして、売り上げ約8万円全額をボランティアが美術館に寄付したという。

3. 居場所としての美術館

東谷さんは、ボランティア活動に参加している人たちと話す中で、「美術が好きなたちは個性的な方たちが多く、いわゆる、

住所 東京都世田谷区砧公園 1-2
〒157-0075
電話 03-3415-6011
ファックス 03-3415-6413
URL <https://www.setagayaartmuseum.or.jp/>

通常のコミュニティの中で、なかなか居心地が悪い思いをされている方が少なくないようだ。日常をそれなりに上手く過ごしてはいるが、自分自身を表現できなかつたり、どこか無理をしてたり、人付き合いも苦手だったり。そういう方たちが「(同館講座の)美術大学」に来て、はじめて本当に深呼吸が出来た、いいことが言えたようだ」と、気づかされたという。

美術館は、そういった地域の様々な方たちの集まれる場所の一つになりえるだろう。だからこそ、今回のような「公立美術館における障害者等の」と、人と美術館の在り方を一面的に捉えているように思える調査に、東谷さんは戸惑いを隠せないという。例えば、世田谷美術館では、車椅子ユーザーが、鑑賞リーダーとして、子ども達の案内をすることもあるが、それが特別なことではないと考えてきた。

4. 目の見えない人、耳の聞こえない人との実践

一方で、世田谷美術館では、展覧会やワークショップ、講演会において、障害がある方との接点を持ってきた実績がある。

東谷さんが館に勤務して1、2年たったころ、『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』[川内有緒,2021]の主人公として知られている白鳥さんから、世田谷美術館に「目が見えないんですけど、美術館に案内していただけますか」と、電話がかかってきたという。白鳥さんは当時、今ほど有名ではなく、自身で各美術館に電話をかけまくっ

ていた時期であった。東谷さんは電話を受け、同館のムンク展(1997年4月5日～6月8日)を案内した。全く見えない方に展覧会を案内したのは、東谷さんにとって初めての経験だった。白鳥さんを案内することで、自分の目が開けたように感じ、大変感激したという。それ以降、コロナ禍の前年まで定期的に白鳥さんと、観賞ワークショップを行ってきた。目の不自由な方を対象とするのではなく、目が見える方たちが、もっと目を開くためのワークショップのナビゲーターとして白鳥さんを迎えていた。

また、エイブル・アート・ジャパンの企画で、耳の聞こえない方を対象とした、検証に近いような実験に協力したこともある。

そして世田谷美術館の企画展に関連する講演会には必ず手話通訳を入れている。館スタッフは、目の見えない方の来館より、耳の聞こえない方の来館の方がきづきにくい。「いったい、どれくらいの方たちが、美術館に来て。聞こえないことで、実はおこまりになっているのか、調査があっても良いだろう」とのことであった。

5. つながりととまどいと

美術館では美術のみならず、ダンスのプログラムも開催されており、ジャンルを超えた取り組みや、つながりがある。また全国美術館会議の教育普及ワークショップには、東谷さんではなく、同館の別の普及担当学芸員が参加している。そして、当館のボランティア経験者が、各地の美術館の学芸員になったり、美術関係の仕事についた

り、アートに関わる大学教員になってもいる。東谷さん自身が外にネットワークを広げているわけではないが、結果的に世田谷美術館は教育普及の活動を通して、館外の美術関係者や機関とのつながりを育んでる。

一方で、東谷さんは、美術館に来られない方に、どのようにつながっていけばよいのだろうかという課題があると感じている。それには海外の事例や方法をそのまま使うのではなく「地域の中で、それをその人たちが、自分の問題だと感じてもらえるような巻き込み方を、どうしたら実践できるのか」という視点から、考えなければならないとのことであった。コロナ禍ではオンラインプログラムを通して、不登校の子どもたちの存在にきづかされた。どのような方法が良いのか今はわからないが、例えば、全小中学校や幼稚園において、美術館の教育普及プログラムが必修となり、そのために「美術館から行く」といった取り組みがあってもよいだろうとのことであった。

6. 【追記】世田谷美術館の障害者等の芸術活動に関わる展覧会の一側面

東谷さんのお話の中で、世田谷美術館における障害者等の芸術活動に関わりがある展覧会についても教えていただいた。ここでは調査者の視点で、その主な3つの展覧会、1986年の開館記念展「美術と素朴」、1993年の展覧会「20世紀美術とアウトサイダー・アート パラレル・ビジョン」、2003年の「KALEIDO SCOPE 6人の個性と表現」展の概要を追記しておく。

①開館記念展「芸術と素朴」展

開館記念展「芸術と素朴」展は1986年3月30日から6月15日に、世田谷美術館にて開催された。同展は4部構成であり、全館全てを会場としたようだ。同館のホームページにある「芸術と素朴」展の展示内容を以下に転記する。

I 素朴派の系譜〈企画展示室〉

- a. アンリ・ルソーとフランスの素朴派
アンリ・ルソー、アンドレ・ボーシャン、カミーユ・ボンボワ、セラフィヌ・ルイ、ルイ・ヴィヴァンほか
- b. 西欧におけるナイーフの発見と継承
スイス、イタリア、西ドイツ、オランダ、イギリスの素朴画家
- c. アメリカのプリミティブ絵画
19 - 20世紀の素朴およびブラック・フォークアート

II 近代・現代美術と素朴〈企画展示室〉

- 1) 近代美術
ゴーギャン、ピカソ、クレー、ミロ、シャガール、ほか
- 2) 現代美術
ホックニー、クレメンテ、バリー・フラナガン、ほか
- 3) 日本の素朴
谷内六郎、土方久功、川上澄生、清水登之、棟方志功、横尾忠則 ほか

III 原始美術と民族美術〈区民ギャラリー〉

- a. 原始美術
 - 1) 日本(縄文、弥生、古墳時代)
 - 2) プレ・コロンビア
 - 3) オリエント
- b. 民族美術

- 1) アフリカ
- 2) オセアニア
- 3) アメリカ大陸（インディアン、エスキモー、黒人等）
- 4) アジア

IV 子供と美術（知恵おくれの人たちを含む）
〈創作室 A、B、C、D、創作広場〉

- 1) 無心から生まれるもの
- 2) ものとの出あい
- 3) 素朴な目・自由な表現
- 4) 素朴のエネルギー

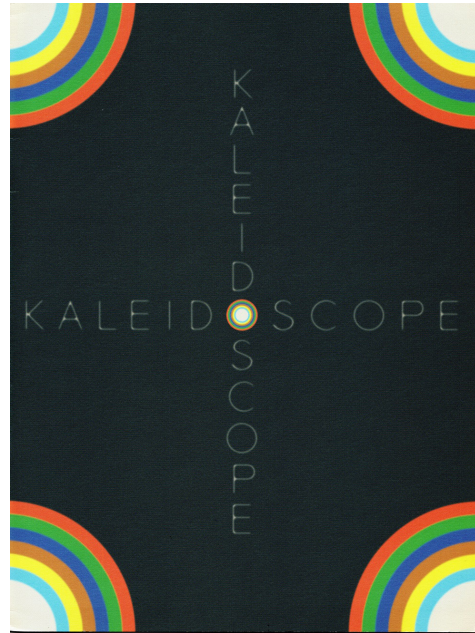
（世田谷美術館ホームページより）（注9-1）

上記の展示内容から「芸術と素朴」展の「IV 子供と美術（知恵おくれの人たちを含む）」において、障害がある子どもや人達の作品を、現在ボランティアが拠点とする美術館地下に展示したようだ。

② 20 世紀美術とアウトサイダー・アート パラレル・ビジョン

展覧会「20 世紀美術とアウトサイダー・アート パラレル・ビジョン」は、1993 年 9 月 30 日から 12 月 12 日まで行われた。また同館で同時期に「日本のアウトサイダー・アート」展も開催された。

前者は、ロサンジェルス・カウンティ・ミュージアムで企画された、欧米在住を中心とし物故者の含む「40 名のプロの画家・彫刻家と 34 名のアウトサイダー」[タックマン：1992,1993：11] の作品を紹介した。その後、マドリードのレイナ・ソフィア国立美術館、バーゼル・クンスト・ハレ、そして欧米以外で唯一、世田谷美術館に巡回



【図9】 KALEIDO SCOPE 6人の個性と表現」展（2003年）
カタログ表紙

した。後者は「日本における精神障害者や知的障害者、霊能力に優れた幻視者の造形作品を概観」し「日本にアウトサイダー・アートがあるとして、「パラレル・ビジョン」の「内部／外部」の物語は同様に見出し得るであろうか」[塩田純一：1993:7] との問題意識のもとに、草間彌生、古賀春江、坂上チユキに加えて、知的障害者の成人施設みずのき寮（注9-2）の小笹逸男、福村惣太夫、吉川敏明、さらに式場隆三郎に見いだされた山下清、渡辺金蔵の作品が展示された。また同展カタログには宗教者・出口なおの「お筆先」も紹介された。

③ 「KALEIDO SCOPE 6人の個性と表現」展

2003 年 7 月 26 日から 9 月 28 日まで開催された、日本在住の 6 名の障害を持っているアーティスト、川村紀子、斎藤勝利、清水慶武、中野昌司、東美奈子、光島貴之の平面作品を紹介する企画展である。

同館学芸員の高橋直裕は、同展カタログに、「芸術と素朴」展の「IV 子供と美術（知恵おくれの人たちを含む）」を担当したこと、その際の戸惑い、向き合った姿勢について具体的に記している。

まず、日本国内の美術館のこれまでの展覧会記録を紐解いてみたのですが、企画性のある展覧会で障害者美術を取り上げた例を見付けだすことはできませんでした。こうして手掛かりを求めて悶々としている時、ふとしたきっかけで出会ったのが『土に咲く』という写真集だったのです。（この写真集によって京都市立美術館で障害者美術の展示が何度か行われていたことを初めて知りました）。この写真集がその後の私の行動を決定づけました。「よし、とにかく一度訪問して作品を見せてもらおう・・・」。これが障害がある人たちの美術との最初の出会いです。[高橋直裕：2003:16]

同テキストによると、高橋はエイブル・アート・ジャパン（1998 年日本障害者芸術文化協会として発足）のアワード選考も担当したとある。さらに、それらの経験も踏まえ、障害者美術といわれるものが一つのジャンルとなることへの危惧があると記している。そして「障害があるなしにかかわらず、表現者は表現者として平等に活躍し

評価される社会や表現形式をつくっていく、それも美術館がはたす仕事だ」とし、それは「人間にとって美術とは何か」といった芸術の根源的な問題とつながり、結果「芸術と素朴」は永遠のテーマだと結んでいる。

【感想】

世田谷美術館のアウトサイダー・アートに関する展覧会や、アール・ブリュットのコレクションについて、日本の障害者美術に関する書籍で何度も見かけたことがあった。今回の訪問調査で、同館の「地下」に展開する市民主体の活動を知ることができた。公立美術館を対象とした本調査において、障害者等の芸術活動と、市民の主体性は、不可分の領域であると感じていたので、世田谷の展覧会と地下活動の二面性を知り、非常に興味深く思えた。

(注 9-1)

世田谷美術館ホームページ：

<https://www.setagayaartmuseum.or.jp>

最終閲覧日 2023 年 2 月 19 日

(注 9-2)

現在の「みずのき（障害者支援施設）」のこと。

記載は同展カタログ (p.13) そのままとした。

【調査概要】

実施日：2022 年 11 月 12 日（土）

場所：世田谷美術館 地下創作室

【調査対象者】

東谷千恵子（あずまやちえこ）

世田谷美術館学芸部普及担当マネージャー 学芸員・ボランティア担当。1995 年に同館に教育普及担当として入職。

【参考資料】

芸術新潮編集部,1986,『芸術新潮』1986 年 3 月,通巻 435 号,新潮社

塩田純一・長谷川祐子・遠藤望 編 1993,『パラレル・ヴィジョンー 20 世紀美術とアウトサイダー・アート 日本のアウトサイダー・アート』世田谷美術館

世田谷美術館,1986,『芸術と素朴』

世田谷美術館,2003,『「KALEIDOSCOPE- 6 人の個性と表現」展』

世田谷美術館,2006,『ワークショップ“誰もいない美術館で”の記録「アートとボクらが踊る時」』

世田谷美術館,2017,『世田谷美術館ボランティア・鑑賞リーダー活動記録誌 2〈100 円ワークショップ〉2004 年 2017 年』

世田谷美術館,2020,『明日の美術館をひらくために-「作品のない展示室」をめぐる記録』

Los Angeles County Museum,1992,Parallel Visions Modern Artists and Outsider Art, (= 世田谷美術館,1993,『パラレル・ビジョン-20 世紀美術とアウトサイダーアート』淡交社)

東京都 美術館

文：中西美穂

恩賜上野動物園、東京国立博物館、東京藝術大学、東京文化会館などのミュージアムが集積する上野公園の一角に東京都美術館はある。同館より『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』（2018年、青幻舎）が出版され、その活動は、日本中の美術関係者から注目されている。本調査では、同館のアート・コミュニケーション事業を統括する係長である熊谷香寿美学芸員（以降、熊谷さん）に、お話をうかがった。

1. アート・コミュニケーション事業

東京都美術館は2012年リニューアルオープンの際、「都民のための美術の振興を図る」という東京都美術館の設置目的を果たし、東京都が定めた基本的な使命を達成するために、基本方針を定めた。

・東京都美術館の使命（ミッション）

東京都美術館は、展覧会を鑑賞する、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある方が何のためらいもなく来館できる、すべての人に開かれた「アートへの入口」となることを目指します。

新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」と出会う場とします。そして、人びとの「心のゆたかさの拠り所」

となることを目指して活動していきます。

このように使命には「障害のある方が何のためらいもなく来館できる」との一文が入っている。

基本方針に基づく4つの役割は以下の通りである。

1. 世界と日本の名品に出会える美術館
2. 伝統を重視し、新しい息吹との融合を促す美術館
3. 人々の交流の場となり、新しい価値観を生み出す美術館
4. 芸術活動を活性化させ、鑑賞の体験を深める美術館

この役割を具現化する4つの柱がある。

- ・特別展や企画展など、見る喜び、知る楽しさを提供する「展覧会事業」
- ・公募団体やグループと連携し、つくる喜びを共有する「公募展事業」
- ・アート・コミュニティ形成による新たな可能性を探求する「アート・コミュニケーション事業」
- ・アトラウンジや美術情報室、ミュージアムショップ、レストラン等、訪れる楽しさを充実させる「アメニティ事業」

上記の柱の一つとして「アート・コミュニティ形成による新たな可能性を探求する「アート・コミュニケーション事業」が新設された。

アート・コミュニケーション事業には3つのプロジェクトがある。一つは、アート

を介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト「東京都美術館×東京藝術大学 とびらプロジェクト」、二つめは公園内の文化施設9館が連携し子どもたちのミュージアムデビューを応援するラーニングデザインプロジェクト「Museum Start あいうえの」、そして三つめはシニア世代を対象とした「Creative Ageing ずっとび（エイジフレンドリー&ダイバーシティ事業）」である。

各事業担当者3名と全体を統括する熊谷さんの合計4名が、アート・コミュニケーション系の常勤職員となる。

「アート・コミュニケーション事業」の取り組みを「障害のある方という切り口で考えると、さまざまな場面で障害のある方と関わる機会がある」という。例えば「とびらプロジェクト」の活動主体となる「とびラー」は、公募時に性別や障害の有無は問わない結果、全体数として少ないが、ろうや難聴、ALSなどの障害がある方も登録し活動している。また、子どもを対象とする「Museum Start あいうえの」には、多様な背景の子ども達の参加がある。そこにはダイバーシティプログラムとして、台東区人権・多様性推進課と連携し「やさしい日本語」として日本語を母語にしない子ども達を対象とした取り組みや、「ミュージアムトリップ」として経済的困難を抱える家庭などを支援するNPO等と連携して子ども達を迎える取り組みもある。そして、「Creative Ageing ずっとび」では台東区の社会福祉協議会等と連携した認知症の方をはじめとする高齢者とその家族を対象にした鑑賞プログラムの実践などを行っている。

住所 東京都台東区上野公園 8-36
〒110-0007
電話 03-3823-6921（代表）
ファックス 03-3823-6920
URL <http://www.tobikan.jp>

2. 「とびらプロジェクト」のアクセス実践講座

「とびらプロジェクト」の講座の一つに「アクセス実践講座」がある。目標に「具体的な社会課題に関わる状況・活動を知ることにより、美術館にアクセスすることが難しい人が、来館し、利用するために必要な支

援を考え企画する力を身に着ける」とあり、大学教員、研究者、NPO ワーカー、医療者、行政職員などが講師になる。とびラーが対象となる。

2022 年度のスケジュールを教えていただいた。【表 4】

【表 4】 2022 年度「とびらプロジェクト」アクセス実践講座 スケジュール
(実際のスケジュールをもとに、中西美穂が 2022 年に抜粋して作成)

		日時・会場	内容
具体的な社会課題に関わる・状況・活動を知る	★	5/30 (月) 東京都美術館展示室	障害のある方のための特別鑑賞会 「スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち」展
	1	7/17 (日) 東京藝術大学講義室	「アクセス実践講座とは」 ＜障害＞ 「障害とはなにか、差別とはなにか (仮)」 ＜こどもたちの貧困＞ 「経済格差と子どもたちの文化的状況 (仮)」
	2	7/30 (土) 東京藝術大学講義室	＜社会的処方＞ 「社会的孤立への処方～つながりを作るリンクワーカーの取り組み (仮)」
	★	8/8 (月) 東京都美術館展示室	障害のある方のための特別鑑賞会 「ボストン美術館展 芸術×力」
	3	9/3 (土) オンライン	＜クリエイティブ・エイジング＞ 「認知症についての理解を深めよう (仮)」 文化的処方の取り組み、ミュージアムと社会的処方、認知症サポーター養成講座
	4	9/25 (日) 東京藝術大学講義室	＜多文化共生＞

		日時・会場	内容
美術館に行くことが難しい人が来館し、利用するために必要な支援を考える力を身に着ける。	5	10/30 (日) オンライン	＜ワークショップメイキング①＞ 「ミュージアムでのワークショップとは？」
	6	11/20 (日) 東京藝術大学講義室	＜ワークショップメイキング②＞ 「企画をたてる」
	★	11/28 (月) 東京都美術館展示室	障害のある方のための特別鑑賞会 「展覧会 岡本太郎」
	7	2023/1/8 (日) 東京藝術大学講義室	「1 年間のふりかえり」
	★	2023/ 3/13 (月) 東京都美術館展示室	障害のある方のための特別鑑賞会 「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」
★実践の場			

講座内容は毎年改定し、より実践に適した講師を招くようリサーチもしている。「とびらプロジェクトの特徴は、座学で知識を学ぶだけで終わらないこと」とのこと。知識と実践・体験の場を組み合わせることで、学びをサイクルさせ、深めていく設計となっている。

とびラーはどのような反応をするのだろうか。例えば、このアクセス実践講座で、多文化の現場や、障害者差別解消法について知ったという人もいる。このような知識は美術館ではない場所で行われている生涯学習や社会人講座でも知ることはできる。しかし「とびらプロジェクトの講座の中で知る」ことは、その人が新しい知識を得るとともに、美術館での実践につなげていくためともなる。アクセス実践講座を通して、

美術館に行くことが難しい人の来館や利用を、よりポジティブに捉えることができる状況が生まれるとのことだ。

この講座との直接の関わりはないが、館は「文化庁委託調査 令和元年度『生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究』社会教育施設において障害者等が学習活動に参加する際に行う合理的配慮に関する調査」(令和 2 年 4 月、イノベーション・デザイン&テクノロジー株式会社)のアンケートとヒアリング調査に協力している。同報告書には、同館の課題の一つに「社会包摂に関する関係者の理解」が上げられ、美術館側の管理職も含めた職員らの研修の提案がなされている。

3. 障害のある方のための特別鑑賞会

前述の「アクセス実践講座」のスケジュールに★印があった「障害のある方のための特別鑑賞会」について、少し詳しく見ていく。

「障害のある方のための特別鑑賞会」は、国内外の美術作品を紹介する先進的な展覧会である特別展の開催ごとに1回、休室日の月曜日に実施されている。1999年よりはじまり、対象は障害者手帳等をお持ちの方とその介助者である。

コロナ前の定員は一日700名とその介助者1名としていたが、現在は一日400名とその介助者1名となっており、コロナ対応として人数を減らした実施となっている。1時間ごとに50名、8時間で400名。その場づくり「とびラー」や任期満了したアート・コミュニケータが関わっている。視覚に障害がある方からの希望があった場合には、お話ししながら展示室を案内することもある。

コロナ禍では、展示室では従来のように積極的に言葉を交わしづらくなった。そこで、アート・コミュニケーション係からとびラーたちに向けておもてなしの気持ちを伝えるツールを一緒につくることを提案した。それを受けて、とびラーたちから「お手製の消しゴムハンコを押したオリジナルシール」や「オリジナル音声コンテンツ」といった企画が提案された。それらをまとめて「ウェルカムキット」として当日参加者に配布したとのこと。詳しくは、熊谷さんが東京都美術館ニュース No.465 に書いた「アート・コミュニケータと一緒に作るおもてなしの日『障害のある方のための

特別鑑賞会』コロナ禍でおもてなしの気持ちを伝え、ゆるやかなつながりを作るには？」に紹介されている。

お手製の消しゴムハンコは、とびラー自身が、特別展にあわせた図柄を考え、オリジナルで創作している。

4. 認知症の方や高齢者を対象にしたプログラム

さまざまな取り組みをしてきた東京都美術館のアート・コミュニケーション事業が昨年2021年度より新たに取り組んでいるのが「Creative Ageing ずっとび」である。対象は高齢者。前述の「アクセス実践講座」には2年前から、「クリエイティブ・エイジング」というテーマを設け、2022年度には、認知症に対する理解を深めるため「認知症サポーター養成講座」も行った。

企画立ち上げにあたり、海外事例も参照する中で、高齢者を対象とする企画には、地域で実際に当事者の支援をしている人たちとのつながりが重要であることに気づかされたという。したがって、まず館の所在地である台東区の社会福祉協議会と連携し「美術館と福祉・医療がつながることでどんな可能性が生まれるのか」について、話し合うネットワークをつくった。その中で、「認知症の方を対象にしたプログラムの構想」や「地域における医療と美術館の連携の可能性」について協議する研究会も立ち上げた。2021年度からは、東京藝術大学が中心となって進める産学連携プロジェクト『共生社会』をつくるアート・コミュニケーショ

ン共創拠点』事業（注10）に参画し、「社会的処方の中でも文化芸術に特化しアートを介したコミュニケーションと社会参加を促す「文化的処方」の実装に向けて」、台東区での実践のモデル事業化にも取り組む。昨年度と今年度は、オンラインとリアルと2つの形式で、認知症の方やその家族を対象とした鑑賞会を行った。

とびラーの年齢幅は広く高齢者の方もいる。その方たちは、高齢者向けプログラムについて、どう感じているのか。高齢者プログラムの主な対象となる後期高齢者は親の世代であり、参加者に自分の親の姿を重ねる人も多いという。

また、「Museum Start あいうえの」と連動した「みる旅（高齢者と高校生の異世代交流プログラム）」も行っている。これは、とびラーと高校生と高齢者とが作品を介して対話を重ねるプログラムであり、高齢者の参加者の中には、プログラムをきっかけに「とびらプロジェクト」のを知り、とびラーに応募、選考を経てとびラーとして活動を始める人もいるという。

5. “障害者アート”展の実績をよむ

開館以来、長い歴史を持つ東京都美術館では、障害者アートの展覧会を実施した実績がある。令和3年度東京都美術館年報（ホームページ公開）の「2. これまでの実績」の「企画展示事業年次別一覧」にある、二つの障害者アートの展覧会「エイブル・アート'97 東京展 魂の対話」と「このアートの元気になる - エイブル・アート '99」の同

年及び前後年を【表5】に書き写した。

東京都美術館では、貸展示室を会場にした団体展やグループ展が数多く開催されているが、前述の2展は、企画展示事業の共催による特別展として実績が記されている。これは1993年に世田谷美術館において「パラレル・ヴィジョン 20世紀美術とアウトサイダー・アート」展と同時開催された「日本のアウトサイダー・アート」展につぐ、早い時期の公立美術館での障害者アートの展覧会であろう。

この実績から他の展覧会との日数や入場者数を比較できる。同年や、その前後に行われた展覧会と比較し、展覧会「エイブル・アート'97 東京展 魂の対話」「このアートの元気になる - エイブル・アート '99」は、展覧会日数が短く、また一日当たりの人数も一桁少ないことがわかる。

ただ、来館者数は少なくとも、これらの展覧会は「障害のある方のための特別鑑賞会」の実施のきっかけになったという点で大きな意味がある。当時、こうした障害者アートの展覧会が開催されていることや、常に混雑している東京都美術館の展示室の鑑賞環境に鑑み、障害のある方がゆったりと展覧会を楽しむ機会を作りたいという思いから、1999年「大英博物館 古代エジプト」で初めて「障害のある方の特別鑑賞会」を実施、2000年以降の継続的な開催につながったという。なお、2007年度までは上記の展覧会の主催者であるエイブル・アート・ジャパンの協力も得て実施していったとのことである。

【表5】東京都美術館 企画展示事業年次別一覧（平成8年～平成11年）
 （太字下線は調査者による、令和3年度東京都美術館年報をもとに中西美穂作成 2022年）

	展覧会名	開催日数	入場者数（）は一日あたりの人数
平成8（1996）	シルクロード大美術展	68	282,346（4,152）
	大英博物館 アッシリア大文明展 －芸術と帝国－	61	167,249（2,742）
	砂漠の美術館－永遠なる敦煌－	49	167,522（3,419）
	毛利元就－その時代と至宝－	44	144,300（3,280）
平成9（1997）	18世紀フランス絵画のきらめき ルーブル美術館展	75	528,620（7,048）
	エイブル・アート'97・東京展 魂の対話	12	8,801（733）
	京の雅・和歌のこころ 冷泉家の至宝展	38	278,486（7,329）
	アンコールワットとクメール美術 1000年展	44	250,334（5,689）
	英国絵画の殿堂 テート・ギャラリー展	57	410,616（7,204）
平成10（1998）	古代ヨーロッパの至宝－ケルト美術展	74	183,211（2,476）
	カルメン・コレクション展	50	117,689（2,354）
	唐の女帝・則天武后とその時代展	50	156,418（3,128）
	このアートで元気になる－ エイブル・アート'99	31	17,762（573）
平成11（1999）	ワシントン・ナショナル・ギャラリー展	74	412,794（5,578）
	大英博物館 古代エジプト展	50	443,474（8,869）
	西遊記のシルクロード 三蔵法師の道	50	139,563（2,791）
	モナ・リザ 100の微笑 模写から創造へ	50	109,241（2,185）

6. ひろがり

東京都美術館のアート・コミュニケーション事業の、「とびらプロジェクト」では東京藝術大学と協働、「Museum Start あいうえの」では立ち上げから上野公園の複数の文化施設と連携するなど、他機関との連携がある。また、「Museum Start あいうえの」では、学校側の申込に応じて多摩地区からの来館受入も行っている。

また、「とびらプロジェクト」を任期満了したアート・コミュニケーターたちが、NPOを立ち上げるなどして、府中市美術館や森美術館、東京都庭園美術館等での鑑賞プログラム等も実現もしている。ただ、こうした人材が育っていくことは結果であり、「とびらプロジェクト」はあくまで「アートを介したコミュニティ形成」が目的であるとのことである。

熊谷さんは、まだ美術館に来ることができていない方々がいる、そのような方々へどのようにアクセスしていくのか、そうした方々との回路を作っていく実践を続けていくことが必要だという。一方で、東京都美術館のアート・コミュニケーション事業に関わった経験をもとに、東京都を始め、全国各地でアート・コミュニケーターによるさまざまな実践が発生しはじめている。ここでは「とびらプロジェクト」の知見が生かされることとなるだろう。

【感想】

市民や大学、他のミュージアムや、行政、NPOなどと連携しながらも、美術館という軸がぶれない、だからこそ生まれるダイナズムがあると感じた。また、過去の展覧会実績として障害者等の芸術活動に関わる展覧会の鑑賞者数も明示されており興味深かった。なお、今回は調査者の準備不足により詳しく伺うことはできなかったが、企画展示事業において障害者等の芸術活動に関わる作品をとりあげた展覧会「楽園としての芸術」展（2014年）及び「Walls & Briges 壁は橋になる」（2021年）があった。今後の調査の課題としたい。

(注 10)

国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) が公募する、大学等が中心となって未来のありたい社会像を策定し、その実現に向けた研究開発を推進する産学官共創拠点の形成を目指す産学連携プログラム「共創の場形成支援プログラム」として実施

<https://www.jst.go.jp/pf/platform/outline.html>

最終閲覧日 2023 年 2 月 19 日

【調査概要】

実施日：2022 年 11 月 13 日 (日)

場所：東京都美術館 交流棟 2 階
プロジェクトルーム

【調査対象者】

熊谷香寿美 (くまがいかずみ)

東京都美術館アート・コミュニケーション係長、学芸員。広告代理店勤務時に、森美術館のガイドトークボランティアを経験したことがきっかけとなり「社会とアート」の関係を大学院で学び直す。2012 年の東京都美術館リニューアルオープンより、アート・コミュニケーション事業に関わる。2013 年に正職員採用、2022 年 4 月より現職。

【参考資料】

稲庭彩和子・伊藤達矢,2018『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』青幻舎。

稲庭彩和子・伊藤達矢・河野佑美・鈴木智香子・渡邊佑子,2022『こどもと大人のためのミュージアム思考』左右社。

イノベーション・デザイン&テクノロジーズ株式会社,2021『文部科学省委託調査 令和元年度「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」社会教育施設において障害者が学習活動に参加する際に行う合理的配慮に関する調査報告書』。

東京都美術館,2020『東京都美術館ニュース』No.465。

東京都美術館,2022『令和 3 年度東京都美術館年報』。

金沢 21世紀 美術館

文：中西美穂

金沢城や兼六園の樹々の緑とつながる金沢 21 世紀美術館は、現代アートのコミッションワークが複数あるガラス張りの円形の建物、入り口が沢山ある。元・同館副館長で現在はアーツカウンシル金沢統括ディレクターの黒澤伸（以降、黒澤さん）と、同館の学芸部交流課エドゥケーター吉備久美子（以降、吉備さん）にお話をうかがった。

1. ミュージアム・クルーズを通じた多様な子どもたちとの出会い

現在の金沢 21 世紀美術館の体制は、正規職員数は総務、学芸、交流、広報の四課をあわせて 37 名。うち、学芸部は、交流課と学芸課あわせて 15 名。そこに非常勤職員が 5 名、合計 20 人体制である。

金沢 21 世紀美術館は 4 つのミッションステートメントを持っている。

1. 世界の「現在（いま）」とともに生きる美術館

金沢 21 世紀美術館は、世界の同時代の美術表現に市民とともに立ち会う美術館です。私たちのこの時代には、時間や空間を超え、従来のジャンルを横断する、様々な表現が現れてきています。これらの芸術活動にじかに触れ、体感することで、地域から、未来の創造への橋渡しをします。

2. まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館

21 世紀の美術館には、教育、創造、エンターテインメント、コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割が期待されています。市民や産業界など様々な組織と連携を図り、全く新しい美術館活動を展開します。

3. 地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館

藩政期から伝わる、工芸をはじめとする地域の固有文化が、多様化する 21 世紀にどのような可能性を持つのか、インターカルチャルな視点に立って問いかける実験の場となります。

4. 子どもたちとともに、成長する美術館

未来の文化を創り出す子どもたちにかかれた教室として、見て、触れて、体験できる最適の環境を提供します。子どもの成長とともに美術館も進化し、時代を超えて成長します。

この 4 番目の「子どもたちとともに、成長する美術館」を具現化してきたプログラムの代表的な取り組みに「ミュージアム・クルーズ」がある。2004 年の開館記念展に金沢市内の小中学生約 4 万人を学校ごとに招待した対話型鑑賞プログラム「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」が発端である。「市内の小中学校」には、養護学校（現在の特別支援学校）も含まれる。2006 年からは市内の全ての小学 4 年生を対象にしている。

その中で、盲学校からは「作品に触れら

れないならば子どもの現状に合わない」との理由で、参加を取りやめる時期があった。どうやったら、全ての子ども達が美術館に来ることができるのだろうか？と、学校や教育委員会と対話を重ねた。

ろう学校からは「手話通訳者をつけてくれたら行きやすい」との要望があった。そこで「手話通訳」に来てもらい、ろう学校の児童を美術館に迎えた。このように条件を満たせば、美術館に来てもらえることがわかった。そこで一般対象の「手話通訳付きギャラリー・トーク」も開催した。しかし、始めた当初は、当事者に開催情報が十分に届かず、参加者が集まらないこともあった。転機となったのは 2018 年の文化芸術基本法の改正を機に吉備さんが企画した、館の全職員を対象とする「聴覚障害者のコミュニケーションについて学ぼう」という勉強会である。手話は「聞こえる人に学ぶんじゃない、聞こえない人から直接」学んだと、吉備さんは改めてその当事者性に気づかされた。研修を受けた職員側からも、非常時に聞こえない人へ対応もできるように「消防訓練を変えなきゃいけないんじゃないのか」などの意見が上がり、館全体での聴覚障害への理解が深まった。その後、吉備さんは、個人的に手話を学びはじめたという。そのような中、ろう学校のミュージアム・クルーズへの参加も年に一回、現在まで続いている。

2. ろう者が主体となるワークショップ

ある時、吉備さんはろう者の人が撮った映画があると教わった。周囲には、映画

住所 石川県金沢市広阪 1 丁目 2 番 1 号
〒 920-8509
電話 076-220-2800
ファックス 076-220-2806
URL <https://www.kanazawa21.jp/>

鑑賞プログラムに興味のある大学生のインターンがいたり、市内の手話サークルと要約筆記サークル（中途失聴の人は、手話でなく要約筆記を必要とすることが多い）などがある。何か「ごちゃまぜで、やってみよう」と思ったという。全国手話通訳者の集いの金沢開催に合わせて、石川県聴覚障害者協会の青年部と地域のクリエイターが手話で美術館を紹介する映像を制作し、ろうの方たちとの関わりは深まった。

美術館で交流する機会もあったからか、美術館広場などで行う公募プログラムに、ろう者のグループが、ワークショップ企画を応募してくれるようになった。

例えば、ろうの人による無音のワークショップは、身体の動きが大きく見て楽しく、参加者への対応に学ぶところも多い。運営面では「荷物はここに置いてください」と張り紙が一枚あればわかりやすいし、アンケートは2次元コードでの対応が容易く、受付でも参加者数のシールを貼り予約数を見える化するなど、聞こえる人も聞こえない人も、お互いに安心して参加できる工夫があった。また、ボールを投げるジェスチャーを美術館のガラス張りの会議室で行うことが、広場を通りかかる人も巻き込むような、透過性の高い建物の特徴を生かしたワークショップを生み出していった。最後に「ありがとう」、「またね」とシンプルな手話を紹介することで、参加者は手話に親しみを覚えることができたようだ。このように、ろうの方たちの主体的な関わりが美術館に生まれた。

これらの2004年から2019年までの取り組みは「悩みながら前へすすみ、関係を深

めていく、奮闘する舞台裏の記録」として冊子『みんなの美術館 みんなと美術館』にまとめられ、続編となる冊子『来館しやすさと楽しさを考える10のレッスン』には、チラシのデザインをわかりやすくする工夫も記されており、どちらも美術館のウェブサイトから誰でもダウンロードして読むことができる。

3. 「内藤礼 うつしあう創造」を手話でどう訳すか？

ミュージアム・クルーズのような鑑賞プログラムや公募事業以外において、障害がある方たちとの関わりはあるのだろうか。

同館は特別展とコレクション展を開催し、特別展においてはアーティストを交えたトークや、研究者などによるシンポジウムを行っている。

2020年6月27日から8月23日に開催した特別展「内藤礼 うつしあう創造」のアーティストトークを準備する中で、吉備さんは、手話に関わる興味深く豊かな状況を目撃したという。

アーティストトークは、同館のシアターで行われ、館長、担当キュレーターとアーティストが登壇した。そのトークに手話通訳をつけた。担当キュレーターは、毎回講演時に手話通訳をつける世田谷美術館で勤務経験があり、手話通訳の配置を身近に感じていたと言う。そして、そのトークへの申し込みがろう者からもあったため、その方たちが安心して参加してもらえる環境も整えようと、手話通訳者以外に過去の活動

で一緒にした青年部のろう者の方にもスタッフに入ってもらった。

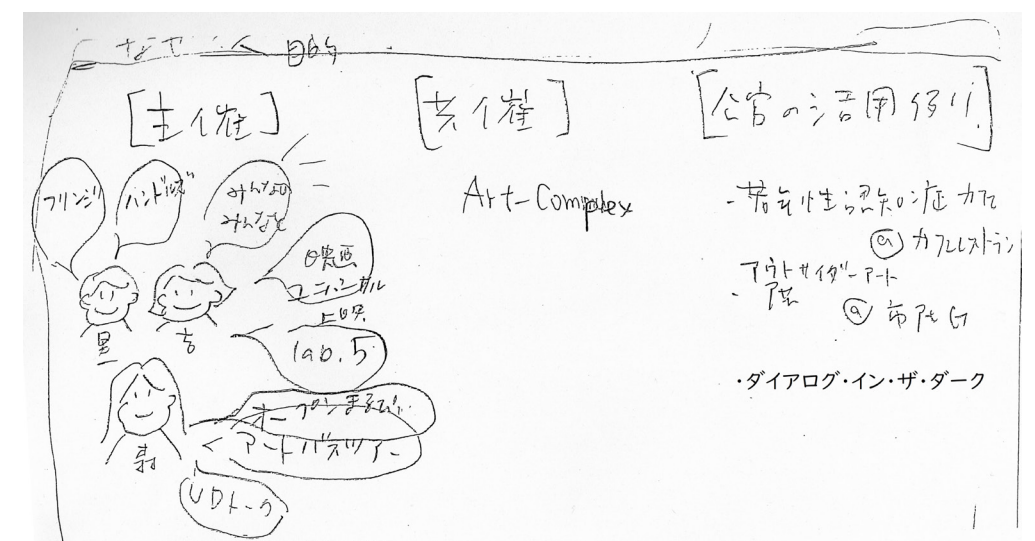
「すごく印象的だったのは、内藤礼の静謐な展示を見て、展覧会のタイトルにある『うつしあう創造』を手話でどう表現するかで、手話通訳者とろうの人たちが約1時間、ディスカッションした」ことだという。「それはすごく豊かで、ただ言葉を指文字で表すということではなくて、アーティストの展示の世界観を的確に表すための熱心な準備の一面面」であったという。手話通訳者にとって事前原稿が用意されていないフリートークの場で、内藤さんの感覚を伝えることは簡単ではない。「向かい合う」を手話で表す場合、両手のひらを離して合わせ、縦や横に、ななめなど、表し方は一つではない。展覧会タイトルにある「うつしあう」の場合はどうするのか。「創造」は「つくる」でありイマジネーションの「想像」ではないよう

だがイメージの世界も含まれるようだ、など、解釈に幅があるからだ。展示内容を意識しながら手話表現を生み出す時間が生まれた。

4. 体制とさまざまな取り組み

これらの活動に関わる交流課の仕事について、調査時に手描きの図を用意してもらった。交流課の3名が担当する主催事業の他、地域団体と美術館との共催事業や、一般の館の利活用があり、それぞれに「障害者等の芸術活動」に関りがあることがイメージできる。【図11-1】

交流課の3名は各々の担当事業があるが、それぞれが独立しているわけではない。吉備さんは手話を勉強してきたが、森さんはUDトークの導入などの文字化に取り組み、事業があれば協力する。事例としてサウンドアーティスト毛利悠子が《タブレットと



【図11-1】金沢21世紀美術館における障害者等の芸術活動との関りの一側面のイメージスケッチ。事業は2021年度以前の内容も含む（吉備久美子2022年作成）

マーブルの金沢うためぐり》という同館の所有するアートバスに乗り、ラジオ番組を聞きながら金沢市内を巡る参加型作品を制作した際には車内モニターを使いアクセシビリティ対応を行った。番組 DJ2 名の会話を手話通訳者 2 名が表した上、会話を字幕で表示する動画を制作、上映した。また、申込時に手話通訳者の同乗をリクエストすることもでき、市内を巡る際のアナウンスや参加者同士の会話を楽しむこともできる。参加者の中には美術館の他のボランティアも同乗していて、バスに乗り込んだ方に案内をしてくれるなどの広がりも見られた。

この図にある「フリンジ」はどのようなプログラムなのだろうか。「フリンジ」とは「周縁」の意味がある。調査者は何が中心であり周縁なのかが気になり質問した。黒澤さんによると、「いわゆるメインの展覧会企画ではないが、パフォーマンスアーツを含めたさまざまなジャンルにつながる企画で、美術館（内）だけでなく、文字どおり外部への展開するような周縁企画」とのこと。ホームレスのダンサーチーム「ソケリッサ」を招いてまちなかや美術館の庭にて踊ってもらう企画、がん患者と一緒につくるアートプログラムなどがあるという。

がん患者向けアートプログラム《Fun with Cancer Patients がん患者とがんトーク：金沢編》は、イギリスと米国を拠点とするがんサバイバーでパフォーマー・演出家・脚本家の肩書を持つアーティストのプライアン・ロベールによるがん患者との共同創作プロジェクトである。がん患者が、プログラムの送り手になるのが特徴だ。一般のお客さんを出迎え、自分たちのがんに

ついて知ってもらう。市内のがん患者をサポートグループとして迎え、1 年前よりワークショップや合宿を行った。開催年の 2017 年には、医療者ら様々な専門職とのミーティング、アーティストによる作品協力者へのプレゼンテーションやトレーニングを経て、同年 11 月 3 日～5 日に「がんトーク」が美術館で開催された。会場となった館内シアターは、色合いや照明などもポップな雰囲気空間とした。来場者には美術館来訪のついでに、内容を知らずに入る人もいた。20～30 分間、闘病歴を聞いたりするプログラムだが、話す中で、来訪者の方が「実は私も・・・(がん闘病、あるいは家族にがん患者がいる)」という展開もあった。

このように「フリンジ」は、いろいろ試せる仕組みとして機能していた。他にも、フリースクールとも連絡を取り合ったり、金沢市内で一番多い外国籍であるベトナム人の美術館との交流機会を考えたりと、まだ実現していない企画も含めて新しい取り組みへの姿勢がさまざまに、常にある。

5. カフェレストランを会場とした若年性認知症カフェ

美術館による主催や共催といった直接の関りが少ないが、一般の館の活用例も豊富である。障害者等の芸術活動に関わる活動としては、同館の開館前から地元でアウトサイダーアート展を開催してきた金沢アート工房（注 11-1）が、同館の貸施設である市民ギャラリーを活用し展覧会を定期開催している。また 2018 年にダイアログ・イン・

ザ・ダーク（注 11-2）も行われた。

コロナ禍以前まで、ミュージアム併設のカフェレストランで、看護師や若年性認知症の人、その家族のグループが「若年性認知症カフェ」を行っていた。正確には、市内の非営利グループがおおむね月に一回程度カフェレストランを予約してお茶を飲みながら交流し、館内散策なども行う自主企画である。レストランは美術館と同じ 10 時開店から昼食前までの時間帯の客の少ない時間帯に利用しているという。

金沢 21 世紀美術館で若年性認知症カフェのグループが集まる利点はなんだろうか。いくつか考えられるが、とくに印象深い 2 点を教えてもらった。1 点目は、予約が個人名でできるため「〇〇様 15 名」となり、「若年性認知症と家族に寄り添う会様」と表示されない、個人の状況に社会的なレッテルを貼られることがないということ。もう 1 点は、入り口がいくつもあるなどの建物の特性で来場者の多くが半ば迷うようにうろろしているため、認知症の方の徘徊（注 11-3）が特別視されないということだという。

この若年性認知症カフェは美術館が主催しているのではない。地域で福祉に関わる人たちが、美術館を活動場所に選んでいるとのことであった。

6. 共催企画とアーツカウンシル

2019 年から 3 年間実施した「まるびい Art-Complex」は、美術館広場でのフードマーケットや、ワークショップ、パフォーマンスの主催者を市民から募る公募事業で

ある。そういった共催企画の公募事業に、障害がある人の関わるグループからの応募があった。

応募に慣れていない人も多く、企画内容が十分に言語化されていない場合もある。そのようなときは「まずは A4 一枚にまとめて」などアドバイスをしてきた。このように、まずは企画書を書き、リアライズしていくことで、企画を立ち上げるプロセスの練習にもなる。当初は、美術館の交流課で対応していたが、今年度からは、本格始動したアーツカウンシル金沢が、このような応募者へのアドバイス役を引き受けることも可能だ。黒澤さんは「ひとつ企画ができあがれば、その後は美術館にかぎらず、別の場でも出来るようになっていく」とのことであった。

7. 都市間の芸術交流と障害のある人の関り

パフォーマンスアーツの主催企画でも、美術館に留まらないつながりが生まれる仕掛けがある。コンテンポラリーダンスユニット「コンドルズ」を率いる近藤良平による、埼玉の彩の国芸術劇場・埼玉車椅子ユーザーなど障害がある方との舞台作品の金沢公演においては、事前ワークショップを通して選ばれた金沢市や近隣在住の障害がある人たちも、一緒に舞台へあがった。近藤さんの演出アシスタントに金沢在住のダンスアーティスト、なかむらくるみ（注 11-4）が入り、細やかな対応となった。現在、なかむらさんは、神戸のアーティストインレジデンスに参加し、同地で長年、障害がある人もない人も一緒に行う即興演奏グルー

ブ・音遊びの会（注 11-5）とともに活動し、さらに 2023 年には石川県での国民文化祭・障害者芸術・文化祭を機に同会を金沢に招いて地元のステークホルダーを交えながらの活動展開を計画している。

8. 一緒に働く仲間、同じ街に暮らす人として

一緒に働く仲間に障害のある人がいれば「お互いに、コトをおこしていく相互理解が、より促進されるだろう」と、吉備さんは考えている。「ごちゃまぜにやってみる」経験を経て、より豊かに生きていく環境を一緒に考えて行くには、仲間は重要であるだろう、組織にいる立場から「既存の枠組みの先に

何かがあるのではないかと思う」という。

ちょうど調査者訪問時、福祉実験ユニット「ヘラルボニー」による新たなプロジェクト「lab.5 ROUTINE RECORDS」展が同館デザインギャラリーで開催されていた。「金沢市内の特別支援学校や福祉施設、他県の福祉施設に通う知的障害がある人が習慣的に繰り返す、日常の行動（ルーティン）から生まれる音を丁寧に紡ぎ、音楽として届ける試み」である。DJ ブースもあり、鑑賞者が音楽づくりに参加できるしかけもあった。

黒澤さんは「美術館のみならず、金沢にはさまざまな“障害者等の芸術活動”に関わる実践があるが、それが多くの人に知られているわけでない。そうした実践が、たくさんの人に知られると良いし、そのための

舞台の一つが、不特定多数の人が集まる公共施設なのではないか。存在を見えるようにするという施設としての役割が（美術館には）ある」という。また「美術館などの公立施設だけでなく、アーツカウンシルのような機関が、さまざまな実践のメディア（媒介）となってもいい」ともいう。2023 年には石川県で国民文化祭・障害者芸術・文化祭の開催が予定されている。これまでの取り組みが生かされ、さらに新しい動きが加わる機会になりそうだ。

この調査を前に吉備さんと黒澤さんは公立の金沢 21 世紀美術館は「社会包摂的な取り組みにおいて、担当が必要を感じてやろうとすることを、やるなどはいわれないところ」であり、かつ、ベーシックなところで「公共性のアドバンテージ」を持っている。一方で「それは権力でもある」という認識は重要、例えば「すべての対象者を選ばず、みんなにリーチできない時に、では誰がその選択をすることになるのか？」などについて話し合ったという。（注 11-6）

金沢 21 世紀美術館においては、美術館が主役でなくて、そこに集う人に働きかける活動を表すために「みんなと美術館」という言葉を用いている。私と美術館、あなたと美術館の延長線上にあるものとして「みんなの美術館」だけではなく「みんなと美術館」でもあるのだ、とのことであった。

【感想】

美術館と市民の関り方の中に、障害がある方も含まれているということに、あらためてきづかされた。個人的に館レストランでの若年性認知症カフェが大変興味深く、「何が差異化されて、何に結びつけられるのかは、日常生活の技術的な詳細に依拠している。」（アネマリー・モル『ケアのロジック』2020：138（原著 2008））という一節を思い出した。



【図 11-2】「lab.5 ROUTINE RECORDS」展示風景（2022 年）撮影：中川暁文 写真提供：金沢 21 世紀美術館

(注 11-1)

金沢アート工房は、石川県内のデザイナーや作家が集まり、障害がある人の才能を発掘、創作活動を手助けし、発表の機会を作る事により作品を介して社会との接点を導き出し、ひとりのアーティストとして自立を支援することを目的とする。2007年4月に正式に開設。2008年より金沢市委託事業として活動。

参考：<http://www.kanazawa-art.jp/>

(注 11-2)

ダイアログ・イン・ザ・ダークとは、案内役を視覚障害者がつとめる暗闇”の中で、視覚以外の様々な感覚やコミュニケーションを楽しむソーシャル・エンターテインメント。

参考：<https://did.dialogue.or.jp/>

(注 11-3)

徘徊とは「どこともなく、あるきまわること」。認知症に対する誤解や偏見を招く恐れがあるとされているが、ここでは様子を示すため、調査者はこのまま用いる。

(注 11-4)

石川県金沢市生まれ。Rambert School of Ballet and Contemporary DanceにてDiploma取得。帰国後、福祉施設等で「だんす教室」を定期開催。2018年イタリアにてDance Well Teachers Courseを修了し、国内外でダンス・ウェルクラスを実施している。

ソコニダンス主宰。

参考：<https://sokonidance.com/>

(注 11-5)

2005年結成、知的な障害のある人を含むアーティスト集団。月2回のワークショップを地元、神戸にて継続中。日本各地、イギリスなど遠征公演も多数開催。楽譜や決まりごとはなし、演奏スタイルや表現のジャンルを超えた自由な即興演奏を基本に様々なアンサンブル

を生み出している。

参考：<http://otoasobi.main.jp/>

(注 11-6)

調査者は、この発言を本調査の核心に関わる一つと考える。しかし訪問時に深めることができなかった。今後の課題としたい。

【調査概要】

実施日：2022年11月29日（火）

場所：金沢 21 世紀美術館 学芸部

【調査対象者】

黒澤伸（くろさわしん）

アーツカウンシル金沢統括ディレクター、金沢市民芸術村総合ディレクター。水戸芸術館現代美術センター教育普及担当を経て、1999年より金沢 21 世紀美術館の立ち上げ、開館以降は教育普及を担当。2009年から2018年まで金沢湯涌創作の森所長、以降2021年まで金沢 21 世紀美術館副館長を経て現職。

吉備久美子（きびくみこ）

金沢 21 世紀美術館学芸部交流課 エducator。2003年金沢 21 世紀美術館建設事務局へ入局し、2004年より現職。美術館が共生社会の一つのコミュニティとしていかに機能するか、芸術文化を通じた社会参加の実践と地域連携に取り組んでいる。

【参考資料】

金沢 21 世紀美術館,2020『みんなの美術館 みんなと美術館 金沢 21 世紀美術館×手話×ろう者 活動のあゆみ』。

金沢 21 世紀美術館,2021『みんなの美術館 みんなと美術館 来館しやすさと楽しさを考える 10 のレッスン 聞こえない・聞こえにくい・聞こえる人がともに活動した記録』。

金沢 21 世紀美術館,2018『カナザワ・フリンジ 2016-2017 記録集』。



活動のあゆみ



10 のレッスン



フリンジ

長野県立 美術館

文：福島尚子

道路のそこそこに雪の残る1月でも、城山公園には親子で、一人で、それぞれの時間を過ごす人たちがみられる。“屋根のある公園”として2021年にリニューアルオープンされた長野県立美術館で、善光寺の夕景をバックに学習交流係の木内真由美さん、青山由貴枝さん、柄澤初音さんにお話を伺った。

1. 礎となった長野県信濃美術館時代

繰り返しになるが、長野県立美術館は長野県信濃美術館から改称して2021年春にリニューアルオープンした新しい美術館である。現在は学芸課全体で14名、そのうち学芸員として雇用しているのが10名、司書が1名、ラーニングプログラムの専門家として位置づけられている学芸専門員が3名いる。長野県信濃美術館時代には学芸員は約6名、「人数が少ないからこそ教育普及の取り組みは学芸員が全員であっていた」と木内さんは振り返る。中でも特色のあったのが県下の小中学校に赴いたアウトリーチと、文化庁の助成金を得て2015年から5年にわたって実施した「触れる美術（彫刻）展」である。どちらも収蔵品の紹介から始まった歩みであるが、「触れる美術」は触れられれば良い、というものではない。当初は収蔵作品の中から展示する作品を選んでいたが、より形や表現形態に触れる面白さを感じられる作品や触れる美術に関心の高い作家の作品などを借用して実施するようになる。

また、当時抱えていた困難として物理的な施設のバリアの高さがあった。長野県信濃美術館時代は、入館するには階段を上る必要があり、重たい車いすでの上下階への移動にはバックヤードを通る必要があるなど、決してアクセシビリティの高い施設ではなかった。

このような美術館の取り組みと、ハードの困難さ、そして昨今のバリアフリーに対する意識の高まりが噛み合ったことによって、長野県立美術館をアクセシビリティの高い施設にしていく方針が定まったと言える。

2. 屋根のある公園として

長野県立美術館のアクセシビリティの高さによって、今まで美術館を訪れなかった人たちが足を運ぶようになった。美術館の周りを取り囲んでいた善光寺のヒマラヤ杉の林立によって存在すら気づかれなかった本館には無料で観覧できるアートラボ、オープンギャラリーなど学習交流係が携わるエリアが新設された。美術館が城山公園と一体化することで、「屋根のある公園」という言葉が美術館のアイデンティティとして育っていく。展覧会を目標にきた人に、ふらりと公園に遊びに来た人にも優しい、パブリックスペースとしての空間となった。また、傾斜地に沿うように建てられた美術館は、福祉車両の駐車場が1階から3階すべてに設置され、どの階からでも入れるようになった。車社会である長野県ゆえに来館には自家用車を使う人が多く、特別支援学校などから車で来館する団体も多い。バス

も停めやすい環境になったことで、アクセシビリティ向上を実現させた。青山さんは「団体鑑賞に来た方が、行きやすく過ごしやすいことを口コミで伝えてくれることが、次の来館につながっている」と述べる。施設が新しくなったこともあるが、アクセシビリティの良さも、安心感、ひいては行きたくなる施設につながっているのだと言える。実際に長野県立美術館を訪れると、廊下や階段のスペースがゆったりと設けられていることに気づく。大きな窓からは公園や善光寺を臨むことができ、開放感も感じるが、段差が少なく、ベビーカーや車いす、杖などを使っても通行したりすれ違ったりしやすいことなど、細かな工夫が詰まっていることに気づくだろう。

3. 建て替えのタイミングで出来たこと

このような美術館が実現したことには、やはり美術館の新築が大きく作用している。長野県信濃美術館時代に積み重ねてきた触れる美術展をはじめとするアクセスしづらい人たちに対する姿勢、「障がい者をはじめとするあらゆる人にやさしい施設に」とする県議会など行政部門の方針、そして美術館を設計する建築家がアクセシビリティやバリアフリーに前向きに取り組んでくれたことの大きく3つの要因が重なっている。建て替えを機に、文化財を展示できる「公開承認施設」としての美術館の機能を高めるとともに、視覚に限らない様々な感覚を使って鑑賞するアートラボやオープンギャラリーを2階と1階の無料エリアにレイア

住所 長野県長野市箱清水 1-4-4
〒380-0801
電話 026-232-0052
ファックス 026-232-0050
URL <https://nagano.art.museum/>

ウトした。また、触地図や触覚で鑑賞する体験ツールを作成するなど、大きな決定から細かな制作物まで、立ち上げ時にできることをどんどん進めていったという。木内さんは建築当時を振り返り、「建築を担当したプランツアソシエイツの宮崎 浩氏らの理解があったことが大きかった」と述べている。長野県立美術館を建てるにあたり、近隣地域の人たち、学校、視覚をはじめ障がいのある人たちとのワークショップを何度も繰り返し、対話をしながら設計を進めていったことは、大きな特色である。美術館に訪れるであろう人たちの声に耳を傾けると同時に、指定管理者（一般財団法人長野県文化振興事業団）として実際に運営していく美術館の職員の要望も受け入れられることで、機動力の高い施設になったこと、そのような作り方を長野県が推してくれたことも美術館建築の大きな特色であり強みであると言える。

市民からの声が美術館の運営に反映された一つの例として、家族に障がい児のいる人から「寝台式車いすのまま鑑賞できる作品があればいいな」という声があった。試行錯誤の末、映像作品の2作、榊原澄人《飯縄縁日》とユーフラテス《1本の線》の委嘱につながったという。これは、「みんなのアートプロジェクト」として、美術館の建て替え時に実施したクラウドファンディングを行ったプロジェクトの一環である。このクラウドファンディングは、美術館の無料エリアの作品を制作することを目的としていたが、そこには、作品に触れたり、音を聞いたり、身体のあるゆる感覚を使って作品を感じることで、誰もがアートを身近

に感じる場づくりを、という意図が込められていた。

その他のオープン時の取り組みに、富長敦也「Love Stone Project-Nagano」がある。これは、美術館建設時に掘り出された巨大な石を来館者がダイヤモンドペーパーで磨く、というものである。美術だとか、作品だとか、リニューアルオープンだ、といったことは一旦脇へ置いて、老若男女がただひたすら楽しそうに石を濡らしてダイヤモンドペーパーで磨く。誰もが参加でき、比べたり競ったりせず、自分のペースで自分なりの楽しみを見つけていく、というプログラムが、アクセシビリティに力を入れた長野県立美術館のオープニングらしい企画となった。そして、美術館に来る人の顔を見るだけでなく、来られない人やまだ訪れていない人へ想像力を巡らせることも、長野県信濃美術館時代から培ってきたスキルであるだろう。

4. 事業の精査

美術館の改築中に学習交流係が行った大きな改革は事業の精査である。つまり、今までやってきたアウトリーチや「触れる展示」をはじめとするインクルーシブな取り組み、ラーニングプログラムを見直すことだった。

例えば、ベビーカーを押したまま展示室でのギャラリートークに参加できるベビーカーツアーは継続事業とし、触覚を鑑賞に取り入れる「ふれるアートカード」【図12】を作成するなど、事業を一つ一つ検証して

いった。どれを残し、どれを始め、どれを整理するかを学習交流系のメンバーを中心に話し合っ決めていった。

整理をした代表的な事業がアウトリーチである。長野県は全都道府県中で4番目の面積を有しているが、長野県信濃美術館ではアウトリーチに力を入れており、時には往復5、6時間をかけて県内全域の学校に赴いていた。学芸員にとってやりがいがあり、学校からも好評であったが、長野県立美術館のオープンをきっかけに、アウトリーチ事業は院内学級と特別支援学校とした。普通学校に対しては代わりに教員が美術館の団体鑑賞時に案内ができるような解説ツールや鑑賞キットを作成し、事前学習のアニメーションも作成したほか、教員向けの研修として

ティーチャーズデイを設定した。

アウトリーチの対象を絞り込んだ一方、特別支援学校への対応はより細やかなものにした。例えば特別支援学校から美術館へ団体鑑賞で訪れる場合、教員と話し合いながら児童・生徒の個性・障がいによってオリジナルのプログラムを組み立てる。鑑賞を中心にするのか、体験を取り入れるのか、また、それはどのような内容にするのか。体力に心配があれば鑑賞を中心にしたたり、体験メインであっても集中力が途切れた場合には外に出て気分転換できたり、と一つ一つのケースにカスタマイズしながら対応することで、必要なサポートを必要とする人に届けることができるようになった。

5. 障がいのある方のための特別鑑賞日

事業を精査し、新たに誕生した事業の一つが特別鑑賞日である。これは、障がいのある方がより安心して美術館に訪れることができるよう、展覧会会期中の休館日に特別開館する日である。同様の取り組みは、国内では東京都美術館や国立新美術館がパイオニアとして実施している。今回のリニューアルにあたり、各地の美術館のプログラムのいいところをどんどん取り込もうと視察し、学習交流係の中からも「ぜひ長野でも特別鑑賞日を設定しよう」という声があがりスタートした。

2022年度に実施したのは9月7日（水）。企画展を開催する展示室1・2・3では「ジブリパークとジブリ展」が開催されており、連日多くの来場者でにぎわっていた。とは



【図12】ふれるアートカード
(いずれも福島尚子 2023年1月6日撮影)

いえ、この展覧会は長野県立美術館だけでなく、新聞社などやテレビ局も出資する共催展である。入場無料の特別鑑賞は入場料収入がないにも関わらず、展示室の監視員などの配備は必要であるため、共催相手にも理解を得る必要があったが、幸いにも社会的意義に共感してくれたことで、無事に開催を果たせた。

木内さんは、「お客さんが一番来る展覧会は、お客さんが一番行きづらい展覧会だ」と話す。展覧会に興味はあっても、混雑している環境では行きづらいと感じる障がいのある人たちも多い。そんな展覧会こそゆっくりと楽しんでほしい。結果として、この年の特別鑑賞日は230名の動員に上った。

この年、特別鑑賞日だけ館内に置かれたものがある。『となりのトトロ』に出てくるねこバスとトトロのぬいぐるみである。青山さんは、特別鑑賞日を控えたある日、視覚障がい者の方との会話の中で「『となりのトトロ』に出てくるバスって、猫なの？バスなの？」という質問を受けた。アニメは何度か見たことがあるが、触れないし、言葉で聞くだけではわからないので、触れるものがあれば嬉しい、とのことだった。実際に乗れるねこバスのレプリカは展覧会でも展示されているが、24人乗りの巨大な展示品に触るだけでは、視覚障がい者にとって全体が掴みづらい。そのため、ぬいぐるみサイズのねこバスは、「ねこバスとは？」という疑問に答えるのにちょうどよいツールだったのだという。この日のみ展覧会に設えられた職員私物のねこバスのぬいぐるみは、来場者に好評で満足度も高かった。

また、青山さんは「特別支援学校の団体

鑑賞を体験した人などから、車で来館しやすいこと、障がい者フレンドリーな施設だということが口コミで広がり、事業所単位での団体鑑賞も増えている。団体で来られるケースは受け入れ態勢が大変なように見られるかもしれないが、ヘルパーさんは福祉の専門家だからいてくれることで自分たちにも安心感がある」と話す。

また、特別鑑賞日に先駆けて、職員向けのインクルーシブ研修を行い、当日は職員全員で監視や対応にあたり、アート・コミュニケータも案内に入る。休館日に特別開館する経費を抑える目的もあるが、「障がいのある人との接点は学習交流係」と分断するのではなく、美術館で働く職員一人一人に自分ごととしての認識を持ってもらうという意味も込めている。

6. 規模が大きくなったからこそできたこと・難しくなったこと

長野県信濃美術館から比較して、長野県立美術館は美術館の面積も、職員の数も増えた。企画担当・コレクション担当・ラーニング担当とセクションが3つに分かれたことで、それぞれの業務も専門化された。長野県立美術館が障がい者フレンドリーな施設となり、学習交流係の存在感が際立つ一方で、アクセシビリティについては学習交流係に任せればよい、という態勢にならないようにしていくことが重要だ、と木内さんは話す。もちろん、アクセシビリティへの関心の濃淡は人によって違う。けれど、車いすの使い方や、声かけの工夫について

も、見知らぬ誰かのためではなく自分ごとにしていくことで、少しでも関心を高めてもらいたい、というのが青山さんの本心だ。訪れる人にも、働いている人にも、アート・コミュニケータとしてボランティアにかかわってくれている人たちにも働きかけていくことが、学習交流係には求められている。

作品の感じ方には正解がない。作家も常識にとらわれない人たちである。さまざまな人たちがそれぞれに楽しめる場所でありたい、という思いを学習交流係として共有しながら、その輪をどんどん広げていくトライを続けている。

【感想】

ラーニング担当は一人ないし二人、という美術館も多いが、長野県立美術館では5名が補完し合いながら活気あるチームビルディングを行っている印象を受けた。美術館の建設、事業見直しが同時期に起こりながら、ロングパンの観点で提案・取捨選択していくことは一人ではなかなか難しいことだろう。また、いろんな特性の人に、柔軟に対応していく柔軟性のあるアクセシビリティのあり方も、チームとして機能していることととてもフィットしているように感じた。

【調査概要】

実施日：2023年1月6日（金）

場所：長野県立美術館 レセプションルーム

【調査対象者】

木内真由美（きのうちまゆみ）

長野県立美術館学芸課学習交流係係長主査学芸員。東京都内での学芸員を経て、2004年より一般財団法人長野県文化振興事業団入職。長野県信濃美術館・長野県伊那文化会館を経て、長野県立美術館。一貫して、あらゆる人に美術を気軽に楽しんでもらえるよう、アウトリーチや来館・鑑賞の障がいを軽減する普及啓発事業に取り組んできた。現在は、学芸課学習交流係長主査学芸員。

青山由貴枝（あおやまゆきえ）

長野県立美術館学芸課学習交流係学芸専門員。日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻卒。須坂版画美術館・平塚運一版画美術館学芸員を経て、2018年より現職。美術館を拠点にアートと人をつなげる方法を研究しながら、子どもから大人まで、障がいの有無を問わず、誰にでもひらかれた美術館の実現を目指している。リニューアル時に作成された「ふれるアートカード」には青山さん制作の銅版も含まれている。

柄澤初音（からさわはつね）

長野県立美術館学芸課学習交流係学芸専門員。富山大学芸術文化学部芸術文化学科地域キュレーションコース卒。2022年より現職。学校団体鑑賞を中心に、院内学級や特別支援学校の対応などを担当している。

【参考資料】

長野県信濃美術館,2016,『館報』No.18.

長野県信濃美術館,2017,『館報』No.19.

長野県信濃美術館,2018,『館報』No.20.

長野県信濃美術館,2019,『館報』No.21.

長野県信濃美術館,2020,『館報』No.22.

長野県信濃美術館,2021,『館報』No.23.

長野県立美術館,2022,『館報』No.24.

坂口千秋「スタッフエントランスから入るミュージアム(6) インクルーシブ・プロジェクト 学習交流係——美術館を安心して通える場所へ」『artscape』https://artscape.jp/report/topics/10177578_4278.html（閲覧日2023.1.10）

“公立美術館における 障害者等による文化芸術活動” 令和4年度調査から見た10のテーマ

文：中西美穂

私たち（中西美穂、蔵原藍子、中川眞、福島尚子）は、令和4年度文化庁・障害者等による文化芸術活動推進事業「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を推進させるためのコア人材のコミュニティ形成を基軸とした基盤づくり事業」の一環として、2022年9月から2023年1月にかけて、日本の公立美術館12館（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、徳島県立近代美術館、三重県立美術館、福岡アジア美術館、福岡市美術館、兵庫県立美術館、茅ヶ崎市美術館、新潟市美術館、世田谷美術館、東京都美術館、金沢21世紀美術館、長野県立美術館）を、手分けして訪問し、“公立美術館における障害者等による文化芸術活動”についてインタビューを基軸にした質的調査を行った。その総括として2023年2月2日に、一般社団法人HAPS事務所にて座談会形式の“ふりかえり”としてリサーチ結果を分析し、10のテーマを抽出した。ここでは、そのテーマの概要を記し、本調査のまとめとしたい。

1. 公立美術館における障害者等の芸術活動の地域性

地域ごとに特性があり、どの館においても多様な取り組みの工夫が見られた。都市型や地域型、広域的な地域性の特徴があるようにも思えた。

2. 公立美術館における“障害者等”とは誰か

法律によれば「障害者」とは「障害者 身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」（障害者基本法（昭和四十五年法律第八十四号）の第二条第一号）である。障害者を対象とする事業の対象者には「就学前の幼児」「外国人」「高齢者」「車椅子ユーザー」を含む事例が複数あった。また、経済的バリア、ベビーカートアー、院内学級への言及があった。公立美術館における“障害者等”とは、法律上の「障害者」に加えて、就学前の幼児（とその保護者）、外国人、高齢者、経済的バリアがある人、入院中の患者と考えることができる。

3. 公立美術館の芸術活動における障害者等のポジション

表現者、被写体、鑑賞者、プログラム参加者、ボランティア、講師、ファシリテーター、企画展協働者など、館により異なるが、障害がある人には、美術館において、さまざまなポジションがあった。

4. 公立美術館における障害者等の芸術活動を担当する学芸員のポジションとキャリア

調査者側より美術館代表に“障害者等の芸術活動”を調査したいと打診したところ、12館全てにおいて、教育普及（アートコミュニケーション、交流課も含む）担当者を紹介された。このことから、公立美術館において“障害者等の芸術活動”は、教育普及の管轄であるという認識が強いといえるようだ。また企画系と教育普及系の学芸員の役割が重複する館と、分業する館があった。分業する館の一部においては、両者に企画推進に関する分断があるように感じた。

教育普及担当者のキャリアにおいて複数の美術館や事業を経験してきた人達と、地域において経歴を積み上げてきた人達がいた。また、他館の教育普及に移動した事例を何例か聞いたこともあった。美術館外も視野に入れた将来のキャリアについては話題にならなかった。

5. 美術館建築と障害者等の芸術活動

教育普及系の活動のための専用空間（アトリエ、スタジオ、創作室等）がある館とない館があった。館内の専用空間は障害者等への芸術活動との親和性が高いと感じる事例が複数あった。また、展示空間において、さまざまな状況の鑑賞者への配慮がある展示構成を採る事例があった。

6. 公立美術館における障害者等の芸術活動に関する経済基盤

障害者等の芸術作品の作品購入についてクラウドファンディングを活用した事例があった。それ以外の購入については話題にならなかった。また障害者等の芸術活動に関わる事業予算が、美術館予算だけでは足りず、助成金を活用している館が複数あった。これらのことから、公立美術館における障害者等の芸術活動に関する経済基盤が充分ではなく、かつ口外しない慣例があるように思われた。

7. 公立美術館における障害者等の芸術活動にまつわる“ことば”

アールブリュット、アウトサイダー・アート、障害者アートなど、表現についての複数の呼び名がある。また、いくつかの館で、それらに焦点をあてた展覧会が1980年代より断続的に開催されており、それぞれの担当学芸員による言説があった。

自治体の文化に関する条例、美術館設置規約、ミッションについて、言及する館と、そうでない館があった。また博物館法、障害者による文化芸術活動の推進に関する法律、文化芸術基

本法、文化芸術計画については話題にならなかった。ICOM については一部でのみの簡単な言及があった。

美術展や作品に関する手話表現、UD トーク、筆記また点字による情報宣伝についての取り組みが一部に見られた。

8. 公立美術館における障害者等の芸術活動にまつわる連携

館内、行政、敷地を共有する文化施設、所轄する自治体が同じ文化施設や文化財団、アーツカウンシル、学校、大学連携（大学、ゼミ、研究者等）、地域の福祉施設等（民間福祉作業所、病院等）地域住民などとの連携が、各館それぞれに見られた。計画的に連携に取り組む館がいくつかあった。

9. 公立美術館における障害者等の芸術活動にまつわるプログラム導入方法

地域の学校を対象とする鑑賞会などから、特別支援学校につながるケースがいくつかあった。また、障害の特性ごとにメニュー化されているプログラムもあるが、いくつかの館では多様で複合的な立場にも配慮した、どのような方でも参加できる鑑賞プログラムに取り組む事例があった。展覧会づくりに、障害者等が関わる事例さえもあった。

なお障害者等を対象にしたプログラムの参加者総数が、一般のプログラムと比べ少ない傾向があるが、年単位の時間をかけて波及効果の高い次なるプログラムに展開する事例はある。

10. 公立美術館における障害者等の芸術活動から考える〈美術館〉

インタビュー調査において、美術館がユニバーサルの実験場であり、これが市民の生活空間につながっていけば、美術館は社会教育施設としての価値を持つ（徳島県立近代美術館）、公立美術館は社会包摂的な取り組みへの許容があり公共性のアドバンテージが高い（金沢 21 世紀美術館）、見るだけじゃなく多くの人に美術の展覧会を開く可能性を持ちたい（茅ヶ崎美術館）など、障害者等の芸術活動から〈美術館〉そのものを考える言説が見られた。

以上をまとめとする。どのテーマにおいても継続的な調査を多角的に行うことで、さらに明らかになることも少なくないだろう。わたしたちのみならず、美術館内外の研究者等が各々に探求していくことが理想である。

令和 4 年度の調査から見えた 10 のテーマは調査者側から見出したものである。本報告書の発行を足がかりに、今後さまざまな立場の人々とともに議論をひらき深める機会があればと思う。

さいごになったが訪問させていただいた公立美術館関係者の皆様に心から感謝したい。全ての館において、公立美術館の障害者等の芸術活動に関わる現場の立場からの、貴重なお話を聞かせていただいた。またレポート作成時においては、各館担当者に丁寧なやりとりを重ねるような校正作業をしていただいた。このような協力がなければ、本調査は成り立たなかった。感謝にたえません。



【図 13】 HAPS 事務所での座談会形式“ふりかえり”風景
撮影：山根香

令和4年度

障害者等による文化芸術活動推進事業
公立美術館における障害者等による
文化芸術活動を促進させるための
コア人材のコミュニティ形成を軸とした
基盤づくり事業リサーチチーム



【図14】リサーチチーム：左から、福島尚子、中西美穂、藏原藍子、中川眞 撮影：山根香

プロフィール

藏原 藍子（くらはらあいこ）

一般社団法人HAPS 事務局長。展覧会運営および企画制作等を経て、2013年より東山アーティスト・プレイスメント・サービス(HAPS)事務局にて、京都市内で活動するアーティストの支援やアートと共生社会に関する事業等を行う。2017年8月より現職。

中川眞（なかがわしん）

音楽学者。大阪公立大学都市科学・防災研究センター特任教授。ガムラン合奏団《マルガサリ》創設者。著書に『平安京 音の宇宙』（1992年）、『サウンドアートのトポス』（2007年）、『アートの力』（2013年）など、編著に『これからのアートマネジメント』（2011年）、『受容と回復のアート』（2021年）、『Voices from A』（2022年）など。京都府文化賞、サントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞、日本都市計画家協会賞特別賞、佐治敬三賞〔共同〕などを受賞。

中西美穂（なかにしみほ）

文化研究者。国立民族学博物館外来研究員(2022年度)、大阪人間科学大学非常勤講師、元大阪アーツカウンシル統括責任者。編著に『ブック・アートをめぐって』（2015年）、主な論文等に「大阪アーツカウンシルの現場から：包括的な文化振興の基盤構築にむけて」（2019年）、「私たちのフィリピン：1980年代日本の女性グループ「カラヤアン関西」をめぐる一考察」（2018年）、「病院におけるアートマネジメント「アーティスト@夏休みの病院」を事例に」（2014年）など。

福島尚子（ふくしまなおこ）

アートコーディネーター。2008～2011年京都芸術センター、2011～2014年大阪市立こども文化センター、2014～2017年愛知県芸術劇場、2017～2022年アーツカウンシル新潟などで、パフォーミングアーツの企画制作や助成事業の伴走型支援にかかわる。2013年～2017年「My 奈良」、2015年度メセナライター（公益社団法人企業メセナ協議会）でライターとしても活動。2022年4月より大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程に在籍。

令和4年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるための
コア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業

主催：文化庁・一般社団法人 HAPS

令和4年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるための
コア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ報告書

発行日	2023年3月31日
発行元	一般社団法人 HAPS
執筆	中西美穂、福島尚子、中川眞
編集	中西美穂、藏原藍子
アートディレクション、デザイン	山本洋明
リサーチチーム	藏原藍子、中川眞、中西美穂、福島尚子

著作権法で定められた範囲を除き、本書の無断での複製、複写、転載を禁じます。

HAPS

一般社団法人 HAPS

京都市東山区大和大路通り五条上る山崎町 339

TEL 075-525-7525 | FAX 075-525-7522

haps-kyoto.com